
ヴァーミンズ・クロニクル

蠱毒成長中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァーミンズ・クロニクル

【Zコード】

Z8961V

【作者名】

蠱毒成長中

【あらすじ】

俺の名は辻原繁。ツジハラシゲル

生まれてこの方真面目かつ真っ当に生きてきた学生だ。いや、それは誇大的か？

まあいい。兎に角毎日真面目に健全な学生生活を送っていた俺。今日は休日を使って事で都会の街へ遊びに出ていた。

そして昼頃、それは唐突に起こった。突如謎めいた光の巻き添えを食らった俺は、奇妙な空間を流れながら気を失い、気付けば見知らぬ部屋に居た。

暫くして戻つて来た部屋の主・コリンナ王女の話を聞くに、ここは地球でない異世界『カタル・ティゾル』で、俺はこいつに魔術で召喚されたんだと。

妙な話かもしけねえが、本当にそんなんだから仕方ねえわな。んで、何時までも混乱してたつて仕方無えなと思つた俺は、王女に召喚した理由を聞いてみた。

すると返ってきた答えが「お前を下僕にするためだ」と…？
おいおい、リアル生活も上手く行つてたつてのにそんなのありかよ！？

これからどうすりや良いってんだ！？

『なるう』史上最も人気の振るわない男が送るわちゃめちゃ異世界ファンタジー、ここに開幕！ 2011・9・27 ペース
低下ながら更新再開いたしました

第一話　辻原繁の失踪

現代・日本国内中国地方某所

「いやあ、補講も代講も無いごく普通の休日つてのは良いねえ」

都心部を意氣揚々と歩く長身瘦躯に眼鏡の青年。

彼の名は辻原繁。動物行動学を専攻する20歳の大学生である。専門は昆虫学だが、動物全般に対する愛が強く「文明と自然は距離を置いて共存すべき」という考えの持ち主である。

こういった性格故に、時たま動物相手に人間のように接する事もある（あくまで半ば冗談のようなものなのだが）。

更に元々思い遣り深い性格の彼は家族や友達など、身の回りの人々も心から愛し敬う事を美德だと信じている。

また、真面目な性格で気遣いも上手い為学校での評判もそれなりに良く、奇行が玉に瑕の好青年として中々に名の知れた存在でもあった。

彼は現在、補講・代講の無い純粹な休日を堪能していた。というのも、彼の大学ではここ最近教員の事情により平日の休講が相次ぎ、その補講や代講を毎週土曜に開いていた。

日曜は別件で午前中の大半を消費する辻原にとって、土曜日には若干特別な思い入れがあつたのである。

「さて、それじゃ今日は何処に行くかな

等と地図を片手に考え込む辻原。

財布の中身や脚の具合から大方の予定を立てる彼は、洒落た飲食店

での食事や路線バス・路面電車・タクシーによる移動を行わない。移動は基本的に自転車と電車を用い、運転免許は持っているが専用の車を持っている訳ではないので移動手段として乗用車を用いることはない。

自転車・電車の管轄でない場所は基本的に徒歩である。

これらは全て、彼が有り金をなるべく趣味に使い込みたいと思うが故であり、それ故に彼は飲酒・喫煙・賭博の類にも手を出したことはない。

酒は元々好きではなく（寧ろ生徒時代自宅で食べたラムレーズン入りアイスに不快感を抱くほど）、煙草に至っては「毎日の煙草より月一のコカイン」という科学理論に基づきそもそも根底から忌み嫌う傾向にある（だからと言ってスマーカーであるという理由だけで他人を罵るような事は無いが）。

賭博を否定する考え方は幼い頃両親に教え込まれた事もあって筋金入りの域に達しており、テレビCMで魅力的なプロモーション・ヴィデオが流れるとそれに興味を示すも、それがパチンコ・パチスロの宣伝用に作られたものだと判るや否や途端に落胆する程である。

予定を考えながら歩みを進める辻原。

しかしその一方では、何も知らない辻原を巻き添えにある出来事が起こり始めていた。

同時刻・異世界カタル・ティゾル

何処にあるかも判らない次元の壁を越えた場所にある、我々が暮らす浮世とは違う異世界カタル・ティゾル。

世界の根底に超自然的エネルギー、所謂『魔力』のようなものの概念が根付き、それに伴つて生物相も大きく異なるといふ、我々現代人の知識の斜め上を行く世界。

その一大陸、まるで中世西洋を思わせる分化の根付く大陸ノモシア。そしてノモシアを支配する王国エクスーシアの首都中枢部に鎮座するのは、代々国を治める国王家の住まうテリヤード城。

辻原を巻き添えにする出来事を引き起こし始めたのは、この城に住まう国王の一人娘コリンナ・テリヤードであった。

テリヤード城・コリンナの自室

起伏の無い細い身体に豪奢なドレスを着込み、白金色の長いツインテールを棚引かせた王女コリンナ・テリヤードは、異世界の様子を鮮明に映し出す巨大な鏡を覗き込みながら、何かを呟いていた。

「遂に見付けたわ……こいつよ……この男よ……。

この男なら間違いないわ……そう……この男なら……」

コリンナは、しゃがみ込んで上質な木材で作られた床材を素早く指でなぞつていく。

彼女の指の跡は白く光る線となり、奇妙な円陣を描いていく。

円陣を完成させたコリンナは、立ち上がって解読不能な言葉を詠唱し始めた。

そして彼女の詠唱に合わせて、円陣は脈打つように光を増していく。

「（もつすぐ……もつすぐよ……もつすぐ私だけの忠実な下僕が……）」

同時刻・日本国内中国地方某所

「…………うん、これは中々に良いな。やっぱじこの会社は安定したものを作る」

発売されたばかりの飲料を飲みながらそんな事を言つ辻原は、休憩所のベンチでくつろぎつつ、街の風景を眺めていた。

一分ほどして、『ミミ』を処理しようかと辻原が立ち上がった、その時。

フヴォウン！

「！？」

突風が吹き荒れるかのような音がしたかと思つと、辻原の背後に何やら光り輝く球体のようなものが現れた。

光の球体を元手に薄い光の板のようなものが舞つており、その姿は神秘的かつ幻想的であった。

「な……何だ？一体何事だ……？」

咄嗟の出来事に驚いた辻原は慌てて周囲を見渡すが、どういうわけかその存在に気付いているのは辻原だけらしく、周囲の人間は寧ろ

慌てふためく辻原に驚く始末だった。

「（もしかして）の光る球体……俺にしか見えてないのか？
全く……何処の世界のファンタジーだよ、こんなもん……」

等と考え込みながらも、辻原はコンビニで買った食料を頬張る。

「（とりあえず）こののは、無視するのが一番だと相場が決まつてゐる」

根拠は無いがそうする他無いだろうと考へた辻原。
しかし世の中、そう何もかも上手く行とは限らない。

光り輝く球体のようなものは次第に肥大化していく、遂に必死で無視を決め込んでいた辻原をも巻き添えにする。

「（…………ん？ 何だこりゃ…………？ やばいか？ 流石にやばいか？ いや、確認するまでもなくやばいよなコレ？
そして何でこういつ時に限ってカップ麺作つてんだ俺？ 何でカップ麺チヨイスしてんだ俺！？ しかもうどんだから五分くらいかかるわー）」

そして、次の瞬間

「（畜生、一分余計なんだよー！ そしてうどんを選ぶ俺も俺だろ！ 何やってんだよマジー）のままじや明らかにヤバー」

「ボフンー

光の球体が一気に収縮するかのよつとして消滅すると時を同じく

して、意識を失った辻原は手に持っていた荷物ごとその場から消え失せた。

その場に残されたのは、湯を注いでから1分も経過していないインスタントのうどんだけだった。

第一話 もしガメ！（前書き）

突如謎の光に包まれ氣を失った繁が目を覚ますと・・・

第一話 セシガメ！

前回より

何処とも知れない空間を、辻原は漂っていた。

その空間は、終わりのない曲がりくねった管に似ていた。
辻原の目に入る内壁の風景は、サイケデリックでありながら幻想的
で、不思議な美しさを醸し出していた。

描かれているのが風景である事は辛うじて感じる事が出来たが、
それが何処なのかは一切理解できなかつた。

「（ここ）は一体……俺はどうなつたんだ……？（）」

考え込む辻原だったが、この謎めいた空間では何をしようかとほぼ無
駄である事は既に実証済みだつた。

奇妙な力によつて浮かばれたまま、ゆっくりと落ちていく。
その空間では幾ら動き回ろうとも、進むことも上がることも止まる
ことも出来ない。

ただ、等加速度で落ちていく。それだけだつた。

「（それでも）この壁画……凄く俺好みなんだが、一体何を描い
たんだろうなあ……」

と、その時である。

突如、辻原の頭を激しい頭痛が襲う。

「 ッー？（な、何だこの頭痛は！？頭の中でッ…針の塊が暴
れ回つてこるような…… ッー）」

頭痛はその後一分半にも及んだ。

「（……何だつたんだ……あれは……）」
頭痛収束に安堵する辻原だつたが、ここで更なる怪異が彼を襲う。

「（――!?)」

頭の中が激しく揺れ動くような感覚に襲われたかと思うと、突如辻原の脳内へ、断片的な言葉が響く。

おは れか ル・テ ルへ うだ

かた 後、そこ 簡単 ると出い

前 れつた へり らカタ イゾ の

だと くな

可だと めな

おには が

何も る事な、絶 力

恐な さたおを けせ

「（何だ！）の声は……俺に何を語りかけよ？！じつはんだ？」

必死に考え込む辻原。

しかし幾ら考えてもその答えは出てきやしない。

そんな中、異変は起った。

壊したいものを探せ。消し去りたいものを探し。滅ぼしたいものを探せ。殺したい奴を探せ。

謎の声が、遂にはつきひとつ聞き取れる明確な言葉を発したのである。

「（……！？）

……壊したいもの？
消し去りたいもの？
滅ぼしたいもの？
殺したい奴？

……何を言ひ出すんだ一体……？

……第一、俺に何をしろっていうんだ……？（）

謎の声は尚も語りかける。

それが、見付かったら、口を開け

「（口～）」

そして、吐き出せ

「（何を～）」

壊したい、消し去りたい、殺したい、滅ぼしたい、

その思いを精一杯に込めて、吐き出せ

「（だから何をだよ～）」

全てを消し去り滅ぼす、緑の霧、或いは、碧の流れ

「（霧？流れ？）」

それを以て、隠されたお前を、さらけ出せ

「（隠された……俺……か）」

その言葉に覚えのある辻原は、断片的な言葉の解読を試みる。しかし、その最中、またしても彼は意識を失った。

田覚め

「……ん……」

田覚めた辻原は、木製の床の上で寝転がっていた。

「……」「一体……何処だ？」

起き上がりつて周囲を見渡すと、そこが中世ヨーロッパを思わせる豪奢な作りの部屋である事が理解できた。

「（だが何故…？俺は確か、あの謎の光に巻き込まれて氣を失つて… そうだ！荷物！何処かで何か落としたりしてないか！？）」

辻原は慌てて手荷物を確認する。

幸いなことに、失っていたのは作りかけのカップ麺だけだった。

「（良かつた……カップ麺は仕方ないが、これだけあれば十分やつていける……）」

安堵した辻原は、続いてこの部屋からの脱出手段について考える。屋敷の主に頼んで出口まで案内して貰うのが筋というものだろうが、主含め屋敷の住人が友好的な存在だとは言い切れない。

実際辻原は大学に入り立ての頃、ゲームセンターで一人ゲームに興じる高校生のプレイ風景を後ろから観戦していた所、詳しい理由は不明だが何故か高校生に睨み付けられ、罵詈雑言のような言葉を叩き付けられたような気がしたという事があつた（店内の音声が酷かつたのと高校生の滑舌が悪かつた事からよく聞き取れなかつた）。昔からそういう経験を繰り返すたび「現代日本であろうとも危険なときには危険である」という事を幼くして熟知していた辻原は、なるべく屋敷の住人に見付からないような逃走方法を計画する。

しかし幾ら考えても良い案は浮かばず、結果的に彼の考えは行き詰まってしまった。

「（兎も角この部屋に人が来る前に何処かへ隠れないと……時代錯誤気味だが見るからに女の部屋だし、見付かれれば洒落にならんぞこ

れは……」

辻原は凄まじい速度で隠れ場所について考えを巡らせた。
しかし、やはりといふか何といふか、決定的にまとまつた案は出て
きそうに無かつた。

と、その時である。

辻原の身に、更なる危機が迫る。

ガチャリ

「！？」

豪奢なドアノブが回転し、部屋に何者が入ってきたのである。
焦りと未知なるものへの恐怖で慌てふためく辻原だったが、やがて
それも馬鹿馬鹿しく思い、動くのをやめた。

そうして入ってきたのは、起伏の無い体つきをして、豪奢なドレス
を身に纏う、白金色のツインテールを棚引かせた高貴そうなティー
ンエイジャーの少女。基、異世界カタル・ティゾルは大陸ノモシア
を支配する王国エクスーシアを治める国王の一人娘こと、コリンナ・
テリヤードであった。

その姿を見た辻原は、再び考えを巡らせる。

「（どういう事だ……？あんな服装をした人間が、まさかこの世に
まだ居るってのか？

そんな馬鹿な。時代錯誤も大概にしてくれ。金属製の鎧に剣と盾で
戦う兵士や、忍者の方がまだ現実味がある……。

だがだとすれば、この女は一体何者なんだ……？）

一方のコワソナは、辻原の姿を見て内心歡喜していた。

「（やつたわ……成功よ……そつ、この男よ……。）

私が探し求めていた、最高の下僕……！

これでこのつまらない毎日がもつと愉快になるに違いないわ……」

そんなコリンナの考えどころか、名前すら知らない辻原は、ふと左手の掌に違和感を感じる。

「（……ん？ 何だ？）」

辻原が左手を見ると、掌に何やら黒い紋章のようなものが刻まれている。

その形状はまさしく昆虫のようで、大学で昆虫学を学ぶ辻原にとってその種類を特定する事は容易かつた。

「（これは……サシガメか？）」

サシガメ。

漢字では「刺亀虫（刺す亀の如し虫）」または「刺椿象（刺す椿の象）」と表記されるそれは、虫や鳥獣の体液を啜るカメムシの一種である。

一瞬入れ墨の類かとも思ったが、生憎と辻原にそんな趣味はない。では冗談か何かで書き記した落書きか何かか、とも思い記憶を探つたが、それも当て嵌まらない。

何はともあれそれを不審に思つた辻原は、人差し指と中指で、紋章

に軽く触れてみる。

事が起こったのは、その瞬間だった。

「（……………）」

辻原の脳内にて、驚くべき勢いで様々な情報が再生される。更に驚くべき事に、辻原は再生された全ての情報を余さず明確に記憶するに至つたのである。

これにより辻原は、一瞬にしてこの謎の状況についての全てを知るに至る。

あの光や謎の空間の正体、何故自分があんな目に遭つたのか、この少女は何者なのか、謎の声によつて語られた言葉には如何なる意味が秘められていたのか、この紋章とは一体何なのか。

その全てを、辻原は理解できた。

そしてそれにより一気に平常心を取り戻した彼は、不気味な笑みを浮かべ、呟いた。

「 成る程な。大方覚つた」

大学生・辻原繁。

下僕欲しさに彼をこのカタル・ティゾルへと召還した張本人である王女コリンナは、知らなかつた。

温厚で博識、かつ眞面目で心優しいと専ら評判になつてゐる彼の持つ、おぞましい本性の存在を。

第一話 もしガメ！（後書き）

繁の持つ本性とは一体？

第三話 向愛ナセロの女（前編）

下手に出る繩を相手に強気に振る舞つハニコンナだつたが……？

第三話 可愛げゼロの少女

前回より

異世界カタル・ティゾルはエクスーシアのテリヤード城にて、コリンナと辻原はひたすら向かい合つていた。

お互い黙り込み、微塵も動かないまま数分間も睨み合つていた二人。その沈黙を打ち破つたのは、辻原の方だった。

「初めまして。名も何も知らぬ、麗しの異国の姫君よ」

柄にもなく、といつより、上役や遠い親戚などを相手にするような声で馬鹿丁寧に話を切り出す。

「私は辻原繁。嘗て倭或いは大和と呼ばれし極東の矮小な島国に産まれた、取るに足らない庶民です。

本日はお許しもなく貴方様のお城へ侵入してしまつたこと、深くお詫び申し上げます。

ひいてはこの城の出口を教えて頂きたいのですが、宜しいでしきうか？」

辻原の芝居がかつた挨拶を受けたコリンナもまた名乗る。

「此方こそ初めて、辻原。私はコリンナ。コリンナ・テリヤード。

このテリヤード城城主にしてこの国の国王、ジヨローム・テリヤードの一人娘よ」

「コリンナ……良いお名前ですね」

「有り難う、辻原。

それと城の出口についてだけ、心配要らないわ

「何故です？」

辻原の問いに、「コリンナは声高らかに言い放つ。

「何故って？決まってるじゃない。貴方はこれから私の下僕になるからよ。

下僕である以上、私の言つことは何でも聞いて貰うわ。城から出るにしても私の許可が無ければ駄目よ。

でも有り難く思いなさい。このエクスーシア王国……いいえ、ノモシア大陸一の美少女であるこの私の下僕で居られるんだから」

黙り込む辻原に、「コリンナは更に付け加える。

「ああ、それと……貴方が産まれ育つたって言つそのワとかヤマトとかいう国だけど、帰ろうなんて考えないことね。
だって死んでも無理だもの。

貴方に使つた召還魔法、この世界で扱えるのは私達神性種の中でも特に優れたエリートだけなの。

そもそもこの城に、その魔法を扱えるのは私と私のお父様しか居ないわ。

だから貴方が元の世界に戻る事は、絶対に無理つて訳。

あ、そういうえば世界とか何とか言われても、何のことだかさっぱりでしょ？

良いわ、教えてあげる。特別サービスよ、感謝なさい」

大仰な動きで歩みながら、コリンナは言葉を紡ぎ出す。

「Jの世界の名は　　「カタル・ティゾル」　　！？」

突如話を遮られたばかりか、決して知り得る筈のない情報を軽々語り出す辻原に驚いたコリンナは、思わず言葉を失つた。
しかし辻原は、尚も話し続ける。

「それぞれに文化・技術等が大きく異なるらの大陸から成る世界。その根底に存在するのは、自然界に起因する二つのエネルギー理論とそれを昇華させた技術。

魔力からなる魔術と科学からなる学術。

これら二つの影響により生態系は日々多様化の一途を辿り、優れた生物学者は中堅貴族と同等の身分を得る事もある。

ただ、身分の高い者には圧倒的に魔術関係者が多い」

コリンナは、本来知っているはずのない情報を淡々と語り続ける辻原に気圧されていた。

「（何故……？何故なの……？何故この男が、カタル・ティゾルの事をこんなに知っているの……？）」

「文明を形成する生物の種族・形態も多種多様であり、一口に人類と言いくるめる事は難しい。

神性種は、数ある”カタル・ティゾル人”の中でも特に希有な存在であり、総じて王族・貴族に属し社会的地位も高い。

魔力・魔術の才能にも長け、主要な魔術関係者はどこかで神性種と繋がっている。

名前の由来は主要な出身地であるノモシア大陸の大國・エクスーシア王国に伝わる神話に起因。

神性種はその神話に於ける造物主の眷属を自称し 「ちょっと待ちなさいよ！」

淡々とした説明を遮るよつにして、コリンナが怒鳴る。

「神性種がトウマージョーの眷属である事は紛れもない事実よ！ 創世の神トウマージョーとその妻である記憶の女神インディクリストとの間に産まれた子供達……その末裔が私達神性種なのよ！？」

それを自称ですって？ふざけるのも大概にして！

もう良いわ、今日から貴方は下僕なんかじゃない。私の奴隸よ！ 死ぬまでペツト以下の扱いでコキ使つてやるわ！

有り難く思いなさい！これから貴方は 「黙れクソガキ」 んなつ！？」

騒ぎ立てるコリンナの言葉を遮り、辻原は本音を口にした。

「ひつちが態々下手に出てやつてるからつてな、調子こいてべラべラ喋つてんじやねえよ、ゴミクズが。

つか目障りだわ、お前。ハッキリ言わせて貰うが、一度死んだ方がいいんじゃ無いか？

つうかお前みてえのは一度ぐれえ本氣で死ぬべきだろ。いや、冗談抜きで」

思いも寄らぬ毒舌に、コリンナは言葉が出なくなつた。

明らかに先程までとは態度が違つ。本当に同一人物なのかと疑いたくなるほどに。

愛と友情に生き、親しい者を思い敬う事を美德とする辻原。しかし

その本性とは、そんな彼の設定を根底から覆すものである。

彼はある一面に於いて卑劣で狡猾なサディストであり、敵や、嫌つ

ている者相手ではどんなに卑怯な手段や姑息な真似も厭わない。

その上ある意味で独善的な考え方を持つており、動機が家族や友人など親しい人々への愛によるものであり、尚かつ違法でなく表沙汰にならなければどんな事でもやって良いという考え方の持ち主である。更にそれらの動機が含まれていらない悪行も「生物は生きるに当たつて必然的に罪を犯してしまつものだ」という言葉で弁明しその殆どを完全に正当化してしまつ。

斯様に何とも悪質な男というのが辻原繁の本性の一つであり、例えるならばホンソメワケベラとアンボイナガイの中間といった所であろうか。

ホンソメワケベラとは掃除屋として名の知れた魚であり、魚の歯に詰まつた食べカスや体表の寄生虫を啄むことで広くその名が知られている。

一方のアンボイナガイは、猛毒を含んだ針で魚を毒殺し丸飲みにしてしまう恐るべき巻き貝であり、この毒は人も殺せる程に強力である。

同じ環境に棲みながら悉く正反対の性質を持つたこの二種類こそは、まさしく辻原の性根を表すに相応しかつた。

暴言はまだまだ続く。

「つか、お前は正直なところアレだな。テンプレの塊だな。要するに面白みの欠片も無え。

今日日萌え豚全盛期……作家・アニメーターは勿論企業商店地方自治体観光地、果ては教育機関や寺院まで萌えに走る時代だ。そんな時代だからこそ、スタンダードな萌え属性は使い古されつつ

ある。信者や新参の根強い指示があつて廃れこそしてねえがな。

だがそれは逆に言えば、テメエみてえな奴なんぞ何処にだつて居るつて事になる。

貴族・金髪・ツインテール・貧乳の時点でいつもカブリまくりだつつの。

要するに、テメエみてえな奴の代理なんぞ腐るほど居るんだよ。そもそも異世界召還自体、『小説家になろう』じゃ腐った先に森が出来るぐれえの数になってやがる。

しかもその殆どがティーン男のハーレム物語だ。

ふざけんじやねえぜ、ド畜生めが。

何か自分で言つてて腹立つてきたしよ……とりあえずお前、殺すわ

辻原は恐怖の余り硬直して動けないコリンナの首筋を掴み彼女を睨むと、その口を大きく開けた。

開かれた口の中から現れたのは、無数の太い針の束。その先端部から、若草色の霧が勢い良く噴射された。

第三話 可愛げゼロのH女（後書き）

繁が吐き出した霧の正体とは…？

第四話 とある先生の異世界紀行（前書き）

遂に紋章の謎が明らかに！

第四話 じある学生の異世界紀行

前回より

シユオオオオオオオオオオオオ

「つくあああああああああああつ！」

コリンナの顔面から白煙が上ると同時に、辻原はそれを投げ捨てた。

緑色の霧を顔面に浴びせられたコリンナは、その激痛に両手で顔面を押さえ藻掻き苦しむ。

その顔面からは絶えず白煙が生じており、暴れ回る彼女の顔から滴る液体が、彼女の両手から床材や家具までも、手当たり次第に焼き溶かしていく。

「そのまま一 生藻掻き苦しんでろ、クソガキ」

辻原は藻掻き苦しむコリンナの尻を蹴飛ばし、指先から放つ緑色の霧で部屋の扉を溶かして廊下に躍り出た。

「しかし便利だな、この力は。

無制限かつ精密仕様で破壊力抜群。その上マニユアルまで付属とは

辻原が絶賛する”力”とはつまり、先程放った緑色の霧の事である。『ヴァーミン』と呼ばれる全十種類の異能力が一つであるこの緑色の霧の性質は、現実世界で言ひ硫酸に近く、辻原の意志により自由自在に操られるこれは坂原が命じればどんなものも焼き溶かしてしまう。

更に驚くべき事に、この液体に対する命令の中には「溶かすな」というものも含まれており、これにより余計な被害を出す心配も滅多に無いという、馬鹿に親切な設計だった。

「『ヴァーミンズ・ヴォーセミ アサシンバグ』だったか？中々に洒落た名前じゃねえか。

アサシンバグってのは俺の左手に出た紋章よろしくサシガメの事が、何故サシガメで溶解液なのかねえ」

辻原は城内の廊下をのんびりと歩んでいく。

異世界の美術品はどれも魅力的で、彼はそれらをじっくりと堪能したかった。

しかしその願いが叶えられるほど、現実も優しくはないらしい。

侍女の報告により「リンナの異変をいち早く察知した城に控える兵士達が動き出したのである。

魔術関連の技術が深く関わる所以か、奇妙な術式により辻原の動きは直ぐさま兵士達に知られてしまった。

どうにか逃亡を試みた辻原だったが、そこは一介の大学生。しかも根っからの座学派で運動部になど入ったこともない。

当然すぐに息切れを起こし、メイスと盾を構えた兵士達に取り囮まれてしまった。

「観念しろ侵入者！」

「そうだ！その罪牢獄で償え！」

「死刑台に送つてやる！」

辻原に対し口々に悪口雑言を浴びせる兵士達。

「ういつた手合この始末の悪さを知つてゐる辻原は、能力で撃退しようかと考える。
しかしその時、

「黙れ！ 黙らんか！ 騒ぐでない！ 案ぜずともこの男は逃げも隠れも出来ぬわ！」

隊長らしき男の一喝で、兵士達は一斉に押し黙つた。

「有り難うよ、一際賞禄のある日那」

「礼には及ばぬ。儂はこの者共の長であるからな」
隊長の男は、辻原の軽口にも冗談交じりで返答する。
少なくともこの兵士よりは理解力のある人物らしい。

「して……貴様は何故この城に居る？」

隊長の問いかけに、辻原はそもそも眞実であるかのよつて大嘘を語り聞かせる。

「こひだけの話、俺は大臣殿から極秘に呼ばれてやつて來た辺境地の靈媒師でね。

昔からこひの辺りに出るつていう質の悪い惡靈を退治しに來たのさ」「我ながら見え透いた嘘である事は自覚済みだつた。しかし、ありのままの事を話せば間違ひなく袋叩きにされる。

「（どうせ嘘だと見抜かれんのがオチだらうな……）」

等と踏んでいた辻原だが、隊長の反応は意外なものだつた。

「な、何と！ 貴様はもしや、あの惡靈アクセタルを倒す為にこひへ来たというのか！？」

全く持つて予想外の反応だつた。
しかし辻原は、取り乱すことなく話を進めていく。

「そうそう。んで、俺と大臣殿の会話を偶然立ち聞きしたコリンナ

姫が俺の話を聞きたいってんで、装備展開しながら話を進めてたのさ。

で、腹が痛くなつて廁に行こうと思つたんだが、慌ててたもんで姫に教わつた道順を忘れちまつてさ。

探し回つてる間に変なところへ迷い込んでよ、今はその帰りつて訳だ

「そりだつたのか……それは大変だつたな。しかし此方も大変なのだ。

姫様がいきなり不埒な輩に襲われてな、顔と掌が無惨に焼け爛れてしまつておるのだ。

それでその犯人を捜していいるのだが……」

「そうか……そいつあ大変だな。良し、ここは俺が人肌脱ぐとするぜ

「何？」

「姫の為に故郷に伝わる薬を作つてやろうかと思つてな。火傷の傷口に塗るとそれが最初から無かつたように治る優れものなんだよ。城に来る途中この辺りの草や石ころでどうにかなるのは確認済みだし、材料集めて来ようかと思つてな」

「そ、それは本当か！？」

「嘘なわけねえだろ？」

「おお！感謝するぞ靈媒師よ！さあお前達、喜ぶのだ！」

兵士達が喜び沸き立つ中、辻原は隊長から出口への道順を聞き出し（「忘れた」と言つたら詳しく教えてくれた）、城からの脱出に成功する。

こうして辻原はまんまと城外への脱出に成功した。

城下の市街地

「成る程。こりや確かに凄えわ。まさにファンタジーって奴だな」

辻原が繰り出した市街地は、まさしく彼が見た架空の異世界を思わせるものだった。

鎧やローブ等様々な服装の人々が道を行き交い、亜人や獣人が人間と思しき人々と対話する、そんな光景。

それが、彼の眼前に広がっていた。

「さて……それはそうと、どうにかして元の世界に戻る方法を考えなきゃなんねえよな。」

とりあえずここに定住する事を考えるか……あの声は『カタル・ティゾルの破壊神になれ』とか何とか言ってたが、そんなもんそういうなれるもんでもねえしな。

そうと決まれば早速働き口だが　『号外！号外イ！号外だア！』

？』

ふと上を見上げると、背中に翼を持つた鳥のような姿の獣人 羽毛種と呼ばれる者達 の男性が、上空からビラを撒いていた。そのビラ拾つて見た辻原は、驚愕の余り言葉を失った。

「…………何故…………あの事がバレてるんだ……？」

辻原はすぐさま路地裏に逃げ込み、再びビラをよく読み直してみた。

「……『異世界人シゲル・ツジハラ、コリンナ姫への傷害で殺人未遂』
……クソ、バレやがったか……」

そう。辻原が城を抜け出してから、彼の容姿に関する情報がコリソナによつて城内に知れ渡るに至り、それがそのまま指名手配にまで

発展したのである。

「何はともあれ逃げねえとな……王女の顔面に硫酸ぶっかけたなんてのが裁判になりや、懲役通り越して死刑確定だ」

辻原はそそくわとその場から逃げ出し、人気のない広葉樹林に逃げ込んだ。

「（何か化け物とか出そうだが仕方無え。ござとなりやヴァーミンでどうにかしてえといひるだが……一応喰われる覚悟もしておくれか……）

」

広葉樹林の道無き道を搔き分けて歩みを進める辻原。
てつくり猛獸や化け物の類が出てきて喰い殺されかけるのではない
かと思っていた彼だったが、この後そんな予想は悉く裏切られるこ
とになる。

第四話 じある學生の異世界紀行（後書き）

逃亡者・辻原繁一・広葉樹林を往く彼があつた驚くべきものとは一体！？

第五話 逃げ込めー・シジ原さん（前書き）

森の中を歩いていた繁は、そこでカタル・ティゾルの数奇な生態系を田の沢たりにし……

第五話 逃げ込め！ツジ原さん

前回より・広葉樹林

辻原は一人広葉樹林の中を進んでいた。

「驚いたな」

辻原は呟く。

「ひして自然の中を歩いていると、改めて今異世界に居るんだと再認識せられる。」

草木も虫も、見たことのない奴ばかりだ。熱帯雨林の奥地にでも行かなきやこんなのは居ないだろう。」

広葉樹林には奇妙奇天烈な形態の生物がひしめき合つており、そのどれもが辻原にとつては興味深く思えた。

虹のようにきらびやかな翅の羽虫が飛んでいたかと思うと、それを目玉模様の芋虫が飛び跳ねて捕食する。

地を這う円錐形をしたムカデのような生物の身体は美しく輝く青色で、毒々しくも煌びやかな模様の翅を持つ蝶の複眼はカタツムリのように長く伸び縮みする。

根元が泥山のようになっていた樹に登つた蟻がその表面を触角で叩くと、樹皮が扉のようにスライドして開き、中は蟻達の都市国家が如く有様だった。

ふと小さな紙飛行機のようなものが飛んできたので捕まえて観察してみると、その正体は植物の種子らしかった。

このように、自分が産まれ育った世界とはかけ離れた生態系を持つ

カタル・ティゾルの自然をもう暫く堪能していたかった。
しかしそれを許さないのが現実というものである。

「探せエー！捕らえろオ！」

「悪漢ツジハラを捕らえて血祭りに上げるのだ！」

「引きずり下ろして細切れだ！」

林の向こうから聞こえてくるのは、間違いなく兵士達の雄叫びである。

「やべえな。極力見付からないように逃げたつもりだったが、どうやら甘かつたらしい。

何処かに適当な隠れ家は…っと」

辻原はなるべく音を立てないように、姿勢を低く保つて兵士から離れようと移動する。
しかしそういうじている間にも兵士達はどんどん辻原に近付いてくる。

事を案じた辻原は、ふと沢の側に広葉樹林に似つかわしくない煉瓦造りの家を発見する。

「あの家にかくまつて貰つか……」

辻原は見付かるのを覚悟の上で立ち上ると、家に向かって全速力で走り出した。

家の前

何とか家の前まで辿り着いた辻原は、扉を叩く。

「ゴンゴン、ゴンゴン

「『免下さい！』『免下さいませ！』一家の方は居られますか！？」「幸いにも家主は在宅だつたらしく、温厚そうな若い女の声が返つてきました。

『どうなさいました？』

「訳あつてテリヤードの兵に追われているのです！

贅沢は言ひません！兵が退くまで匿つて頂きたい！」

『テリヤード兵から！？何があつたかは存じませんが早くお入りなさい！鍵は開いていますから』

「感謝します」

家主の計らいにより辻原は民家の中に逃げ込んだ。

家の内装は和風とも洋風とも言える成り立ちで、中世ファンタジーと現代日本が混ざり合つたような雰囲気がある。

「土足で構いません。『どうぞお上がり下さい』

奥の方から聞こえた家主の声を頬りに、辻原は恐る恐る家へと上がり込む。

何分土足で屋内に上がるといつのは初めてだつたため、多少の躊躇いがあったのだ。

そのまま暫く歩いていると、奥の方から家主らしき細身の女が現れた。

部屋の雰囲気と同じような服装のその女は、整つた顔立ちに深紅のロングヘアが似合つていた。

何処かで見たような顔だが、気のせいだらつ。

「大変でしたね。しかし助かつて何よりです

「いえいえ。此方こそ助けて頂き有り難う御座います

そしてお互ひの顔を見た二人は、

「…？」

一瞬硬直した。

そして数秒後。

「……繁…？」

「……香織…？」

再度顔を見合わせる繁と香織。

そして次の瞬間、一人の口から言葉が爆薬のよつて飛び出した。

「何で貴方が此処に居るのよ！？」

「そりア こつちの台詞カタル・台词だらうがー今まで何処で何してた？」

「何つて、此処カタル・ティンルで生活してたけど？」

繁と会話を繰り広げるこの深紅の長髪が特徴的な女は、名を清水香織といつ。

繁の従姉に当たるこの女は、3年前の秋から行方知れずとなつてしまい、その事は繁もまた深刻視している案件だった。

「まあそういう事なんだが、そういう事じゃねえわ。

三年間も行方不明になつていて理由がそれだけってのはおかしくねえかつて事だよー

叔母様や俊一達がどんだけ心配したか判つてんのか？

離れ離れになつていた母や兄弟の名を出された香織は、一瞬口をつぐむ。

「や……それは確かに、悪かつたと思ひナビ……でも仕方ないんだよ。

変な光に巻き込まれて、妙な奴に捕まつた所をビビリ逃げ出して、

気が付いたら何か魔法っぽいのが使えるようになつて……

「何か漫画みてえな話だなあ」

「事実なのは確かなんだけどね。私も正直信じられなかつた。

でも、この家のお婆さんに拾われて、そこで色々な事を教わつてね。そのお婆さんも半年前に病氣で亡くなつて、今は私が一人暮らししてゐる。

仕事の合間にどうにか戻る方法を探したけど、結局は駄目だつた

「それで、ここに居続けると?」

「そういう事。それで、繁の方は?何があつたの?」

「俺か?俺はなあ……」

辻原は香織に、今までの経緯を話した。

「つまり貴方は……ヴァーミンの有資格者になつたつて事?」

「そういう事になるな。『ヴァーミンズ・ウォーセミニアサシンバグ』

つまり八番目で、象徴はサシガメつて事だ

「八番目つて……溶解液の能力?」

「何だ、知つてるのか?」

「知つてるも何も、生前お婆さんが色々教えてくれたからね。一応十種類全部、覚えてるつもり」

「そりや凄え」

「それでもないよ。ただ、お婆さんは何時も言つてた。『ヴァーミンの有資格者を敵に回しちゃいけない』って」

「そんなにおつかねえもんなのか」

「らしいよ。

それはそうと、とんだ無茶をやらかしたっぽいね?

よりもよつて王女の顔を焼いたとか何とか

「正確には『焼き溶かした』だが、確かにそうだ。俺はこのヴァーミンの初発を『ワリンナ・テリヤードの顔面に放つてやつた

「昔から変な所で本気出す正確だとは思つてたけど、どうも筋金入りみたいだね」

「お陰で城から出られたは良いが指名手配 つまり犯罪者だ。さて、どうする?お前は今現在、王女への傷害行為を働いた極悪人を匿つているわけだが」

「どうするつて、決まってるじゃん。

貴方をこのまま匿い続けて、その活動をサポートする。それだけよ」「意外だな。小さい頃から正義感が強かつたお前からすると有り得ないぞ」

「いや実は、私を呼び付けたのもあの『リンナツ』でさ。その件で結構個人的な怨みがあつたりするのよ。あとあいつ、親手玉に取つて贅沢し放題なもんだから偶に増税が酷いんだよね。態度も気に入らないし」

「そうか……あのガキ、見たとおりのクズだったようだな」「そういう事。

んで、繁はこれからどうするの?まさかとは思うけど、このままここに留まり続けるなんて訳無いでしょ?」

「勿論。折角異世界に来たんだ。何かやりすには終われねえ」

繁はその晩から、早速活動計画を練り始めた。

第五話 逃げ込め！ツジ原さん（後書き）

従姉妹・香織と再会した繁は一体何をしてかすつもりなのか？

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹（前書き）

繁が定めたカタル・ティゾルでの活動は、主人公にあるまじきものだった。
しかしその内には彼なりの真意があり……

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹

前回より

「で、どうだつた？私の貸した資料、役に立つた？」

「愚問だな。大助かりだ」

「そう、それは良かった」

昨晩、繁は香織に私物のある資料を貸りていた。カタル・ティゾルについてのより詳しい情報と、今後の活動に於ける目標を探す為である。

資料というものは、学生用の教科書や図鑑から各大陸の観光ガイド、更にはローカル情報誌など多岐に渡る。それら全ての資料は、何れも今は亡き薬屋の老婆と彼女の弟子である香織が収集したものであった。

「準備物の目星もつけてある」

繁は香織にリストを差し出す。

表記されている文字はカタル・ティゾルで最もスタンダードな言語のものであった。

「凄いね、もう読み書き覚えたんだ」

「紋章に触った時、全部流れ込んできた。」

書こうつと思うと勝手に頭の方から湧き出て来やが！」

「流石はヴァーミンの有資格者。私だって全部の言語覚えるのに半年かかったのに」

「俺もよくわからん。」

何にせよ言葉が余裕で通じるのは助かる

「召還魔法の影響だね。喋る分にはビリでも問題ないよ」「素晴らしい。ややこしいモンは全部いじ都合主義でどうにかなる。まさに異世界ファンタジーって奴だ。

で、どうだ？この世界で三年も暮りしてきたお前から見て、そのリストに何か問題点はあるか？

「別に無いと思うけど、繁はどうとか不安なの？」

予想を外れた香織の答えに、繁は淡淡と返す。

「予算面が予想以上に高くなってしまったたつてのと、リストの最後に入れた『兆眼紫円陣』……」

「ああ、これね」

「今回、ソレがどうしても要るんだ……が、だ。

そいつは去年の法案改正の所為で今じゃ生産停止の上、製造法も現存品諸共お上の押収喰らつてると来た。だからどうしたもんかなあと、思つてた所でな」

兆眼紫円陣とは、指定した無生物を至る所へ、そこにあるべき姿で転送する布状の魔術道具である。

転送先に距離は関係なく、異なる世界にすら送り届けることが出来るという奇跡のような代物だった。

繁は資料でこれの情報を目にした時即リストに追加したもの、後になつて入手はほぼ不可能と知つて落胆していた。

しかし、そんな繁に対する香織の返答は、またも彼の予想を上回るものだった。

「それなら心配ないよ」

「どういう事だ？」

「だってこれ、うちにあるもん」

「……何？」

「いやだからさあ、これうちにあるんだって。

押収されたのは二十年前の魔道具売買に関する法案の改定案で導入された『購入証』付きの奴と、一部の公的機関・高所得者が持つてたのだけだから

カタル・ティゾルにて一般向けに流通する機材・道具類には、性能に応じて格付けがなされる。

この格付けで上位に分類された魔道具は、売買にあたりややこしい法的制限が課せられ、更に購入者はそれを証明するための『購入証』なる書類を所持しなければならならず、ある一定の状況下（購入証を提示出来ない状態で魔道具を使う、違法行為に使用する、所持権利を失つてなお手放そうとしない等）に於いては、政府によつて該当の品を押収されてしまつ。

法改定の結果、兆眼紫円陣はその数量こそ少ないものの性能が高すぎるとの判断され、殆どの所有者が政府によつて該当の魔道具を押収されてしまつていた。

但し購入証導入以前から所持していた物についてはこの限りではなく、香織の恩師であつた老婆の所持していたものは押収対象の定義に当て嵌まらなかつた。

「そりいえばそりだつたな……何分、法律関係はまだ覚えきれて無くてなあ……」

「仕方ないよ。基本法規に加えて各大陸が独自に法律定めちゃつてるからね。

まあ、気楽に覚えていけばいいと思つよ？元々指名手配中の身の上だし、そんなに必死こいて覚え込まなくとも

「それはそりかも知れんがよ、だからつて法律完全無視とはいがんだろ。

業に入つては業に従えつてな便利な言葉があるわけだしな」

「うん、字が違う。誤字にしては明らかにどうかしてる。でも私は

突つ込まない。

つていうか、兆眼紫円陣の他にもうすで確保できる物は多いけど…

：「一体これで何を企んでるの？」

「何つてお前、アレだよアレ」

繁は「ごく自然に、ほつりと言つた。

「金儲け」

「……金？」

「そう。

お前は二年前にこっちへ来てたから知らないだろうから教えてやる。実はこっちの世界の日本じゃ、馬鹿でかい地震の所為で一部都道府県が壊滅的な被害を被つててよ。

マグニチユードは8・5かそこらだったかな。観測史上最大、規格外の大地震だつたそうだ

その言葉を聞いて、香織は口を噤む。

まさか自分が姿を消してから、そんな事が起つていよう等とは予想もしていなかつたのだ。

「幸いにも国全体の機能が麻痺する程じゃねえし、うちの県も無事ではあつたんだがな。

二年前に政権交代があつた所為で内閣の使えなさ感がヤバくてよ

「じゃあ、被災した人達は…」

「各方面からの支援で暮らしあはナンボか楽になつてるが、問題は山積みだな。

特に、どつかの馬鹿が修理代ケチつた所為で原子力発電所がぶつ壊れやがつたもんで事態は更におつかなくなつてやがる

「つまり、カタル・ティゾルで稼いだお金を兆眼紫円陣で向こうの世界へ送り込むんだね？」

「その通りだ。このテの境遇に晒された奴は大体辿り着いた世界を救いたがるが、俺は違う。

あくまで俺が産まれた世界への愛を示し、俺が育つた世界への敬意を示す。

それが、俺を産み出し育ってくれた世界への、最大の恩返しであり善行だ。

その為には汚え事もしなきやならんだろうし、最悪死も覚悟してるのが……どうする？

そこまでするクズ従兄弟に、お前は肩入れする覚悟があるか？
運が悪けりや、お前も巻き添えだぞ？

言い方こじきついが、その言葉には大切な従姉妹への思いやりが含まれていた。

そしてその事をちゃんと理解している香織は、自信を持つて答える。
「当然。ここで捨てるくらいなら、兵士に追われてるって時点で家に入れてないよ。

こんな所で三年も暮らしていくと、妙なところ勘定も鋭くなつちやうからね」

「そういうもんか」

「そういうもんだよ。大体、繁の考えたことは面白かったり一面ではほぼ外れが無いもん。

元の世界にも帰れずにこんな異世界で骨埋めるくらいなら、精々足搔いてみたいと思つてたんだ。

情報収集とかなら任せとよ。

魔法は実戦で使い物になるようなレベルじゃないから戦つたりは出

来ないけど、小細工なら自信あるから

「頼りにしてるぞ」

かくしてここに、カタル・ティゾルを混沌に陥れる異世界人のコンビが誕生した。

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹（後書き）

次回、情報収集開始に伴い新キャラ登場！

第七話　辻原さんと突然の爆発事故（前書き）

変装して大陸首都へ向かつた繁は、そこで突然の爆発事故に遭遇し

……

第七話　辻原さんと突然の爆発事故

前回より

「さて、どうするかな」

前回、カタル・ティゾルでの活動方針を確立させた繁は現在、最初の現場として選定したノモシアの大國・ルタマルス首都圏ジユルノブルの街道にてベンチに座り込んでいた。

ルタマルスはエクスーシアに次ぐ第二位の地位に属するノモシアの主要国家が一つであり、実質的にはエクスーシアを遙かに凌ぐ程の国力を誇る。

ただ、比較的新しく歴史の浅い国家である為形式上の最上位はエクスーシアとして定められており、その立場は現代日本に於ける皇族に類似したものである（しかも当のエクスーシア上層部はこの扱いに全く気付いていない）。

そしてベンチに座り込む繁だが、彼は何分指名手配中の身である。

そのままの姿で出歩けば、ノモシア大陸内ならば普通に動き回ることなど出来はしない。

斯様な関係上、彼は現在身元を隠すために変装を強いられているのだが、その姿というのがまた奇抜の一言だった。

否、奇抜と言つよりは、怪しい。

上半身は赤の毛筆書体ででかでかと『致死量』と書かれた黒のTシャツを着込み、その上から白衣を羽織っている。

下半身は灰色の作業服と爬虫類を思わせる質感のベルトを巻いて、

靴の足跡から特定されてしまうと黒いゴム長靴を履いていた。

何より怪しげなのは頭部であり、巨大なバッタ丸々一匹を模したフレイスマスクには特殊な術が施され、頭部と一体化しているようだつた。

「さて、そんなこんなでこんな変装ってか仮装だなこりや、まあ良いや。

何にせよ金儲けの計画を進めねえと。

とりあえずアレだ。ルタマルスはノモシアでも特に異文化交流が盛んな癖に、未だ王政なんて時代遅れな手法に拘る懐古厨だ。だがそれは、こちからすると好都合だとも考えられる。

ぶつちやけ貴族のが、弄くる上で楽しそうだからな

そんな事をぼやきながら、繁は街道を歩いていく。
作り込まれた装備品は、何れも驚くほどに通気性が良く、繁は強い日差しの下にあって尚涼しげな態度を保っていた。

現代社会の街道でこんな格好をしていれば好奇の目で見られ、好みしないトラブルに発展することもあるだろうがしかし、ここは異世界力タル・ティゾル。

奇抜な格好をした者が我が物顔で堂々と公道を闊歩するなど日常茶飯事である。

中には、我々人類と同じだけの知性レベル・言語能力を持つというだけで、人間とはかけ離れた容姿の者も居る。

そんな中にあって、仮装した繁の姿というのはさほど目立つわけでもなく、寧ろ逆に隠れ蓑として十分機能する程のものだったのだ。

「さて……地図によるとジユルノブル城はもうすぐなんだが……この道はどう行きや良いんだ?

一角獣の石像はもう通り過ぎた筈なんだが……」

城を目指す道中、道に迷い地図と睨み合ひ繁。

そんな彼の熟考を遮るように、事態は急展開を見せる。

ツドオオオオオン！

鋭い爆風と凄まじい爆音を伴つた、恐らくは可燃性ガスがある種の燃料によるものであろう爆発事故。

「い、一体何事だ！？」

慌てながらも、繁は全速力で現場を目指す。

事故現場でなら自分のヴァーミンを活用できるのではないかと考えたからである。

無論、出過ぎた真似はしない。あくまで謙虚に、そして臆病に歩を進めるのが繁の基本的なやり口だからである。

現場

「失礼、何か凄まじい爆風が来ましたが、一体何が起こったんです？」

繁の間に、野次馬の一人である禽獸種（哺乳類風獣人）の若者は快く答えてくれた。

「爆発事故だよ。あそここの廃倉庫に溜まつてた魔ガスが何かの拍子に爆発したんだ」

「よくある事なんですか？」

「いや、滅多にないよ。魔ガスは魔力の集まりで、加工法もかなり特別だからそう簡単に爆発したりはしない筈なんだけどなあ」

「やきながら、若者は何処かへ立ち去つてしまつた。

「（魔ガス……確かに天然の魔力を工アゾル状に加工したものだつたよな？

確かに香織が持つてきてくれた資料にもそんな事があつたな……ま

あ、世の中何が起ころるか判つたもんじゃねえ。
気を付けねえとなーっと」

繁は再び城へ向かつて歩き出す。

しかしそんな時、倉庫内部が更に大きく爆発した。

しかも今度のそれは以前と比べてかなり大規模なもので、強烈な爆発は小振りな倉庫一つを丸々吹き飛ばすに十分すぎた。

野次馬達は予想外の出来事にパニックを起こし逃げ惑う。

しかし繁は彼自身でも信じられない程に冷静で、指先から溶解液の霧や弾を放つては周囲に飛んできた瓦礫を打ち消していく。その動きはまるで一般人とは思えない機敏さであり、当の繁本人も別の誰かに動かされているように感じている始末だった。

瞬く間に瓦礫の殆どを打ち消した繁は、野次馬達が逃げ去ったのを確認するとそそくさとその場から立ち去ろうとする。

あれほどの爆発が起きたのに消防・救急に相当する機関が動かなかつた事を疑問に思ったがしかし、それが逆に繁にとつては好都合でもあつた。

しかしそんな中、彼を呼び止める者が居た。

「ねえ、お兄さん」

「？」

見れば繁を呼び止めたのは、白衣を着たクリーミム色の長髪を棚引かせる若い女だつた。

側頭部や腰から生えた狐のような耳や尾は、彼女が禽獸種 哺乳類を基礎とした亜人型種族 の血を引く存在である事を証明していた。

「さつきの、凄かつたじゃない。何をどうやつたの？」

「手元から溶解液の弾を飛ばしただけですよ。別に大したことじやがない」

「いやいや、凄いことだよ。ここいらの連中は誰も彼も中途半端に身勝手な奴と流されやすい奴ばかりでさ。

それに引き替えお兄さんは凄いよ。最後まで始末付けちゃうんだもん」

「そんな最後まで始末付けた覚えは無いんですけどねえ。所々外してますし」

「外す外さないは関係無いでしょ。その場に留まり続けたって事がそもそも評価に値するんだし」

等と、通りすがりの名も知らぬ女と適当な雑談を繰り広げた繁は、女に別れを告げて城を目指す。

そしてその場に一人取り残された狐女は佇んだまま、遠くを見据えていた。

「それにして…何がどうなつてこんなに吹き飛んだのかしらね…」等と呟きながら女が倉庫の跡地に足を踏み入れ、辛うじて爆発に耐え抜いた柱に触れようとした、その時。

柱の根元が鈍い音を立てて折れ曲がり、女は倒れてきた柱に上の下敷きになってしまった。

女はその一撃で絶命し、一度と起き上がることはなかつた

と、思われた。

しかし、それから一分ほどして。

「不覚、だつたわ」

そんな声がして、下敷きになつた女の手足が、激しく蠢いた。
かと思えば女は両手で柱をずらし、未だ身体の正面に深手を負つて
いるにもかかわらず、何事もなかつたかのように歩き出した。

更に柱によつて重傷を負つていていた女の身体は、一步、また一步と女
が歩む度に治癒・再生していく。

倉庫を出る頃には、女の身体には傷一つ見られなくなっていた。

「幾ら不老不死だからって、やたらめつたら危ない事しちゃ駄目よ
ねえ。

それにしても彼……何でジユルノブル城なんかに向かつたのかしら
？」

繁に興味を持ち始めた女は、密かに彼を追つことにした。
女の名はニコラ・フォックス。ルタマルスの首都圏に住まい、”元
”開業医である。

第七話　辻原さんと突然の爆発事故（後書き）

次回、元開業医＝コラの真実が明らかに！

第八話 医学博士は呪われない（前書き）

不死身の医者——コラ・フォックス。その不死性の真実と、波瀾万丈なる彼女の生涯。

第八話 医学博士は呪われない

昔々、カタル・ティゾルはルタマルスに、ニコラとこうう女の子が住んでいました。

ニコラはとても明るく心の優しい子で、誰かを助けてあげることと、助けた相手から「ありがとう」「言われる事が大好きでした。

ニコラには、大きな夢がありました。それは、お医者さんになることです。

お医者さんになつて、色々な人を病気や怪我から助けたい、守りたいと、願つていたのです。

でも、お医者さんになるのはそう簡単なことではありません。

お医者さんになるためには、色々なことを勉強し、勉強だけでは学べないような事もたくさん知つておかなければならないからです。でも、誰かを助けたいと思つニコラは、夢を諦めずに頑張りました。そうして頑張つたニコラは、お医者さんになるための特別な学校に入ることが出来ました。

ニコラは学校での生活を楽しみました。難しいこともいっぱい勉強しました。

そうして、学校での生活にも慣れた頃。街へ遊びに出ていたニコラは、その姿を偶然にも、ある人に見られてしまふのです。

それは、遠い所にある大きな国の王子様でした。

お忍びで街に遊びに来ていた所を、偶然にも側を通つたニコラと田があつたのでした。

そしてその時王子様は何と、

「二コラに恋をしてしまったのです。

それまで女人に恋をした事なんて一度もなかつた王子様は、それが恋なのだと気付くのにかなりの時間がかかりました。でも、気付いてからははつきりと判るようになつたのです。

これは恋なんだ。僕はあの子に恋をしているんだ。

王子様は人が良く誰とでも仲良くなきましたが、奥手で少し気の小さい所がありました。

だから、その気になれば二コラを探し出して思いを伝える事だって出来たはずなのに、王子様はそれをしませんでした。出来なかつたのです。

結局そうして月日が過ぎ、王子様の恋心が二コラに伝わらないまま、一年が経ちました。

勇気が出せない王子様は、幼馴染みで友達だった隣の國のお姫様に相談することにしました。

お姫様は王子様の事をよく知っていたので、王子様に「貴方のペースでじっくりタイミングを見計らっていけばいい」と言いました。王子様はその言葉を信じ、勇気が出る時を待ち続け、その日のために告白の計画を練るのでした。

でもこの時、王子様は気付いていませんでした。

お姫様は、王子様の恋を応援する気なんて無かつたのです。

それもその筈でした。

お姫様は王子様の事が死ぬほどに大好きで、王子様の愛は自分だけに向いていればいいと、そう考えていました。
だから、王子様の心が他の女人に向いている事が何より許せなかつたのです。

そしてお姫様は、作戦を実行に移しました。

遠い国から魔法の本を取り寄せ、その本にあつたある恐ろしい呪いを、ニコラにかけたのです。

呪いをかけられたニコラが不幸な目に遭つことはありませんでした。それどころか、どんなに大きな病氣や怪我をしても、ニコラが死ぬことはありませんでした。

でも、お姫様にとつてはそれで十分でした。何を隠そう、お姫様の狙いはそれだつたからです。

というのも、お姫様のかけた呪いの力で、ニコラは決して年を取らず絶対に死なない身体になつた代わりに、もう一度と子供を産めない身体にされてしまつていたのです。

鈍感なニコラはそれに気付かせんでしたが、お姫様は満足でした。女人の人だけに許された、最も大きな幸せの、最も意味のある生き甲斐の一つである、子育ての権利を、奪つてやることが出来たのですから。

お姫様は早速、その事を王子様に話しました。

「貴方が好きなあの二コラといつ女の子は、絶対にやつてはいけないと言われている魔法を使って、子供を産むことを諦めてまで老いることも死ぬこともない身体を手に入れた」と。

それは明らかに歪められた真実でしたが、優しく奥手な王子様は、その言葉を真に受けて深く悩み苦しんでしまいます。

お姫様はこうして出来た心の隙に付け入るつと想えていたのですが、中々上手く行きません。

王子様に近付くタイミングを掴もうとしても、大抵は失敗してばかり。

タイミングを掴んでじつくり話そうとしても、二コラの事を諦めきれない王子様は、二コラにかけられた呪いを解いて彼女を改心させる方法を探すことに躍起になつていて、お姫様との話もその事ばかりです。

お姫様はその事に腹を立て、腹いせに徹底して二コラの命を狙いました。

でもどんな事をしても、二コラは死ぬことがあります。

当然でした。

二コラは既に、お姫様がかけた呪いの所為で、決して死ぬことの出来ない身体になつてしまっていたのですから。

でもお姫様は、王子様への想いと二コラへの逆恨みの気持ちでそのことをすっかり忘れてしまつていました。

そして月日が経つ内に、お姫様と王子様はどんどん年を取りましたが、呪いのかかっている二コラは年を取りません。

そういうしている間に、王子様は病氣で死に、お姫様も途中で女王になりましたが、国を上手く治める事も出来ず、民衆に刃向かれ、城を追い出されてしまいました。

そして数年が経ち、二口ラは無事にお医者さんになることが出来ました。

でも、二口ラはまだ、物足りない気分でした。ところの、二口ラの性格は、学校での色々な経験を経て、少し変になっていたのでした。

二口ラは思いました。

「お医者さんをやる以外に、私にしか出来ないことが、まだ他にあるんじゃないかしら？」

そして二口ラはある日、自分の身体についての秘密を知ることになります。

子供を産むことが出来ない代わりに、絶対に年を取らず、なにをされても死かない身体。

その秘密を知った途端、二口ラはあるとんでもない事を思い付きました。

自分で自分を、色々な方法を使って、殺してしまつのです。

普通の人なら死んでしまつような事でも、二口ラは死にません。それを利用して、二口ラは色々な方法で自殺を繰り返し、その原理や様子を細かく記録することにしたのです。

例えば縄で首を縛るにしても、太さ、長さ、縛る力や縛り方、縄の材質など、その度に少しずつ変えて、どうなるかを試します。

その様子の違いや、痛みの感じ方、安全な対処方法などを、二口ラは研究し続けました。

そして二口ラはある時、それらの記録を一冊の本にして、出版しま

す。

『対死神営業妨害白書』というタイトルのそれは、人を死から救う方法を探求したために冥界から追放された死神が、密かに書き記したという設定でした。

『対死神営業妨害白書』はその衝撃的な内容と癖になる文章が相俟つて大ヒットを記録し、続編が期待されていましたが、所々に王政を批判する記述が目立つたため、政府により発行を禁止されました。

それでもニコラは、お医者さんをしながら研究者としてめげずに政府と戦い続けました。

老いることも死ぬことも無いニコラの戦いは五十年以上も続き、ついには病院の営業を停止されてしまいました。でも、ニコラは諦めずに打開策を探し続けます。

果たして彼女に、本当の安息は訪れるのでしょうか？

それは誰にも、判らないことなのでしょう。

第八話 医学博士は呪われない（後書き）

明らかになつたニコラの過去。果たして彼女は繁の見方か？それとも……

第九話 再会したぜ！（前書き）

元開業医と指名手配犯は再び出会い、そして……

第九話 再会したぜ！

前々回より

繁がジユルノブル城に辿り着くのに、さほど時間はかからなかつた。道中の道案内はとても丁寧であり、城下町の商店経営者や城周辺の警備兵に聞けば、大抵の事は教えてくれた。

それどころか「建築士を目指している友人に頼まれたので、城の内部や周辺について詳しく判るものが欲しい」と頼めば、城の詳細な間取りは勿論、通気口や排水溝のルートまで事細かに書かれた見取り図を渡された。

「（完全に信じ込むとヤベエが……参考までに持つておくか）」

繁は外部で準備を綿密に済ませ、ひとまず城内を見学させて貰うこととした。

靈長種（我々人類と大差ない種族）の若者がガイドとして案内役を担当し、一般人に公開出来る部屋全てを三時間もかけて巡り続けた。

繁は城の内装や従業員達の業務内容等に興味津々で、積極的な見学やインタビューを行つていった。

元々善意や敬意、愛情を軸とした行動を心がける繁のインタビューには従業員達も積極的に応じており、皆不平一つ言わず嬉々として自らの生い立ちや業務内容を話し、更には私生活を語る者まで居る始末であった。

繁は彼らを大学生活で鍛えた速記で記録していくが、当然彼の目的はそんな情報ではない。

否、城の内装や従業員達についての情報もまた、目当てではあった。しかしそれの優先順位はほぼ最下位であり、より重要な目的とは他

にあつた。

それは手渡された城内見取り図の確認と、更にもう一つ念まれていた。

その目的が何かは、また後程。

帰路の道中

「準備は完了した……あとは筋書きと下準備だが……」

ベンチに座り込んで城の見取り図を睨みながら、繁は考え込んでいた。

しかし幾ら考えても、望むような作戦概要是思い浮かばなかつた。思案することを不毛に感じた繁は、食事にしようとベンチから立ち上がる。

と、同時に。

ガンッ バキイ！

という鈍い音がして、木製のベンチが盛大にへし折られる。

その根源に居たのは何と、城に向かう道中で出来つたあの女 ニコラ・フォックスであつた。

首の骨が在らぬ方向に折れ曲がり、頭部からは血が出ている。

「つおつ！？あ、アンタは確か爆発事故の時出会した……つてんな悠長な事言つてる場合じやねえや！

氣をしつかり以て下さいね！？今救命隊を 「呼ばなくて良いか
ら」「はえ？」

「寧ろ騒ぎを大きくされたりすると困るのよ。若干政府から追われてる身だしだあ、ちつき落ちてきたのもその一件でね？」

等と語り続けるニコラの身体は、驚くべき速度で再生していく。地に滴り落ちた血液の一滴までも傷口に吸収されていく辺り、彼女の不死性が常軌を逸している事が見て判る。その光景に言葉を失う繁を尻日に、ニコラは存外マイペースであった。

「驚かしてごめんね？ 実は私ってアレがコレでこうなっててさあ」「微塵も意味がわかりませんよその説明文」

「そりや説明する気が無いからねえ。」

ああ、自己紹介が遅れたね。私はニコラ・フォックス。この辺りで開業医をやってたよ」

「田上飛蝗です。エクスーシアで従姉妹と薬屋を営んでいます」

繁は偽名を名乗った。

指名手配中である今、安易に外部で本名を話すわけにはいかない。

「ヒコウか… 中々に良い名前だねえ」

「いえいえ、貴女こそ素敵ですよ。その耳や尻尾もお似合いでし」

等と適当な事を語らいながら、一人はひとまず香織の家へと向かう。公共交通機関を乗り継ぎながら交わされる二人の会話は、雰囲気だけを見れば中々に平和的だった。

しかし内容はといえば、ニコラの素性や繁の体験談（大幅に脚色）等であり、その内容は若干恐ろしげでもあった。

「ほつほう、では二コラさんは19歳のままで不老不死の身体に？」「そりなんだよね。理由もわからず、突然にね」

本人達からしてみれば他愛もない会話と共に、一人の時間は過ぎていいく。

繁はこの間に、隙を見て小型通信機で香織と連絡を取り、異世界人である自分達の素性は隠すべきとの結論に至る。

幸いにも二コラは気付いていないようで、繁は心の底から安堵した。香織は兎も角、自分の素性を知られてしまつては大変だし、何より二コラを傷付けてしまつからだ。

そして列車に揺られ、獸道を歩むこと早一時間半。二人は無事、何事もなく香織の家へと辿り着いた。ちなみに香織の偽名は「露木揚羽ヨウキアゲハ」とした。

玄関

「揚羽、今戻つたぞ」
「お帰りなさい。ノモシアはどうだった？」
「お邪魔しまーす」
「いらっしゃい。ゆつくりしていつて下さいね」

等と家に上がり込む一人を、露木揚羽こと清水香織は温かく出迎える。

香織は二コラを居間に案内し、紅茶とケーキを振る舞つた。正体を覺られないよう、繁は尚もマスクを取らない。

その後、三人は他愛もない世間話を楽しんだが、ふと二コラが、こんな事を言い出した。

「それにしてもまあ、二人は上手だよねえ」

含みのあるその言葉に、飛蝗こと繁が問いかける。

「何がですか？」

繁の問いかけに、二口づけは軽く、しかし的確に言葉を紡ぐ。

「何がつてそりゃあ、嘘がよ。と、いうか、演技つていうのかな？」

随分とまあ、巧妙なもんだねえ。

不老の身として70年以上生きてるけど、これほど上手で、それでいて悪意や私欲の感じられない嘘は、初めてだよ！」

その言葉に思わず動搖した香織が、口を挟む。

「う、嘘？ 何の話ですか、フォックス先生？ 私達、嘘なんて吐いてませんけ」「シラ切ろうつたつて、そうは行かないよ？」

気付くにはかなり時間がかかったけどね、その分確固たる答えが見いだせたわ。

飛蝗さん、揚羽さん……貴方達のその名前、偽名だよね？ 確証はないけど、何かそんな気がするんだ……。

それから、出身地とか生い立ちとかも嘘だよね？ 真実があるとすれば……一人の趣味くらいでしょ？」

二口づけの推理は、曖昧でありながらしかし的確でもあった。図星であったが故に、一人は言葉を失い返答が出来ない。

「あと出身についてだけど……一人は、さ。

異世界人、だよね？何となく、だけど」

その推理に、二人は最早言葉を失うしかなかった。

香織の経験が確かならば、地球人とカタル・ティゾルの靈長種の間には、決定的な差は見受けられない筈であった。

つまり、動向に気を遣つて個人情報漏洩防止に心がけていれば、余程疑り深い人間とかなりの長期間でも居ないと、地球人であるという事はバレないというのが、香織の立てた定説であった。

しかし、その定説は今、音もたてずに瓦解した。

ノモシア出身の、一人の開業医の「何となく」という理由で立てられた推論によつて。

繁と香織はアイコンタクトで瞬時に意見を交換し、二コラに真実を話す決意を決めた。

通報されてしまうかもしれないが、そうならなにようにどうにかするしかない。

繁と香織は、覚悟を決めた。

第九話 再会したぜ！（後書き）

一人の旅もここで終焉か！？

第十話 彼女も同類（前書き）

またもや明らかになる事実。そのヒントは、タイトルにあり

第十話 彼女も同類

前回より

繁と香織は、二口ラに全てを打ち明けた。

自分達の本名から、詳細な生い立ちや、その活動目的まで。二口ラもある程度の情報は得ていたようで、指名手配班辻原繁についての情報は既に持っていたという。

しかし彼女は繁を罪人だとは思っておらず、寧ろ王族主導で行われる政治体制に対して否定的だった彼女は、繁の行動を寧ろ賞賛する意向を示した。

それどころか、度重なる王族批判により政府からの圧力を受け開業医としての立場を追われ、更に命を狙われる等、自業自得とはいえ散々な目に遭っている二口ラは、一人に協力したいとまで言いだした。

最初は驚いていた一人だったが、その真っ直ぐな志や資質は繁の立てた計画の人員としては十分採用に値するものであり、拒否する理由は見当たらなかった。

「それにしても驚いたよ。まさか異世界人がヴァーミンの有資格者になるなんてね」

「おや、ヴァーミンを『存じで?』

「『存じだよ。』っていうか敬語やめてよ。これから一緒に戦つていく仲間なんだしさあ、私だって心は子供のまんまわけだし」

二口ラの主張を受けた繁と香織は、彼女の意見を取り入れることに

した。

「そう……か。

では二口ラ。お前はヴァーミンについて、どの程度知っている?」

その問いかけに、二口ラは躊躇しげに答えた。

「基礎的な事は大体全部知ってるね。

何せ私……」

そして彼女は白衣の右袖をまくつ上げ、白い細腕をさらけ出す。その二の腕を見た二人は、驚きの余り言葉を失った。

「ヴァーミンの有資格者だからさあ」

等と言ひ二口ラの右二の腕には、黒い蛾のよつな紋章が描かれている。

「『ヴァーミンズ・トリー タセックモス』。

ドクガの象徴を持つ二番目のヴァーミンだよ」

「ドクガか……しかし驚いたな。まさかこんな近くに同類が居たなんて……」

「まさか、繁に近付いたのもそれを察知したから?」

「その通り。ヴァーミンの有資格者は、その気になれば互いの存在をうつすらと認識できるようになるの。

そうしてなくとも、無意識に過ごしてたら何か人が寄ってきて、気が付いたらこの人有資格者だつて事もあるらしいし」

「そうか。それは良いことを聞いた。有り難うよ、二口ラ」

「ん? 何が?」

「判らないのか? ヴァーミンは口でさえ凶悪な能力だ。そしてそ

有資格者は、まだこの世界に八人も居る。

全ての有資格者と協力的な関係を維持できるとは限らないし、生い立ちや職業、それに種族だってピンキリの筈だ。

そんな状況下だからこそ、同類を意図的にサーチ出来るといつ性質は実に有り難い。

協力的な同類は早く出会って仲間にするに限るし、敵対的な同類は早々に狩る事が出来るからな

「確かに一利あるね、流石繁」

「止せ、香織。こんな作戦だれだつて思い付く。

それより問題は、初回の作戦での動き方だ」

「あ、初回の作戦の現場決まつたんだね？」

「無論。下見もしつかりしてきた」

繁はテーブルの上に、ルタマルスで手に入れたジュルノブル城の見取り図を展開した。

見取り図は所々カラーペンで加筆が施されており、繁の私的な憶測や作戦内容の片鱗が見て取れる。

「今回の現場はルタマルスの首都ジュルノブルに居を構える王族・アイトラス家の住まうジュルノブル城。

メインターゲットは当然当主エスティとイルズの夫婦だが、それ以上に重要なのは娘のセシルだ」

「セシル・アイトラスねえ、白金色をしたロングヘアと整つた顔立ちに青い瞳が特徴的な15歳だけ?」

「あの乳見たら普通20歳くらいには思つちやうけど、でも15歳なんだよねえ」

「そう、だ。ガイドブックにも顔写真とプロフィールが載るくらいの有名人、それが王女セシル・アイトラス……。

そしてこのガキには、髪だの身体だの目玉だの、そんな事よりずつ

と重要な特記事項がある…何か判るか?」

確かに、何か重要な事があつたような気がした。
しかし一人はそれを思い出せず、首を横に振る。

「まあ、お前等は俺と違つて暇じゃないから仕方ないな。

セシル・アイトラス……奴にある重要な特記事項……それは、奴の種族だ

「種族? それってどういう事?」

「アイトラス家は代々高純度の靈長種でしょ?」

「如何にも。アイトラス家は靈長種としての血統を維持するために、緊急時には近親婚が認められるほど人種に五月蠅い。

食や医療に関する分野も独特で、調べた限りだと、毎日決まつた時刻に魔術で加工したケトウスペールを炙つて吸つたり、硫化水銀や獸骨、魚の肝臓や童種の胆汁なんかを調合した精力剤が代々伝わつてたり、料理に碎いた真珠や水晶を混ぜたもんを毎日食べるんだと

ケトウスペールとはカタル・ティゾルの海に棲息するフナダマクジラという巨大なハクジラの腸内に発生する蛹状の結石であり、一般的には天然香料として高額で取引されている。

言ってみれば現実世界の龍涎香リュウゼンコウに等しいものであり、貴族や政治家等の金持ちが私用で買い求める事で有名である。

その上、カタル・ティゾルでは研究のための調査目的や、害獣指定され駆除が認められている地区以外での捕鯨が禁止されているためケトウスペールの希少度は鯨肉と並んでかなり高く、オークションにて億単位で落札される事も珍しくなかつた。

「で、だ。そんな事してるのはカタル・ティゾル広しと言えどアイ

トラス家ぐれえでよ、その上上層部の延命や治療の為に魔術を平然と使うような連中だ。

そんな事になつてりや、幾ら純粹な靈長種だろうと、何かしらの変異が生じて亜種が産まれても文句は言えん。

事実力タル・ティゾルは同性愛や近親婚について比較的フリーな傾向にあるからな。

ある豹系禽獸種の兄妹が近親婚の末に産んだ子供は、親と似ても似つかない毛色かつ尾が三本もあつたという

「その事なら時代柄大学じゃ習わなかつたけど、最近の医学書でなら読んだことあるよ。

他にも、回復魔法を頻繁に受けていた靈長種の母親から角の生えた子供が産まれたケースもあるみたい」

「それ以外にも、先天的な遺伝子変異で親と違つ姿になつたりつていうケースは昔からあるらしいよ。

それが一つの血筋として繋がつてることもザラらしいし。

確か、『亜種血統』だつけ？禽獸種や羽毛種なんかだと顯著なんだよね

「流石だな二人とも。

で、調べた所によると、だ。セシルも靈長種の『亜種』であるらしいという事が判つた

二人はその言葉を聞いて、どの道色白で耳が三角形かつ比較的細身で美形になる傾向にある尖耳種や、頭に角を持ち身体能力の高い有角種であろうと考えていた。

しかし一人の予想は裏切られ、また一人は度肝を抜かれることになる。

「どうせ二人とも、尖耳か有角だと思ってんだろ？
だがな、奴はそんな甘つちよろい亜種じゃねえんだ。

あのガキ……セシル・アイトラスはな……^{ヒキ}
飛姫種なんだよ」

二人は絶句するしかなかつた。

第十話 彼女も同類（後書き）

飛姫種とは一体何なのか……？

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート（前書き）

明らかになる飛姫種の正体。そして繁が実行に移した計画は……ラジオ番組？

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート

前回より

嘗てカタル・ティゾルに於ける科学の聖地ラビーレマに、一人の工学者が居た。

学者は靈長種の若い女であり、自らを天才と自称し興味を持たない者への態度は最悪。

それ故に忌み嫌われ、度々迫害の対象になっていた。

ある時、女は発明をした。それは機械的な鎧のようであり、人が着込む事が出来た。

理論によればそれは魔術と科学を併合させたものであり、独自の出力機関により空を飛び、また虚空より武器を産み出し、更に着込んだ者の命を絶対的に守り通すとの事だった。

各大陸・各国家はこの鎧を貪欲に欲し、研究に着手した。

しかし鎧は、人を選んだ。

鎧を着込み動かす事が出来たのは、主に靈長種の女性 中でも、特に選ばれた者だけだったのである。

更にその鎧の中枢部に使われている機関の構造は発明者の女が独自に作り出したものであり、他の何者にも再現する事は不可能だった。

よつて各大陸・各国家の政府は、我先にと女を自らの陣営へと招きたがった。

しかし女は突如姿を消し、残されたのは全1344の鎧『プリンキピサ・サブマ（和訳：王女の奇跡）』だけだった。

後にラビーレマが誇る生理学者や医学博士が、プリンキピサ・サブ

マを起動させる事の出来た者の体組織を詳しく調べた所、何れも身体の何処かに僅かな変異が見受けられた。

この変異した組織は後に『PS因子』と名付けられ、因子を持つ女性達は『飛姫種』と呼ばれるようになり、軍人や研究対象として優遇される事となる。

「ど、まあこんな話は至極有名だからまだ良い。

問題は、セシル・アイトラスが飛姫種だつて事と、それが公表されてねえつて事だ。

城の内部じゃわりと有名らしく、情報源はそこらじい。

俺は今回、この情報をどうにか作戦で上手く利用出来ないかと考えてるんだが……その話は後だ。

実を言うと作戦プランは既に出来上がってる。
下準備だつて完璧だ。

あとは一人に、こいつを見て欲しい

そう言つて繁は、ホチキスで閉じられたコピー用紙の冊子を一人に手渡した。

「これは……台本？」

「そうだ。香織の魔術サポートでかなり凝つた仕掛けを組めたからな。

ただ単に侵略していくんじゃ面白く無い。

「ここは一つ、奇抜に攻め入る」

「奇抜について……こんなで大丈夫なの？」

「大丈夫かどうかは知らん。しかしながら、こうでもせんと面白みが無い。

敵だつてろくすっぽと捕まえもせずどうせ殺すか無視するかだ」

その発言に疑問を抱いたのか、香織が一言。

「あれ？ 囲つて調教とか繁殖とかしないの？」

女ながらにとんでもない事を言う奴である。

「誰がそんな馬鹿馬鹿しい真似するか。

俺が目指すのは破壊神だ。破壊行為の末に金が得られればそれでいい。

ハーレムを夢見る奴に人格者なんて居ない。いや、ごく希に居るが……十中八九はクズだ。

その内の八割は性行為どころか女とともに喋ったことも無いような若手童貞。

残る二割は性欲のまま、知的生物としてのモラルを捨てて生き続けるバカに過ぎん。

生涯抱ける女なんて精々一人が原則だ。一人目を探すのは、そいつと別れる羽目になつた時で良い

「珍しいねえ。英雄と侵略者は好色家の性豪つてのが常だと思つてたけど」

「冗談半分の二コラに、繁は言つ。

「俺は英雄でもなきや侵略者でもねえ。只の大学生だ」

自作の台本を握り締める繁の顔は、何処か笑つてゐるようだった。

「皆様、御機嫌よう」

『お早う御座います。セシル王女』

煌びやかな青いドレスに身を包んだセシル・アイトラスの一聲に、従業員達が一斉に返事を返す。

「今日はとても素晴らしい一日になりそうな予感がしますわ。例えばそつ……愛しい愛しいあの方が、今日こそ私の元へ舞い降りて……」

等と、音信不通の思い人の顔を思い浮かべるセシル。しかしその日は残念ながら、彼女にとつて色々と大変な日になってしまつ。

城の従業員達が持ち場に戻り、自室のセシルが思い人との妄想にふける中、城に異変が起こり始める。壁や柱が鳴動し、それらが機械的に開いたかと思つと、内部から黒い巨大な箱が幾つも出現し始めたのである。

「な、なんですの一体つ！？」

突然の事態に取り乱すセシルだったが、城の鳴動と黒い箱の出現は案外すぐに収まつた。

そして黒い箱 セシルはそれが、ラビーレマの技術による蓄音機の一部 即ち我々の間でスピーカーと呼ばれるものであると理解した から、人間の声と思しき音声が鳴り響いた。

『『セニーのツ……「ジジラジ」ツ…』』

続いてアニメのオープニングかアダルトゲームの「デモムービー」を思わせる音楽が流れ出す。

『はアーい！始まつちましたアー！』

『始まつたねー！田出度いねー！』

話しているのは若い男女二人らしく、妙に上機嫌もある。そんな事ぐらいしか察知できなかつたセシルだが、一つだけ確信している事があつた。

「（……この音量……最悪ですわッ……）」

狭い室内で四方八方から大音量の音声を叩き込まれたセシルは、決死の思いで部屋から脱出。

廊下で衛兵達と合流し、非常口へ向かつていた。
しかしスピーカー越しの男女の会話は尚も続いている。

『さてそんな訳で初めまして。

私この「ツジラジ」でメインパーソナリティを勤めさせて頂きます。「チューター」の教える生物科学概論に感動した18の夏、或いは矮小な虫の尾」ことツジラ・バグテイルです』

『何か長い上に意味不明！？つと、リストナーの皆さん初めまして。

「ツジラジ」メインパーソナリティその2こと青色薬剤師です』

『突然何事だつて思うかもしがれませんがそれは無理もないことなんですね。

何せこの「ツジラジ」、放送決定したのが何と三日前なんですよ。

以前この時間帯にやつていた「朝から爆裂氣分」が、諸事情により急速放送を急死せざる終えなくなつたとの事で、放送局の局長さんが偶然別件でその場に居合わせた私達に目を付けまして』

『何か私達にラジオをやれっていきなり言つて来たんですよ。

それで急遽企画を考えて、設備も整えて……』

『そもそも今こりやつて放送しますけど、まだ尺埋めるのに十分な企画が思い付いてないんですよ。

いや本当、冗談抜きで』

等と、スピーカーから聞こえる男女の会話を聞いたセシルは思った。

「（今日は何だか、人生最悪の日になりそうな予感がしますわ……）

」

そしてそんな彼女の気心を知つてか知らずか、メインパーソナリティの一人もとい、繁と香織は、上機嫌なままに番組を進めていく。電波ジャックによる、完全な違法放送の元に。

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート（後書き）

もつっこいとか言ひ、レベルじゃない

第十一話 ジュルノブル城物語（前書き）

この反応は北米版BW一期日本語版最終回を思わせる勢いで……

第十一話 ジュルノブル城物語

前回より

『ツジラジ』の放送は六大陸全土に及び、それらは各所で話題を呼んでいた。

各大陸放送局は電波ジャックの元に探りを入れて放送をやめさせようと躍起になつていたが、複雑怪奇な術式の適用された電波は探りを入れようにも逆に機材を狂わせてしまう始末。

更に各大陸放送局には問い合わせが殺到し、各局は苦情の嵐に巻き込まれる事を覚悟した。

しかし電話の内容はその予想と真逆のものであり、『ツジラジ』は民衆に対して好評だった。

放送開始から10分、ジュルノブル城

いつの間にか城内に閉じこめられていたジュルノブル城の面々は、『ツジラジ』に聞き入っていた。

『はい。と言うわけでフリートークもそこそこに、今回は何と初回にして素敵なゲストに来て頂いています』

『ええ！？何それ聞いてない！つていうかラジオって初回は大体ゲスト無しだよね！？』

『そこはまあ、色々とアレつて事で許せ。

サプライズっぽい仕様にした方が面白いとか思つたんだよ。

という訳で、素敵なゲストに来て頂きましょう。

ノモシアの医者を語る上でこの人を知らないならモグリだぜつ！

不死身の天才医学博士、二口ラ・フォックスさんです…ビバ…』

その名前を耳にした瞬間、セシルの顔色が変わった。

「二口ラ・フォックス……？

お婆さまの愛しい人を奪い取り、今ものうのうと生き続ける汚らわしい泥棒狐が何故こんな所に……？」

王族家や王制国家政府と真っ向から敵対している二口ラは、当然アイトラス家からも快く思われていない。

とこより、彼女が王政批判で槍玉に挙げるのは基本的にアイトラス家であり、特にセシルに関する記述は私情による脚色が酷く、ある種惨劇と言つて良い有様である。

また彼女は両親から、今は亡き祖母 つまり二口ラに呪いをかけた張本人 の話を脚色の限りを尽くされた形で聞かされており、二口ラを完全な悪役として考えていた。

それ故、スピーカーの向こうで楽しげにパーソナリティと語らい、賓客として持て成される二口ラの姿を思い浮かべるだけで腹が立つてきた。

そして彼女の耳に、思いがけない情報が入ってくる。

『それにしても今日の収録場所…一体何処なんですか?』

『あ、それ私も気になつてた。何かスタッフさんに隠しされた状態で連れてこられたんだけど……』

『右に同じく。ツジラさん、ここ何処なんですか?』

『よくぞ聞いてくれました。実はここ、何とも凄まじい場所なんですよねえ』

『『凄まじい場所?』』

「一体何処だと言つんですの……？」

『何と本日はですねえ……』

ジユルノブル城中庭中央地下に設営した特設スタジオで収録を行つています!』

驚きの声はスピーカーから、ジユルノブル城全体から、そしてカタル・ティゾルが六大陸全土から響き渡った。

『あと、地味にせり上がつたりします』

はああああああああああああああああ！？

再び驚きの声。最早大騒ぎである。

それは地味じやないだろ！

ラジオを聞いていた誰もがそう思った。

そして、中庭へ向かつたジユルノブル城の面々が見たものとは……

中庭

『ハイ！んな訳でせり上がつてみたわけですが…こりやすげえ！何て出来でしょう！見たことも無い花々が軒を連ね、高級感たっぷりの高級大理石をふんだんに使つた彫刻なんて見事なモンです！彫刻以外にも、石置や中央の池だつて賞賛に値する出来ですなあ…』

中庭の芝生を突き破つて現れた小屋の中から外の風景を見た繁は、それらを絶賛していた。

そう言われて王家の面々や中庭を手入れしていた庭師達も、満更でもない表情を浮かべる。

しかしその嬉しい気分も、続く繁の一言で台無しになる。

『イヤー本当に凄いですねえ！一体どんだけの国家予算と公的補助を注ぎ込めばこんな事が出来るんでしょう…？

多分アレですね！死亡税なんてもんがあるんでしょうねこの国には！

いや～時代遅れも大概にしてくださいよ全く！

これじゃまるで中世のクソ時代じゃありませんか！』

その言葉が流れた瞬間、カタル・ティゾルの反応は大きく二つに分別された。

まず一つ目は、王政反対派による歓喜。

そして一つは、王政支持派による憤怒。

当然王政支持派であるルタマルス政府とアイトラス家の面々は怒り狂い、政府は軍に命じて即時ツジラジの放送を辞めさせるための『ツジラ討伐隊』を編成しジユルノブル城に派遣。ニスティの指示を受けたジユルノブル城専属の兵士や騎士、魔術師等が、四方八方から中庭のスタジオに突撃した。

しかし、攻撃は意味を成さなかつた。

ツジラ討伐隊はジュルノブル城周辺に展開された特殊な障壁に弾かれて中に入ることさえまんならず、同じくジュルノブルの戦闘員による攻撃も、スタジオ周辺の障壁に弾かれてしまったのである。

軍司令部

「オップス大佐！ 城の周辺で何をくすぐつ正在中の…？」

討伐隊の指揮を執るスタウリコ中将は、通信機越しに討伐隊隊長のオップス大佐を怒鳴りつける。

『申し訳御座いません！ ジュルノブル城周辺に破壊困難な障壁があり、現在解除作業に当たらせておりますが…』

『そう言つてもう10分だぞ！ ? 迅速に事を進めるのだ！』

『か、畏まりましたアッ！』

通信を終えたスタウリコは、呆れたように椅子に腰掛けた。

「しかしどういう事なのだ……？」

我がノモシア軍魔術隊の精銳が、只の障壁如きに十分など「古式特級魔術では、ないかね」

ぼやくスタウリコの背後に、何者かが歩み寄つてそう言つた。

『そ、そのお声はツ！』

スタウリコはその声を聞いただけで狼狽え、思わず椅子から転げ落ちてしまった。

「ド、ドライシス上級大将ツ！ ? 何故このような場所に！ ?」

スタウリコが慌てて振り向いた先に居たのは、爬虫類を思わせる頭

や角、腰から生えた細長い尾、堅い鱗に覆われた肌等が特徴的な『竜属種』の女にして、ルタマルス軍の頂点に君臨するランゴ・ドライシス上級大将であつた。

「そんなに取り乱さないでおくれ、スタウリコ中将。

本官はそういう風に、他人から怖がられるのが嫌なんだ」

「こ、これは失礼致しましたッ！」

「別に謝らなくたつて良いさ。

それで本題だけど、あのツジラという男とその仲間の中に、最低一人は古式特級魔術の使い手が居るよ」

「古式特級魔術……嘗て、文明と呼ばれる概念さえ曖昧だった時代に編み出されたとされる、145の強大な魔術の事ですか……？しかし、あの術に関連する資料は殆どが消え失せ、扱えるような術者も殆どが死に絶えていると聞きましたが……」

「しかしだよ君、並の障壁なんて訓練された王宮魔術師が十人がかりで本気を出せば簡単に破れるんだ。

まさか天下のジュルノブル城が、障壁破りも出来ないような三流魔術師を雇い入れていい筈もない。

となると、それしか考えられない。」

ドライシスは踵を返すと、歩み出しながらスタウリコに向つた。

「中将」

「は、はいッ！」

「この一件、どうも一筋縄では行かないようだ」

「と、仰有りますと……？」

「本官の左肩がね、朝からどうも変なんだ」

言葉の意味を覚つたスタウリコは無言のままドライシスを見送り、現場へと連絡を入れる。

「諸君、この件にはかの有資格者が絡んでいる。
くれぐれも用心せよ」

第十一話 ジュルノブル城物語（後書き）

まさかヴァーミンの有資格者が軍内部にまで…シジラジはどうなつてしまふのか！？

第十二話 王家（やつひ）は主人公（おれ）を嫌っている（前書き）

通称「やつおれ」

第十二話 王家（やつひ）は主人公（おれ）を嫌つてる

前回より

『ハイ！そういう訳で今回のメイン企画行ってみましょう！』

『『H—イー』』

まさか軍で上級大将が動き出している事など露知らず、繁達はラジオを続けていた。

『先程も仰有ったとおり、この番組では視聴者の皆様から寄せられたカタル・ティゾルの謎や事件に、我々が体当たりで挑んでいきます！

そしてその様子をドラマチックかつ器用な編集で上手いこと纏め上げ、皆様にお伝えすると、そういうコンセプトな訳です！』

『成る程！』

『本来は皆様から寄せられた情報を頼りにアクションを起こしていくのですが、今回は第一回記念という事で！

何と、此方で用意した企画を生中継でお届けします！』

シジラードと繁のそんな豪快過ぎる一言に、六大陸全土が沸き立つた。

『そして今回此方で用意した企画とは……』

『企画とは…？』

『一体何なの？』

『その名も「第一次ノモシア内戦 ジュルノブル奇闘編！」王家は主人公を嫌つてる～』

即ち、我々対ジユルノブル城の皆様&・その他の方々での全
面戦争つて訳です！』

その言葉に、視聴者達は言葉を失つた。

『ルールは至極簡単！

我々三名と、城の内と外に控えて居られる方々とで真っ向からのガ
チバトル！

武装・魔術等戦術に制限無しで、開始24時間以内に相手チームの
2/3以上を戦闘不能とした方が勝ちとなります！

尚、参加資格を持つのは現在ジユルノブル城内部に居る方と、政府
命令で派遣されてきた討伐隊の皆様、更にそこに加えて、王家・軍
艦傾斜一名様に限らせて頂きます！
そんなわけでエー！』

『『『開け、障り壁』』』

三人の言葉と共に、スタジオと城の周囲を取り囲んでいた障壁が消
え去つた。

『門前

「大尉！障壁が、消え失せました！」

「何い？良し！全軍突撃だ！陛下達をお救いするぞ！」

こうして、進軍が開始された。

スタジオ内部

「そいじゃあまあ……」

繁は香織と二つ巴に指示を下し、自らも戦闘準備につく。

「企画スタートだ！」

繁の言葉を合図に、スタジオは機械的に展開し、どういう原理か機材も地面の下へ潜っていく。

そしてその場に残されたのは、何と繁ただ一人。

能力のままにサシガメ型のフェイスマスクを被り、作業着の上に羽織った白衣の背には『デカデカと『生地万歳』と書かれている。

「どうからでも、かかつて来やがれ！」

その言葉を聞いた兵士達は、冬眠開けの雑草か蛙が如く勢いで繁に向かっていく。

騎士達は槍を構えて突進し、剣士達も一斉に斬り掛かる。

更に建物上部で様子を伺っていた魔術師達も、炎球や氷弾、電撃等、要素こそ千差万別なれど皆想いを一つに攻撃魔術を放つ。

一部兵力は王家の護送に当たつたが、どのみち侵入者を殺したいと
いう想いに違ひはない。

しかし、次の瞬間。

「『ワカバグモの切肉網』ツ！」

辻原は叫びに伴いその場で華麗なスピンドルを決めると共に、溶解液を糸状にして周囲に放つ。

空中でも尚彼の意志に従つ溶解液の糸達は、蜘蛛の巣型の網となり、

繁の周囲へと素早く広がっていく。

そしてそれらは、最前列で突撃する剣士達に降りかかる。

結果、剣士達は断末魔さえ上げずに血肉を撒き散らし、大振りな肉片へと変わり果てた。

その様は、まるで人間版サイコロステーキとも言えれば良いだらうか。

ともあれ凄惨な光景である事に変わりはなかつた。

突如無数の剣士が鎧諸共肉片と成り果てたことに動搖した騎士と魔術師の心に、一瞬の怯みが生じる。

更に飛んできた炎や氷の攻撃魔術も、繁が脚を踏み鳴らしただけで地面から伸びてきた木材のような謎の触手によつて打ち消されてしまつた。

しかしそれでも尚、残つた兵士や騎士は突撃し、魔術師達も各自の弾丸や波動を放つ。

対する繁は何処からか黄色い箱形の物体を取り出し、言った。

「二コラー！上は任せた！」

その直後、魔術師達が待機している屋根の上が一部波打つたかと思うと、液体を突き破るようにして現れた者が居た。

二コラである。

二コラは早速両手の中指と人差し指を銃身に見立てて拳銃の形にし、それを水平状態で魔術師達に向ける。

それを見た魔術師達はといふと、

「何だ貴様……思わせぶりな登場をした癖に、まさか輪ゴムで我々に立ち向かう気か？」

「いや待てボイセイ。奴は怪しげな呪術に手を出し悪魔を孕んだと噂される國賊の一コラ・フォックスだぞ？もしかしたら指先から光線でも打つかも知れない」

心底馬鹿にしたような態度で、ろくに攻撃魔術も撃つてこない。完全に此方を軽視した態度に、怒ると言つより呆れを覚えた一コラは、早速指先から空氣弾を数十発放ち、それら全てを魔術師達に命中させた。

それでも空氣弾そのものの威力は控えめなので、やっぱり魔術師達の態度は変わらない。

しかしある魔術師がふと空氣弾の当たった自分の左脚を見た時、その空氣は一変する。

その魔術師は自らの左脚を見て、驚愕と恐怖の余り取り乱した。

「おい、どうしたんだ？」

「かつ、かつ、かかかかかか……身体……からだがあ！」

「身体……ツ！？」

取り乱す魔術師の言葉を頼りに、改めて自らの身体に目を遣つた魔術師達は、一斉に凍り付いた。

「これはまさか……『毒蛾の刻印』ツー？」

「『名答』よく判つたね」

「何故だ……『コラ・フォックス』何故貴様がヴァーミンの有資格者なのだ！？」

何故貴様のような國賊が、よりもよつてヴァーミンの有資格者な

どに……

「はあ……知らんよ。

といふか、その印の意味がわかつたって事は……宫廷魔術師なだけはあるねえ」

「質問に答える、國賊！何故お前がヴァーミンの有資格者なのだ！？どんな呪術を使つた！？何處の悪魔と契約したッ！？」

女王イルヅによつて歪められた真実を聞かされて育つた宫廷魔術師達は、『ニコラが禁忌の呪術により悪魔と契約し不老不死の肉体を得て、その上先代女王（即ちエスティの母）の思い人を奪おうとしていた』という話を信じ切つていた。

しかしそれは全くの嘘であり、そもそもニコラは産まれてこの方悪魔といつものに逢つたことが無い（一応それらしい生物種は存在する）。

「はあ……何処の誰に吹き込まれたかは知らないけど、近頃の宫廷魔術師はアホばっかりかい。

それと、一つ訂正。

私は医者だ。國賊になつたつもりはない。

患者を生かす事。それが医者の仕事。
でも完璧に患者を生かす為には、殺す方法も知つておかなきゃいけない。

医者は患者を生かす方法と、殺す方法を知り尽くしてこそ、初めて医者として完成する。

だからさあ、何て言つのかな。

宫廷魔術師の十人や二十人殺すぐらい、私にとつては何ともないんだよ」

そう言った二コラの背後で、山吹色に輝く蛾のようなオーラが揺らめいた。

第十二話 王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌っている（後書き）

次回、遂に明らかになる二つの本領！

第十四話 医者と軍隊と攻城戦（前書き）

「ハハ、見せてやるわ……『毒蛾』の力を一戦慄を教えてあげる……。
快樂なんて無いわ。あるのは苦痛だけ。これで、第三のヴァーミンツー！」

第十四話 医者と軍隊と攻城戦

前回より

屋根の上にて巨大な蛾のオーラを出現させた二コラは、それを引つ込めると共に自らの能力 毒蛾の象徴を持つ三番目のヴァーミンを発動した。

すると間もなくして、何処からか甲高い羽音のような音が無数に響き渡る。

宮廷魔術師達は皆その耳障りな音に思わず頭を抱え冷静さも失つてしまつ。

そして突如空気中が波打つたかと思つと、何かを突き破るようにして小さな物体が飛び出てきた。

よく見れば、それは小さな山吹色の蛾であった。

しかし蛾にしては妙に飛行が早い。早すぎる。

突然の出来事に啞然とする魔術師達だったが、そんな事など気にせず、蛾は銃弾のような動きで魔術師達へ一斉に襲い掛かる。

そして、次の瞬間。

ゾシュツ！バゴュ！ゴゲュ！

蛾の大群が魔術師達の身体に発生した刻印に突撃し、そのまま猛スピードで骨肉を貫いていく。

それも5匹や十匹ではない。軽く見積もつても一人当たり100匹を超える蛾が、魔術師達の身体を貫いていく。

蛾一匹の全長は僅か1cm程だったが、翅の面積と推進力も相俟つ

て破壊力は既に9ミリ口径の銃弾に匹敵。

そんなものを志保魚発砲から受けて、無事で居られるはずがない。一部魔術師は術で身体能力を上げ、弾雨をかいぐぐうとした。しかしそれもまた蛾の執拗にして正確無比な追尾の前には意味を成さず、刻印を何百匹の蛾に貫かれ、跡形もなく死に絶えた。

「よしよし立派な射殺体。魔術師のミンチ一丁上がり」

死体の山を見てそんな事を言つたニコラは、出できたときと同じく水に飛び込むかのようにして屋根へと潜つていった。

同時刻・中庭

「ツジラジイイツヘアツ！」

ヴァーミンへの順応から獲得した身体能力で軽快に飛び回り、宮廷戦闘部隊の猛攻をかいくぐつていた繁。

彼は現在、積極的な攻撃よりトリックキーな回避を優先する事で洋画の猿気分を味わっていたのだが、中庭に携帯式榴弾砲が持ち込まれた辺りで流石に考えを改めたのか、そろそろ本気を出すことにした。

「早々にコイツを使ってみるか！」

繁は背負つていた黄色い箱を開く。

内部にはキーボード等の機械的なパーツが組み込まれており、繁はそれらに巧みな手つきで何かを打ち込んでいく。
そして打ち込みが終わつた、直後。

「どうおわああああああああああああああ！」
「つぎやああああああああああああ！」

携帯式榴弾砲を構えていた兵士達の経つていた地面がピンポイントで鳴動し、四角柱型に勢い良く伸び上がったかと思えば、兵士達は空高く跳ね上げられてしまった。

続けざまに四角柱がゴムのようにしなり、落ちてきた兵士達を叩き潰してしまった。

「おお、こりや良いねえ。流石は上物だ」

等と宣いながら四角柱を引っ込める繁だったが、突如その背後から長剣使いの兵士が三人同時に斬り掛かってきた。

「――ツジラ、覚悟おおおおお！」

しかし兵士達の振り下ろした剣は何故か繁の右腕一振りではじき飛ばされ、続けざまに放たれた溶解液で骨を残して消滅してしまった。

しかしその直後に隙を見出した騎士が、ランスと盾を構えて突進を繰り出してきた。

だが繁はそれを巧みに避け、盾を溶解液で消し去ると、騎士の腹を下から殴り上げる。

ドウゴー！

「ツガ！？（な、何故だ！？何故板金鎧越しに……）」今までのダメージがつ……！」

それは辻原が溶解液で鎧を部分的に溶かしているからなのだが、騎士はそんな事など知る由もない。

「（そもそもかりに鎧が無かつたとしても、この重み……こんな体格で出せる筈が無いッ！）

等と疑問に思いながらも再び槍を握り締め、騎士は逆転を狙う。

「（こいつの頸椎を槍で叩き折ってくれるッ！）

だが次の瞬間、その作戦は見事に失敗する事となる。

先程まで拳が叩き込まれていた場所から続けざまに刃物のようなも

のが飛び出し、騎士の下腹部を刺し貫いた。

「ツゴロッ！」

苦痛の余り最早言葉さえ出せない騎士の手が緩み、槍が地面に落ちた。

繁はそのまま騎士の亡骸を突き上げるようにして投げ捨てた。地面へ仰向けに落ちた騎士の亡骸は、鎧の下腹部が拳一つ分程度に剥られ、シャツには鮮血が滲んでいた。

繁の左腕もまた、肘より前が血で赤茶色に染まっていた。

訳の判らない事態に一瞬突撃を躊躇つた宫廷戦闘員達だったが、ここで引き下がつてはジユルノブル城警備隊の名が廢るとばかりに奮起し、一斉に突撃していく。

しかし繁は、それらの猛攻を優雅にかいぐぐり、その恐ろしい溶解液の餌食にしていく。

更に彼の両腕から、恐るべきものが飛び出した。

それは平たい、金属製と思しき刃であった。

指の骨に沿つて片手に四本ずつ、計八本が出そろつている。

それはさながら、数多くのメディアミックスがされた欧米の人気コミックに登場する、捕食動物の名を冠する不死の戦士を思わせる。

しかし繁はその戦士と違い、繁は煙草を好まず、異性への執着も薄い。

能力も相俟つて獣というよりは虫のようであり、野性的な雄々しさや勇猛さも、繁には無い。

しかし共通している事もある。

それは、家族や友などへの愛が人一倍強いといつ事。

繁は両腕の鉤爪に溶解液を纏わせ、富庭の騎士や兵士や魔術師達をどんどん切り裂いていく。

そしてそれと時を同じくして、障壁により動きを阻害されていたツジラ討伐隊やランゴ・ドライシスも、戦場である中庭へと向かいつづつあった。

この壮絶な戦いは、誰にも止めようが無い。

第十四話 医者と軍隊と攻城戦（後書き）

繁の武器についてはセキヒロト氏からアイデアを頂いた。
素晴らしいアイデアを提供してくださった氏に心からの感謝を。

第十五話 大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからね！（前書き）

注意：主人公はあくまで繁です。

第十五話 大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからねー！

前回より

『オップス大佐、状況説明を』

「はッ！先程突如障壁が解除された事により、城内への突入に成功しました」

『よくやつた！』

「しかし、問題があります。

幻術か罠なのか、城の内部が迷路のように入り組んでおり、中庭に辿り着けないのです」

『何だと？』

「更に言えば、城内部は我々の目に見える形で、建築学を乖離した凄まじい変形を繰り返しています。

これでは中庭になど辿り着きよづがありません」

『馬鹿な……我が軍の魔術部隊はあらゆる感覚干渉系魔術への耐性を身に付け、一級の幻術破りを習得させた者ばかりだというのに…』

「正直なところ鬼頭種キトウである故に私も軍に入つて長いですが、幻術や感覚干渉系魔術以外でこんな事をやつてのける魔術師には会ったことがありません。

確かに専用術式を用いれば建築物を変形させる事も可能ですが、それには建造段階での術式適用が必須ですし、そうだとしても決まったパターンの変形を定期的にこなす事しか出来ないというのに……」

『いや待て大佐……その例外というのは確かに存在するぞ』

「まさか！現代の魔術理論では神性種でも不可能だという事は既に実証済みですよ！？」

『そうだ……スプリングフィールド教授の打ち立てた現代式魔術理論では、神性種でも到底不可能な事だ。

だがもし、発動されている魔術が現代魔術の定義に当て嵌まらないものだとしたら、どうかね？』

中将の言葉に、大佐は耳を疑つた。

「まさか……古式特級魔術！？」

その一言は、それまで黙つっていた兵士達の耳にも入る結果となり、討伐隊に動搖が広まつた。

『ドライシス上級大将の受け売りだがな、しかしそうだとすれば納得が行くだらう？』

「確かにそうですが……しかし、古式特級魔術はもうかれこれ150年も前に習得方法を印した資料が根刮ぎ破棄され、関連教育機関でもその存在や余名・効果等の情報こそ歴史学びますが、習得方法の教育は完全に違法とされていましたよね？」

更にその殆どは現役の使用者が既に他界しており、生存していたとしても殆どは各大陸で厳重な監視の元保護されていますし、更に総じて高齢である事も相俟つてツジラ・バグテイルが招き入れる事は不可能だと思うのですが……』

『確かに。だが魔術を学ぶ方法は、何も教育機関だけではあるまい？』

民間の魔術師に弟子入りする事で直にそれらを学ぶことも可能だ。当然それが、古式特級魔術であろうともな』

『確かにそうですがしかし、しかしですよ中将。

あらゆる点で現代魔術理論を乖離している古式特級魔術を習得可能な逸材が、果たしてそう簡単に産まれるのでしようか？』

『判らん。しかしながら、風の噂で聞いたことがある。

異世界で産まれた者の中には、比較的高確率で優れた魔術的才能を發揮する者が居るのだとな。

しかもその才能の指向性は神性種などとは違つ事が多く、現代魔術理論を逸した場合が多いとも聞く』

「異世界出身者……ですか。それは盲点でした」

『……そもそもだな、大佐。現状に於いてそんな事はさして重要なではないのではないかと、私は思うぞ』

「それは、どういう事でしょうか？」

『判らんか？つまり、習得者の発生率がどうであれ、現に我々の眼

前では既に古式特級魔術が行使されているのだ。

私もついつい熱く語ってしまったが、今重要なことは「如何にしてツジラ一味を捕らえるべきか」だ。

それを忘れてはならんぞ、大佐』

「はい……了解であります、中将！」

予想外の出来事の連続で不安に囚われていたオップスは、再び奮起し決意を固め、部下達に言う。

「諸君、我々が今こうして立ち往生している間にも、かのツジラといふ男は国王陛下や女王陛下、そしてセシル王女のお命を狙つている！」

王族が命の危機にあり、また王家を護る為に警備隊の勇士達はツジラ一味の手に掛かり、尊い命を奪われているのだ！

そんな状況下で、我等ルタマルス公国軍の誇り高き軍人ともあろうものが、この『ツジラ討伐隊』の選ばれし精銳ともあろうものが、たかが魔術程度に恐れを成して進軍を躊躇うとは何事かっ！

我等討伐隊の軍人達よ！今こそ立ち上がって眼前の障害を果敢に突き破り、かの憎きツジラ・バグテイルのその首を、悉く刈り取つてやろうではないか！」

オップス大佐の言葉に感化された軍人達は、皆次々に雄々しく立ち上がり、種族それに咆哮や奇声にも等しいほど凄まじい音量で、一斉に鬨トキの声を上げ、お互の志氣を高め合つた。

男も女も、若手も古参も、靈長種も禽獸種も鬼頭種も羽毛種も流体種も有鱗種も、その他様々な種族や亜種の者達が、一斉に叫ぶ。

ふとそんな時、軍人達の志氣が上がつたのを見計らつたかのように、
城の変形が止まつた。

これを好機と見たオッペス大佐は、部下達に向かつて叫ぶ。

〔ノルマニヤー〕

『今だ!我々の力を一つにして、壁を突破するぞ!』

魔術部隊がオップス大佐を含む武装部隊に持てる限りのエネルギーを注ぎ込み、それらをまず銃砲や弓など、遠隔攻撃担当の部隊が中

庭方向の壁に向けて放つ

そして紅葉さまは武装部隊が一齊に全力での突進を繰り出し
害物を悉く突き破つていく。

最後の太い石柱一本を突き破った末、討伐隊は中庭へと辿り着いた。

所々に前線虚しく力尽きた警備隊員達の亡骸が散乱する中庭は、本來の美しさや氣品を失っていた。

そしてその中央に、オップス大佐は自らの宿敵であるつ男の姿を見付ける。

姿を見たことは無かつたが、一度声を聞いている以上、鬼頭種の持つ気配察知の力を用いれば特定は容易い。

そして中央に佇み暢気に黄色い炭酸らしき飲料を啜る、頭に巨大な虫が丸々一匹貼り付いたよつた容貌の男・ツジラ 基、辻原繁は、討伐隊に言い放つ。

「お前さん方、いい目をしてるな。

殺すのが、惜しいよ

その言葉に対し、オップス大佐は果敢に言い返した。

「そうか。お褒めに預かり光榮だ。

お前は私達をこころすのが惜しいと言つたが、しかしだ。

私は少なくとも、微塵も躊躇わずにお前を殺せそうな気がするよ」

繁が立ち上がるのと同時に、オップス大佐は自らの武器であるウオーハンマーを構え、部下達もそれに応じて各自戦闘態勢に入る。

『ツジラジ』の第一回で遂行された企画は、遂に最終局面へと向かい始めた。

第十五話 大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからねっ！（後書き）

注意：主人公はあくまで繁なんです。

第十六話 僕と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中（前書き）

ヴァーミンの有資格者としてその力を振るうつ繁と、彼に翻弄される
大佐。

第十六話 僕と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中

前回より

「うおおおおおおおおおお！」

「ぐあああああああああ！」

「さア喰ら工喰ラえエツ！」

ジユオア！ゾブシユツ！

溶解液が兵士の体組織を綺麗に消し去り、鉤爪が頸動脈を分断する。中堅戦力の中でも選りすぐりの精銳達で構成された討伐隊であつたが、変形する城と繁の奇策、そして彼の能力が故に、その数は加速度的に減りつつあつた。

しかも繁の嫌な所は、如何なる物体をも的確に消し去ることの出来る溶解液を持ちながら、その力を殆ど使わないという事。

即ち繁は本氣で戦つて居らず、それは軍人達にとつて自らの実力を軽視されている事にも等しい行為であり、純粹な愛国心と努力で生き残ってきた討伐隊メンバーにとつて、死をも超える冒瀧ですらあつた。

メンバーの殆どを殺され、数少ない生き残りも無惨な姿にされ生きるのがやつとという中、ただ一人だけ繁の奇策をかいぐり戦闘をやめない男が居た。

討伐隊隊長・オップス大佐である。

「素晴らしいな、隊長殿。貴方の格闘センスは、私が見た中であるとほぼ究極の域にある。

どうだ？軍を去り、我々と六大陸でラジオ番組を創らないか？

「誰が乗るかつ、そんな誘いにつ！」

私が一生涯を賭して守ってきたこの国の、魂とも呼ぶべき王家を冒瀆し、多くの命を奪つたお前の誘いになんて、乗つて堪るか！」

「そうか……それは残念。今時王家が政治のトップに君臨するなんて正気の沙汰とは思えないんだがなあ」

「お前のした事に比べれば十分正気だろつー。」

「それはそうだが、身勝手な制作や失策も一つや二つじゃないぞ？ノモシアで政権を握る王族は総じて国家予算を独占氣味だつていう話だつてザラだ」

「だから何だ！殺人犯が誇り高い王家を

「これは俺が独自のラインで調べてきたネタだ。捏造とかじやねえし、まあフライドポテトでも食いながら聞いてくれ」

そつ言つて繁はオップス大佐にフライドポテトの包みを投げ渡す。しかしオップスはそれを辛うじて動く右手ではたき落とし、踏み潰してしまつた。

「……おいおい、食い物を粗末にするとは頂けんな。

その行為によつてお前は、飯屋や調理師や農業者の思いと同時に、素材となつた植物の存在意義までも踏みにじつて居るんだぞ？国民の模範であらねばならない軍将校ともあろう男が、そんな真似をして良いはずがないだろうに」

「殺人犯如きにそんな説教をされるのは心外だが、確かにお前の言うことは、その点に限つては正論だろつな。

だがしかし、軍人たるもの注意と警戒に心血注ぐ事を疎かにしてはならないのだ。

そのフライドポテトに毒や爆発物や電極が仕組まれていないと誰が断言できる？

「……呆れた。何かと思えばそんな事か？大丈夫だ。貴方に何か出

来るなら、もうとにかくそれをしている。

まあ良い。とりあえず話だけでも ヒュオン ガツ！

繁の発言を遮るようにしてオップス大佐が投げたナイフは、繁の持つ黄色い箱によつて直撃を免れた。

「……おい、こちらに戦う気が無いのに投げナイフとはどういうつもりだ？」

「黙れ。私は将校であり兵士だ。兵士とは戦士や騎士のように余計なプライドなど持たない生物だ。

常に任務を最優先し、その為ならば如何なる手段をも厭わない。それはある意味、貴様らも同じ事だろ？」

「そもそもそだな。それに引き替え騎士や戦士なんて連中は、確かに一転に於いては強いのだろうが、動物行動学的には弱者と呼ばざるを得ない哀れな種だつたな。

よし、話はやめだ。貴方とこうして言い合つているのも楽しいが、そればかりとも ズバォン！ バキヤン！

オップス大佐の放つた散弾は、再び黄色い箱によつて防がれる。しかし流石にこの衝撃には耐えかねたのか、黄色い箱は音をたてて崩壊してしまつ。

内部から基盤やキーボード、液晶が崩れ落ちる。

「そんなのをまだ持つていたのか

「この一発が最後だがな、しかしこれで、貴様の古式特級魔術は封じられた筈だ。

発動体を失つた魔術はその効力を失うか、暴走故術者に被害をもたらす……それは古式特級魔術とて例外ではない筈……」

「そうだ。それは実に正しい。

だが……」

その後繁は少々間を置いて、オップスに問いかける

「それはあくまで『私が術者だと仮定した場合の話』に過ぎない。だがしかし、この場に於いて建造物を変形させる古式特級魔術『ソワール・マルファス』を行使していた術者が、もし私でなかつたらどうしたら？」

「まさか……青色薬剤師かつ！？」

「彼女は魔術が得意でね。攻撃系はからつきしなんだそうだが、こ

ういう分野だと滅法強くなるらしい。

師と仰ぐ老婆は最早他界なされたが……その英知はしっかりと、彼女に受け継がれている

「そんな馬鹿な……まさか本当に、回収計画をかいくぐつて逃げ延びた古式特級魔術の使い手が居ようとは……」

予想こそしていたものの、十分信じがたい事態に狼狽えるオップス大佐。

しかし彼と繁の脚は、既に変形した城によつて吸い込まれつつあつた。

それに気付き更に騒ぎ立てるオップス大佐を宥めるように、繁は言う。

「狼狽えるのは止せ、将校。大丈夫だ。これも企画の演出さ

その言葉と共に、二人は地面に吸い込まれていった。

時を同じくして、王家の面々と戦闘人員でない従業員達とが避難に

使っていた部屋から、従業員達だけが綺麗さっぱり消え失せていた。

第十六話 僕と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中（後書き）

親父が言つていた。

『皿の上で塙焼きになつた魚はお前のために死んでくれたんだ。だから出来る限り喰わせて貰うのがせめてもの勤めだ』ってな

第十七話 飛翔王女と害虫男（前書き）

繁とオップス大佐が飛ばされたのは……

第十七話 飛翔王女と害虫男

前回より

地面に吸い込まれたオップス大佐と繁が吐き出されたのは、王族家三名が避難に用いている、強固な外壁と高度な防護魔術によつて守られた礼拝室の中であつた。

突如現れた異質な二人に、驚き取り乱す王家の人々。

「な、何だ貴様は！？ 一体何が目的だ！？」

オップス大佐の着ていた軍服に見覚えのあつた国王エスティ・アイトラスは、彼が軍関係者 それも位の高い将校だと覺り安堵し、見慣れぬ服装の繁へ強気に問い合わせた。

「おお、これはこれはエスティ・アイトラス国王陛下。
お初にお目に掛かります。私、ラジオDJをやる事になりましたツジラ・バグテイルと申します。

本日は我が『ツジラジ』の企画にて、このジュルノブル城を訪れた
次第」

「企画……貴様等と我が城の兵達が戦うといつ、つまらん手合せの事か？」

「その通りで御座います。ただ違うのは、城の兵達といつ点ですが
ね……」

「どういう事だ？」

「即ち……こういう事ですよ」

繁はマスクに仕組まれたノズルを前方に向けると、大きく反り返る。

プロローグ

拍子抜けするような音と共に放たれた緑色の巨大な塊は、放物線を描いて飛んでいく。

四人が呆気に取られている中、その塊は女王・イルズの元へ飛んでいき、

ベシュ ジュオアアアッ！

彼女の頭部を、消滅させた。

「ツ…お母様ああ！」

「イルズウウウ…貴様…よくも妻を…！」

「落ち着いてください国王陛下！失礼ながらあの男、ただ者ではありません！」

騒ぎ立てる三人を尻目に、繁は淡々と言つてのける。

「イルズ・アイトラス……旧姓をミドシヨーモ。

聞き込みをしたが正直悪い話ばかりだつたな。

元は辺境の弱小貴族の家に生まれるも実家が没落。その後偶然出会つたエスティに見初められ、結婚。

その後夫により政治の才能を見出され、政治主導権を獲得

繁が城や町中で集めた話は、アイトラス家の歴史を如実に物語つていた。

しかし問題は、その次からであった。

「主導権を握つた後のルタマルスは、強権的な政治に悩まされることがとなる。

エクスーシア程じゃ無いが、国家予算を半ば私物化したアイトラス家の政治は酷いもんだった。

家族揃つての世界一周旅行に大陸内貴族限定の社交パーティの定期開催等々、国家予算の1／3を使い込み、不足分補充の為に月単位の増税。

かと思えば余つた予算を使い切る為無差別な道路工事やバラマキ政策を決行……。

それでアンチが沸かないなんて有り得ないといつに、王家批判派に間接的圧力をかけることでその勢力を削ろうとする姿勢は実に気食わん。

そもそもこの女は自分の娘が飛姫種であるのを鼻にかけて方々で好き勝手やる事も ザゴウン！

繁の頭の真横を、青い光線が通り過ぎた。

見れば光線を放つたのはセシルであるらしく、彼女が身に纏つていたドレスはいつの間にか消え失せ、ドレスのような意匠の目立つ青い鎧のようなものを身に纏い、右手にはライフルを構えていた。

「プリンキピサ・サブマか……」

厄介なことになつたな、と繁は思った。

PSことプリンキピサ・サブマは、扱うに値する飛姫種共々各大陸がござつて欲しがるだけに、インチキとしか思えないような機能が目白押しである。

先ず、普段は小物などに擬態しており、傍目から見ただけでその存在を察知するのは困難であるという点。

次に、何も存在しないはずの虚空から、使い手専用の武器を取り出し自由自在に扱うという機能。

更に、取り出された武器が刃物であるなら折れもせず刃こぼれもせ

ず、銃砲ならば段数に制限が無いといふ事。

そして最も重要なのが、飛行能力。

何とも複雑な形状をしていいる癖に、それでいて平然と空を飛んだりする。

こんな性能故、繁にとつてPSを起動した飛姫種は非常に相性の悪い相手であった。

しかし繁はそれでも尚諦めず、能力と奇策を以て性能の差を埋めよう思考を巡らせる。

「……お父様、この害虫めを駆除してもよろしいかしら?」

「ああ、存分にやるがよいぞ。我が愛娘セシルよ」

「はい。では……遠慮無く殺させて頂きますわ。覚悟なさい、この汚らわしい害虫!」

氣取った口調でそう吐き捨てたセシルは早速ライフルを構え直し、繁を狙い撃つ。

しかしへーミンの力に馴染みつつある繁にとつて、直線的な射撃を避ける事など容易い。

青い光線のような弾丸は繁に当たることなく、全てが礼拝堂の床や壁や柱に大穴を開け、テーブルや花瓶や宗教画を粉碎していく。そして弾を外す度に父親のエスティは激しく怒り狂い、親が言つには些か相応しくないような言葉で娘を口汚く罵り続ける。

例え実の父親によるものであろうと、『ノロマ』だの『役立たず』だと罵られていれば、怒らない方が変である。

事実、産まれながらにして頂点として育てられ、唯我独尊たる思想の元に全てを踏み台に生きてきたセシルにとって、父による罵倒の数々は本来我を忘れる程激昂するに値する程のものであった。

しかしセシルは考える。

自尊心と慢心故に世の何よりも優れていると影ながら自負している己の頭脳で。

普段の自身は、周囲に対して「高貴で優雅、かつ淑やかな才女」というイメージがまかり通っている。

それだというのに、彼女自身からすれば尻拭き紙ほどの価値しかないような軍人や、それ以下の「ミミ」である害虫男の手前、そういったイメージを崩すのはかなり都合が悪い。

この一人を殺してしまえばその点は解決だが、問題点はまだある。それは、恐らくこの部屋での音声が今もこうしてカタル・ティゾル全土に流れているであろうという事であり、ともすれば自分の発言が全てのカタル・ティゾル民に筒抜けという結果になるのは確実。只でさえ王政反対派・王家批判派の勢いが強まりつつある昨今にあって、更なるイメージダウンの発生は、自分の生涯に於いて致命傷となるだろう。

そう考えれば、ここはひとまず冷静に取り繕つておくのが妥当だろうと、セシルは考えた。

自身のPS『アスル・ミラグロ（青の奇跡）』にはライフル以外にも機関銃や誘導弾等多数の武器が搭載されているが、礼拝堂内の品々を破壊しては余計親子関係に拗れが生じてしまう。

となると最早、結論はただ一つに限られていた。

「（ここはひとまず……必要最低限の動作での男を始末……そうすれば私は、城の兵達を救つたヒーローとして一躍有名人ですわ……）

」

しかし彼女がそう思つた瞬間、繁はその視野から消え失せていた。そしてそれと同時に、背後へこれ以上にない程の不快感を感じ、慌てて振り返る。

すると彼女の背後には、やはり辻原が、浮いていた。

第十七話 飛翔王女と害虫男（後書き）

繁 VS セシル、最終局面へ！

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）（前書き）

各大陸が欲しがるPSの力を使いこなす飛姫種も、繁の奇策に翻弄され……

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）

作者は今作に於いてしばしば『プリンキピサ・サブマ』の形状を、鎧と形容している。

しかし実際の所、この兵器の形状には実際の鎧と異なる点もかなり多い。

最も大きな違いは、装着者の頭部及び胴部を守る装甲が殆ど存在しないという点であろうか。

更に装着者は兵器行使にあたり身に纏っている全ての衣類を一度取り払い、専用の防護服を身に纏わねばならない（但しかなり面倒なので、軍役中の飛姫種は最初から防護服を身に纏う者が殆ど）。

この防護服というのは薄手かつ伸縮性があり、軽量化により機動性を向上させる目的の他、兵器そのものに搭乗者の意志を、神経などを通じて伝達する作用を促進させる目的も兼ねているのだといふ。

しかし、今回の場合

前回よつ

「つひいやアアアアアアアア！」

ドゴギツ！

それは見事に裏田に出てしまった。

妙な叫びと共に放たれた繁の飛び蹴りが、振り向きざまにセシルの腹へと突き刺さる。

ヴァーミンに順応したが故に獲得した身体能力で放たれた蹴りは、

浮遊中の飛姫種を吹き飛ばすのに十分な力を秘めていた。

「つー?」

衝撃の余り声も上げられずに吹き飛ばされたセシルだつたが何とか空中で体勢を立て直し、天井に張り付いた繁を睨み付け、使うまいと思つていた誘導弾の狙いを繁に定める。

「（正直これは使いたくありませんでしたけど……いい加減お父様のお説教にもうんざりしていた所ですし…致し方有りませんわ）」

セシルの腰に備わった砲塔から誘導弾が発射される。

繁は壁伝いに這い回り、どうにか誘導弾の追跡を逃れようと躍起になるも、努力虚しく見事爆発の巻き添えになってしまった。

結果繁は木つ端微塵に砕け散り、壁にも大穴が空いてしまった。礼拝堂が壊れた事でまたも怒鳴り散らすエスティだったが、この状況下のセシルにとって最早父親などさして重要ではない。

「さてと……事も済んだことですし、帰りましょうか」

PSを解除しドレス姿へと戻つたセシルは、今だ怒鳴り続けるエスティを無視して自室に戻ろうとする。

しかし次の瞬間、壁をすり抜けるようにして眼前に現れた者の姿を目に入したセシルの目の色が変わった。

「貴女は……」「カラ・フォックス！？」

「あ、誰かと思えば消費税横領と年齢不相応な薄い本向きの体型に定評のあるセシル王女じやありませんか。

直接お会いしたのは半年前のPS学院入学式以来でしたっけ？

「何故貴方がここに居るんですの！？幾ら強大な悪魔と取引をした

ところで貴女は一介の歎医者ですわ！

それが百戦錬磨のエリート魔術師団に敵うはずがありませんわ！」

「あ、まだそのネタ気に入つてたんですね？いやあ、女王陛下らしく寒くて売れなさそうなギャグだから、流行に囚われてばかりの

スイーツ（笑）な王女もすぐ飽きるかと思つたんですけど」

「ギャグですって！？貴女は自分が過去に犯した禁忌をギャグと偽り言つて開き直るんですの！？」

「開き直るも何も、嘘なんだから仕方ないじゃありませんか。まさかあのお話が事実だなんて思つてませんよね？」

幾らオワコン系王女、脳死系王女の異名で有名なセシル王女でもそれはありませんよね？

「冗談抜きでお願いしますよ！？いや切実に！」

「思つてるに決まつてますわ！」

貴女はお婆様の思い人を奪おうと計画し、その過程で外道に走り悪魔と取引して不死の肉体を手に入れた！

これは紛れもない真実ですよ！？」

「はあ……アホの宫廷魔術師達もそんな事言つてましたけど、セシル王女までとは……まあ良いです。

そういえばセシル王女つて、アホな王族ランキング王女編晩年一位でしたもんね……。

それは仕方ないですよね」

「そろそろ仕方ない事なのですわ。何せ私は　つて、今貴女なんて仰有いましたの！？」

今私がアホとか何とか聞こえましたわよ！？」

「へ？今頃気付いたんですか？気付くの遅すぎでしょ！？どんだけアホなんですか？」

だからアンタはアホなんですよ。判つてます？」

「貴女……どれだけ私をアホ呼ばわりすれば気が済むんですの！？」

「さあ」

「さあつて貴女……そもそも私を誰だと思つて　「あ！」　ち

よつと、聞いてますの！？

関係ない話題を切り出して話を反らせようつたつてそつは
！？」

突如背から腹に走る不快な激痛に、セシルは思わず言葉を失った。
痛みの中どうにか振り向くと、背後には驚くべき人物が立っていた。

「……ツジラ…バグ…テイル…！？」

「お久しぶりです、セシル王女。

そして、さよなら

端から馬鹿にしたような繁に何か言い返そうとするセシルだったが、
ふと力を込めた瞬間。

彼女の体組織が一瞬で木炭のように変化。更にそこへ亀裂が走り、
粉々に砕け散ってしまった。

「P.S 因子が身体から抜けた飛姫種は全身の細胞が炭化し死に至る
……話には聞いていたが、まさかこれほどとはな」

繁は仕上げとばかりに右手から溶解液の塊を放ち、エスティをも悉
く消し去った。

更にそれと時を同じくして床から這い出るよう現れたのは、今回
の作戦で影ながら重要な役割を果たしていた人物にして彼の従姉妹・

青色薬剤師こと清水香織。

「そうだね。でもさ、こんなにあつさり死ぬようなら態々七話半も
かけて攻撃する事無かつたんじゃないの？」

「まあ確かにそうなんだが、それじゃ破壊神っぽさが出ねえだろ?
さて、あとは城内の金庫を攻めて中身を手当たり次第頂くだけなわ

けだが」

「その件なら安心して。私がちゃんと例の場所に送つておいたから。
あとは回収するだけだで大丈夫な筈」

「そりや何よりだ。さて、金も手に入つた事だしこんな所さつさと
ズラかんぞ」

「了解」

「はいよ~」

目的を完遂した三人は、早々に城から立ち去ろうと帰路を急ぐ。
スピーカーからは予め録音しておいた番組を締め括る挨拶が流れ
おり、諸々の事柄が終わり次第城に仕組まれた古式特級魔術も解除
され、放送は終了する。

あとは適当にその場から逃げ去り、途中で香織が例の場所に送つた
戦利品を回収。香織の自宅にある兆眼紫円陣でそれらを燃るべき場
所へ換金し流し込む。

三人はそれぞれこの計画について始終不安で仕方なかつたが、それ
ぞれが協力し合つた事と偶然が折り重なつた事が功を奏し、無事完
遂するに至つた。

しかしながら、事件はこれで終わつていなかつた。

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）（後書き）

ツジラジ第一回、無事放送終了。しかし事態はこれで終わりではなかつた！？

第十九話　君が死を断念するまで説得をせぬない（前書き）

繁が去った後、礼拝堂に取り残されたあの男は……

第十九話　君が死を断念するまで説得をやめない

前回より

最早死体と炭の散乱する廃屋同然となつた礼拝堂の中にあつて、ただ一人生き延びた者が居た。

今となつては壊滅したツジラ討伐隊の隊長・オップス大佐である。繁との戦いで深手を負い、更にエスティに突き飛ばされ重体に陥つた彼は、生きることを諦め、このまま静かに死を待つ事を心に決めていた。

「（どうせ生きて帰つたところで、私は軍法会議にかけられた挙げ句投獄されて飼い殺しか、最悪死刑だ。）

鬼頭種の誇りに賭けて、生きる喜びを享受できない生涯を送るなんてご免だ……それこそ、死んだ方がましといつものさ」

大佐の決意は固かつた。それならば今すぐにでも舌を噛み切ればいいと、思つ読者も居るだろう。

しかしながら彼は、『どうせ死ぬのなら、せめて生きた日でもう少し、この景色を眺めていたい』という思いから、自殺を拒んでいた。その奇妙な心境は、徐々に命が果て往くその時間さえも、生きる喜びとして享受しようといつ、彼なりの哲学の結果であった。

そうして死を待つ彼だがしかし、ふとその耳へ幽かに羽音のようものを感じ取る。

「（これは……まさか……いや、そんな筈は……）

オップス大佐が思考を巡らせる中、羽音はどんどん大きくなつてい

く。

そしてそれが突然止んだかと思つと、ガラスの碎けるような音が、礼拝堂の中に響き渡る。

その後何者かが大佐の近くに降り立ち、そのまま歩み寄つてくる。

妙にゆっくりとした歩みに

一体何者なのか、傷の所為で瞼を開くことの出来ない大佐は傷付いた身体で身構える。

しかし、

「おいおい大佐、身構えるのはよしてくれないか」

その声を聞いて、オップス大佐は驚愕した。

「ど、ドライシス上級大将！？何故貴方がここに！？」

「おや、連絡していなかつたかな？忘れていたのだとしたらすまないね。

何、少し同類の気配を感じ取つたので来てみたんだが……どうやらもう、姿をくらましてしまったようだね」

「はい。尽力こそしたのですが、やはりヴァーミンの有資格者相手では力及ばず……結果部隊は私を残し全滅。

唯一の生き残りである私も最早この有様故、国王陛下を御守りすることも出来ず終い……」

「そうだったのか……」

「恐らくこのまま生きて帰つても軍法会議にかけられ、良くて投獄、最悪の場合死刑を言い渡されるでしょう。

そんな末路は鬼頭種の誇りに反しますので、いつそこまで静かに死んでしまおうかと、そう思つていたところで御座います」

大佐の話を聞いたドライシス上級大将の心の奥底から、得も言わぬ悲しみがこみ上げてきた。

彼女にとつては、例え歩兵の一人でも大切な軍の仲間であり、家族同然に愛すべき者なのだ。

それだといふのに、あんな身勝手極まりない王族如きを守るために、
それ程にまで尊い命が散らされたという事がそもそも、彼女にとつ
て怒りに値する事柄だった。

泣きそうになりながら、ドライシス上級大将は言つ。

「そんな悲しい事を言うものではないよ、大佐。鬼頭種が生きる喜
びを何より尊ぶ種族だというのは知つてゐるし、君は本官の大切な
部下だ。

だから君を投獄だなんて、本官は是が非でもしたくない。

でも軍上層部には王家支持派が大勢居るだろうから、彼らの意見を
考慮すると確かに、君に罰を与へねばならないのは明白だ」

「そうで御座いましょうな……ですから上級大将、どうか私の事な
ど捨て置いては頂けませんか？」

私はここで死ぬさだめなのです……ですから、私は

「だがしかし、だからと言つて君を見殺しにする事は出来ない。

そもそもだよ大佐、こりは思えないかね？」

ツジラ・バグティル一味が今回のような事件を起こしたのは、十中
八九アイトラス家の悪政が原因だ。

如何に無能であろうとも、国家首脳が襲撃・暗殺されるような事な
どあつてはならないし、それが推奨されるべき行為だとも本官は思
わない。

しかしだからと言つて、国家首脳陣はその立場に甘んじることなく、

『もしかしたら不安を募らせた国民が反逆を起こすかも知れない』
『明日にでも自分は暗殺されるかも知れない』という意識を念頭に

置き、それが現実にならないよう、国民を正しく導き守り通す事こ
そ、国家首脳のすべき事ではないのか、とね

「確かに……そうですが……しかしながら何故…彼らはエクスーシ
アでなく、この国を…？」

「理由は簡単だよ、大佐。国家首脳は常に国民を正しく導き守り通

すべきなんだ。

だがアイトラス家は違つた。彼らは王族である自分達に陶酔し悪政を行つてきた。

無論エクスーシア程ではないがしかし、国民が不安を募らせ怒り狂う原因となるには十分なものだ。

ラジオにゲスト出演していた二コラ女医の本を読んだことがあるのだけど、彼女は医学だけでなく政治にも詳しいようだね。

指摘は的確だつたよ。

ただ、彼女がジュルノブル城を襲撃する暗殺グループに肩入れすることは全くの予想外だつたがね。

大佐、本官は思うのだよ。ツジラ一味の言つとおり、最早王政とは古いのかも知れない　否、古いのだろう。

これからはラビーレマやイスキュロンを倣い、国民が直接選んだ人々が新たなる政府として一丸となつて国を治めねばならないのだ「政府が……一丸と……？」

「そうだ。今までの王政では、政府はあくまで王家の命令に従い、王家を補佐するだけの存在だつた。

当然政治的な発言力など持ち合わせていないわけだが、それは実に効率が悪い。

ルタマルスは　否、ノモシアは変わらなければならぬんだ、きっと。

これまでのように、王家だから、貴族だからと、ある程度先天的な血統で評価される文化圏ではなく、眞っ当に努力して確固たる実力を得た者だけが評価される文化圏へとね。

それこそが、この国に足りないものだと、本官はそう思つている。そういうた意味では、ツジラ一味のしでかしたこの一件、必ずしも完全な害であるとは言い切れないと思うのだが、どうだね？

「確かに……そうですが……しかしでは、これからどうするので？」

オップス大佐の問いに、ドライシス上級大将は答えた。

「そうだね……本官は　いや、『僕』は

軍を、去りうと思つ」

第十九話　君が死を断念するまで説得をやめない（後書き）

ドライシス上級大将の口から出た衝撃の一言…その真意とは…？果たしてこの一人の運命や如何に…？

第一十話 旅に出よひ、いりやはない何処か 謎と神秘の漂うあの大地まで（前）

ドライシスの発言にオップス大佐は……

第一十話 旅に出よづ、Jリーグではない何処か 謎と神秘の漂うあの大地まで

前回より

「失礼ながらお伺いします……正気ですか？上級大将」
オップス大佐の間に、ドライシスは答える。

「正氣が狂氣か、それを完全に保証出来る者はこの世に居ないが……」
僕は本氣だよ、オップス君
「しかし、宜しいのですか？」

「何がだい？」

「着任中の身でありながら生きたまま軍を去つたとなれば、只では済みませんぞ？」

我等は国家反逆罪に問われ、それこそ投獄や極刑は目に見えてあります……」

「何だ、そんな事かい？心配は要らないわ。手は打つてある」

「と、仰有りますと？」

ドライシスはオップス大佐の間に、淡々と答える。

「Jの礼拝堂をね、爆破してやるのを」

「ば、爆破……ですか？」

「そうさ。放送を聞く限り、ツジラは奇抜な作戦が得意な男だ。違
うかい？」

「いえ、奴は奇策に秀でた男で御座いますが……」

「それなら都合が良い。奇策を特技とする男が、罠の一つや二つ仕掛けないなんて逆に可笑しいだろ？」

見たところかなりのエンターテイナーだったようだから、派手な事をしたがるとも考へられる。

そこで僕達は、そこを逆手に取る

「……成る程。つまりこの礼拝堂を爆破し、ジジワの罠により我々が死亡したと見せかけるのですな？」

「その通りさ、オップス君。

幸いなことに僕は炎の魔術が得意でね。爆薬に見せかけてこの教会一つ吹き飛ばすくらいの訳はない。

そもそも彼らの仲間には、古式特級魔術の使い手が居ただろう？その片鱗と思わせれば、例え魔術であると判明しても誤魔化しが効く。残留魔力分析から個人を特定される恐れもあるにはあるが、竜属種にその方法は通用しない。

あとは……そうだ。念のためにより死を信じやすくさせる為の偽装工作をしておこうか

「偽装工作？」

「そう、偽装工作だ。というのは要するに、君の軍服だと、僕の指の骨なんかをこの場に捨てておくのだ。

そうすれば偽装された死はより真実味のあるものに成り果て、走査線をかく乱することが出来るようになる。

心配することはない。竜属種は元よりしぶといんだ。指や腕の一本や一本、一回もすればまた生えてくる。

「どうだい？これでもまだ、潔く死ぬ事に拘るかい？」

ドライシスの間に、オップス大佐は笑みを浮かべて[冗談交じりに答える。

「仕方ないですね。ドライシスさんがそんなに私と一緒に居たいといつのなら、生き残つてみましょうか」

「フフ…その意気だよオップス君」

「但し、私はかなり重いですよ？ドライシスさんの体格で、大丈夫

ですか？」

「おやおや、竜属種もかなり軽く見られたものだね。大丈夫さ、竜属種は力自慢だし、何より今回は転移の術を使って、一気にエレモスまで飛んでやろうと思つていたからね」

「エレモスですか……謎めいた第六の大陸、良いですねえ。私達二人のセカンドライフを送るにはもってこいの場所だ」

「そうだろう？では、軍服を脱いでくれ。転移終了と共に術が発動して、礼拝堂が吹き飛びようにしてあるからね」

「判りました」

「そうだ、いつそ僕の軍服も脱いでしまおうか。心機一転の意味合いも込めて、エレモスではもつと女らしい服を着てみたい」

「良いじゃありませんか、きっと似合いますよ」

こうしてオップスとドライシスは自らの上着を脱ぎ捨て、転移の術を用いてノモシアから遠く離れた神秘の大陸・エレモスへと向かつた。

そしてそれと時を同じくして、ジユルノブル城最上階の一角に立てられた豪奢な礼拝堂が、凄まじい爆発音を伴つて盛大に吹き飛んだ。

翌日以降

卑劣かつ背徳的な虐殺行為であつたにもかかわらず、『ジジラジ』は多くの民衆の支持を獲得していた。

というのも、事実ルタマルスを初めとするノモシア王政国家の政治体制は議会政治を取り入れている国家のそれより異常な点が多く、ごく一撮み程度の政治家や貴族、懐古思想の強い高齢者等を除き王政を支持する者は微塵も居ないというのが現状であった。

この事から、王家を一方的に批判・侵略する繁達の行動は、ある意味で王家への不安を抱えていた民衆達の怒りを代弁するようであり、

それが高い支持率に繋がったのである。

こうした現状と、本件での実質的な王家壊滅及び国王エスティ・アイトラスの醜悪な本性露呈を皮切りに、ルタマルス政府は王政を廃止。以降は政府主導での議会政治を取り入れるようになった。

更にその動きを察知したノモシアの各王制国家も、王族や貴族をあくまで国家の象徴として置くことで政治への直接干渉を禁止し、王族・貴族の権威を殺ぐ動きを見せ始めている。

ただ問題は、影で実質的な独裁国家と呼ばれているエクスーシアがこの流れに乗っていないという事であるが、大陸同盟はこの件の解決策も隨時考案中のことである。

第一十話 旅に出よひ、いりやはない何処か 謎と神秘の漂うあの大地まで（後）

ランゴ・ドライシスとヒリヤ・オップス。

死を装つてまで軍を抜け出した二人の旅は、まだ始まつたばかり。

でもシーズン2以降の主役は、やっぱり繁達。

第一十一話 生徒が次々と歿死していく理由を説明出来ない（前書き）

あの悲惨なテロ事件から一週間後、事件は今一ページで起つた。

第一十一話 生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない

ジユルノブル城襲撃から一週間後・東ゾイロス高等学校

学術ラビーレマの大國に存る名門私立高等学校・東ゾイロス高等学校の夕暮れ時。

多くの生徒達が自宅や寮へ戻り、一部は部活動の練習などで校内へ残っている時間。

広い体育館の片隅で練習に励むのは、実力者揃いの東ゾイロス高校バスケットボール部の面々。

練習風景の見回りをしていた亀系有鱗種（禽獸種・羽毛種の爬虫類版）の顧問が、ふとある事に気付く。

「（諭訪が居ない……？）」

部員が一人、足りないのである。

その部員・諭訪というは大変に真面目な尖耳系靈長種の男子寮生であり、無断で欠席・早退するなど有り得ない程の人格者であつた。華憐で手足が細く、虛弱で儂げな美男子ながらに、持ち前の機敏さを生かして毎度試合ではチームの勝利に貢献する優秀な部員である諭訪を顧問は気に入っていた。

気に入りであろうがなかろうが、自らが顧問を務める部活の部員が失踪したとなれば心配するのが教員といつもの。

顧問は早速部員達への聞き込みを始め、ある部員から『休憩時間中トイレに行つたのを見たがそれ以降見ていない』という証言を得るに至る。

余計心配になつた顧問は、早速部員達が利用する男子トイレへと向かつた。

しかしトイレに諏訪の姿はなく、顧問は結果的に他に諏訪が行きそうな場所を一時間以上かけて探し回ったが、結局諏訪は見当たらなかつた。

念のためにと諏訪が寝泊まりする寮にも連絡を入れたが収穫は皆無であり、ふと時計を見れば練習が終わる時刻が近かつたため、戻つて部員達を帰らせようと、顧問は体育館へ戻ることにした。

と、その道中。

「つぎやああああああああ！」

「ひいいいいいいい！」？

「な、なんだああああああ！」？

部員達の悲鳴が響いた。

丁度、練習中隊長を崩した部員達を休ませる為に使っている休息所の方角からだつた。

「（一体何事だ！？）」

まさか校内に不審者でも現れたんじゃないだろうな？

顧問は思った。

つい先週ノモシアの方で城が襲撃され、宮廷警備隊や軍人、王族など述べ100人以上が殺害されたテロ事件のように、良からぬ事を企む輩が入り込んだのかもしれない。

そう思つただけで、顧問が抱えていた不安が急激に肥大化していく。

「（だとすれば…最悪俺が身を挺しても奴らを守るだけだ！）」

そう決意した顧問は、亀ながらにかなりの早さで休憩所へ駆けていく。

そして、休憩所

「お前達！無事かつ！？」

「先生っ！」

休憩所に入るとすぐさま部員達が駆け寄ってきた。

「良かった……全員無事らしいな。

それより、一体何があった？」「

「それなんですが、その……」

誰もが酷く怯えているのか、部員達は中々言葉を切り出せない。

顧問は一度部員達を外で待たせた上で、休憩所の中に入っていく。

暫く進んでいると、休憩所の奥にあるベッド一つの間から、茶色い枯れ木のような物体がその先端部を除かせていた。

そして顧問は、ベッドの間に打ち捨てられていたその物体の全貌を目の当たりにして、思わず言葉を失った。

「（…）これは……どういう事だ…？」

だがこれで、あいつ等が悲鳴を上げたのも納得が行く……）

顧問が目にしたその物体 てっきり枯れ木か何かだろうと高を括っていたそれは、極限まで水分を失い干涸らびて絶命した人の死体であった。

体格から推測するに年齢は15～17歳、種族は靈長種と言つたところだろうか。

体組織は殆ど骨と皮だけとなり、何故か頭髪の色素も限界まで抜け落ち、更に両目の水分が完全に失われた結果、まるでえぐり取られたように眼窩の大穴が存在していた。

「（一體何がどうなつてゐるんだ……？）」

等と考え込む顧問の頭にふと最悪の事態が過ぎるも、しかしあやはり教員と言うだけあり冷静を保つ顧問はこの事を学校に報告し、部員達を即時帰らせた。

発見された死体はすぐさま教員達の手で解剖にかけられ（ラビーレマでは情報漏洩や無駄な混乱を防ぐため余程の大事件でもないかぎり、事の解決に公的機関を頼らない流れが一般的である）身元調査が行われた。

結果として襲われたのは、バスケットボール部一年の諷訪という生徒であると判明。

即ち、顧問の予測した不吉な予感が的中したと言つことになる。

翌日以降学校側は事を荒立てない為、死体の第一発見者であるバスケットボール部員を公欠扱いとして欠席にする等して情報漏洩を防ぐと共に、有効な打開策を練り始めた。

そうして三度目の職員会議序盤、羽毛種の数学教員がこんな事を言い出した。

『そつといえれば先週ノモシアの城を襲撃したラジオ番組の三人組は、自分達に解決して欲しい謎や事件のネタを募集しているのではなかつたか』

更に数学教師は続ける。

『彼らの番組の題材として、この事件を解決せるとこひのはどうだりうか？

彼らはコンセプトにより収録した情報を編集すると言つていたし、仮に生中継だったとしても校名を出さないようにして貰えれば良い』

数学教師の提案に、職員達は真つ一つに割れて対立した。

一方は物理教師の考えを支持する賛成派で、繁達の高い実力を評価しての事だった。

もう一方は反対派であり、此方は繁達がテロリストであるから迂闊に信頼してはならないという考え方を持っていた。

ちなみに根っからの王政嫌いだった顧問は賛成派であり、この事は賛成派にとって強みとなっていた。

二時間にも及ぶ議論の末賛成派の意見が通る事となり、代表として理事長が繁達へ宛てた依頼状を出す事となつた（この事は理事長たつての希望によるものである）。

教員達が安堵したのも束の間、校内に潜む謎の存在は次々と生徒達をその手にかけていき、次々とミイラ化させて殺害していく。事態を重く見た理事長は事情を生徒や生徒の保護者にも報告し、徹底した情報奇声を敷くよう要請。

更に表向きには感染症流行の為と題して長期間の学校閉鎖を遂行（事実この時、ラビーレマでは運良く季節性の感染症が出回つており、欠席者もかなりの数が居た）する事で、これ以上の犠牲者を増やすないようにした。

第一十一話 生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない（後書き）

次回、遂に繁達が動き出す！

第一十一話 日常？（前書き）

暗躍する何かに苦戦を強いられる東ゾイロス高等学校職員陣。一方その頃『ツジラジ』のスタッフ三人は……

第一十一話 日常？

前回より更に数日後・エクスーシア国境付近に佇む薬屋

三人の男女が、テープルを囲んでいた。

一人は長身瘦躯に眼鏡の男。

一人は深紅の長髪を棚引かせた女。

一人は狐の耳と尾を持つ、白衣を着た女。

「さて、今回のツジラジだが……実は適当にかけておいた募集の方へ贈つてくる奴がかなり居てな」

男女の内の一人、長身瘦躯に眼鏡の男が話を切り出した。

彼の名は辻原繁。元居た世界へ戻る為、カタル・ティゾルの破壊神を目指すべく猶奇系DJツジラ・バグテイルとして神出鬼没系謎解きラジオ『ツジラジ』を主催する異世界人である。

「お、私がやつたあの適当な宛先に送ろうつていう奇麗な人がよく居たもんだね」

それに返すのは、この家を仕切る深紅の長髪を棚引かせた女・清水香織。

繁同様異世界人である彼女は繁の従姉妹兼補佐役でもあり、ツジラジの放送に置いてはDJ青色薬剤師を名乗り諸々の連絡等を行う。

「そんなに適当には聞こえなかつたけど……つていうか、前回ゲストだつた私の扱いは？」

自らの行く末を案じる（？）よつた事を言つ白衣の女の名は、ニコラ・フォックス。

嘗てルタマルスで開業医として活動していた医学博士であり、若干

19歳にして呪術により不老不死の身となってしまったという壮絶な過去を持つ。

王家に対する批判から政府に追われているところを繁に誘われ、ラジオの初回でゲストとして出演していた。

「手紙もメールもかなりの数ですよ。合計で二十万件くれえ来てんだわ、コレが」

「に、二十万件つ！？」

「一体何処からそんな数値が出るの！？」

「正直バカみてえな数値だが、その九割が電子メールですよ。郵便の方は多分検閲か何かに引っかかるて処分されたんだろうな。まあ六大陸の主要な国家全体に向けて放送してたんだ。そんだけ来たって何ら変じゃねえさ。

流石に全部採用する訳にも行かねえんで、ノモシア舞台にしたのを省いて三割減らし、更にそつからあんま金が入りそうに無い奴を省いたら更に五割減った

「それでもまだ四万件残ったの！？」

「残ったな。んでまあ、そんなんじゃ話進まねえわな。

という訳で、収入が不確定な奴を省いた。宝探しとかその辺だな」「幾ら減ったの？」

「大体八分くれえにはなったんじゃねえか。それでもまだ一万件以上あるけどな。

更に追加で内容重複と面白く無さそうな奴を適当に省いて五分の今まで減らした

「一気に減ったねえ」

「半ば適当に省いたからな。大丈夫だ。省いた分は後々の放送にも転用する。

んで、更にこれを厳正かつ適当に審査した結果」

「どうちよ？」

「どうにか一つに絞り込めた。現場は学術大陸ラビーレマの中枢部の『列甲大学』」「れ、列甲！？」の、関連校として名高い東ゾイロス高等学校だ」

「あ、そつちか……良かつた」

香織は一瞬ぎょっとした。

『ツジラジ』が列甲大学などに挑むなど、考えただけで身の毛も竦立つような話だからだ。

列甲大学は、科学の力を用いた技術『学術』を主導とする大陸ラビーレマに於ける教育・研究機関の最大手であり、学術者の聖地とも呼ばれる巨大機関である。

その名前は創立者である天才羽毛種・列甲に由来し、面積は一つの大都市に匹敵。通称として『大学園都市』とも呼称される。

一部では学術のみならず魔術の研究にも着手しており、その影響から大陸外にも数多くの関連校を持つ。

その為他の大陸・文化圏からの入学者も多く、今となつてはラビーレマそのものが多種族文化圏となりつつある程。

東ゾイロス高等学校は大学園都市付近に存在する都市ゾイロスに存在する高等学校であり、大学園都市には遠く及ばないものの凄まじい規模を誇る教育機関であった。

「そういえば知り合いが東ゾイロス出身だつたつけ。でもあそこ、そんなに問題らしい問題なんてあつたつけ？

ノモシア、ヤムタ辺りはまだ王政が続いてるし、イスキュロンは退役軍人の横暴が酷いとか、アクサノは海神教過激派の猛攻が酷いつて聞くけどさ、それに引き替えラビーレマって治安も経済状況もさして問題ないよね？」

一時期権威主義が横行したこともあつたけど、それも今ではあつてないようなもんだし」

「どうでも良い事だけどニコラさんって大陸情勢に詳しいよね」

「伊達に70年生きてないからね。それで、案件は？」

「理事長をやつてる『生まれたての73歳児』さんからのお便りでな、近頃校内に妙なのが沸いて出るとかでよ。

幸い校外には出ねえそだから生徒を自宅待機させ、職員が交代で見張ってるらしい。

だがまあ、公的機関にバラすと情報が漏洩して寧ろ厄介になりやがるから、ジユルノブルの宫廷警備部隊を皆殺しにした俺らの力を借りてえんだと」

「ハンネのセンスもあることながら、とんでも無いこと頼んでくる理事長だね……っていうか、シジラジって結局大陸全体にオンエアされるから厄介事になるのは変わりないんじゃ……」

「だからジユルノブル戦よろしく生放送でケリ付けてくれつて言って来やがったよ。

成功時の報酬は前回回収した分の1・5倍、失敗したら保険で2・2倍出すとよ」

「なにそのヌルゲー」

「八百長かませつて言つてるようなもんじやん

「そんな事言つてやるなよ。幾ら俺でも保険の話は後々断つたさ」

「あ、断つたんだ。珍しいね。何やるにしても大体何時も逃げ道確保する癖に」

「世の中には確保して良い逃げ道と確保しちゃならん逃げ道があるんだよ。

んで敵の特徴についてだが、今回も人間サイズを相手に戦う事になるんじやねえかと踏んでいる。

但しそうだとしても、やり口を見る限り靈長種じやない可能性も高

「屋内戦となると私のマルファスが本領発揮だね

「タセックモスも狭い室内でなら起動読まれにくく分活躍の幅広がるし」

「良し。んじゃ早速台本を練るか

こつじて始まつた作戦会議の末、ニコラはゲストとして二回田も出演する事になった。

第二十一話 日常？（後書き）

次回、殺人事件の犯人グループが遂に登場！

第一二三話 Mr・クエインのお氣に入り（前書き）

物語は謎めいた薄暗い一室から始まる・・・

第一二三話 Mr・クエインのお気に入り

前回と同時刻・ある一室

薄暗いその部屋からは、実に悲痛で痛々しい喘ぎ声が響いていた。喘ぎ声は若い、恐らく十代の女のものであり、その声には恐怖と苦痛と不快感、そして快樂が混じり合っていた。

それと同じくして鳴り響くのは、生理的な嫌悪感や不快感を催すような、湿った音。

擬音語で表すなら、ぐちょ とか ねちょ とか ぬぢゃ だとか。

そんな不愉快な音が激しくなる度、喘ぎ声の悲痛さは増していく。

そんな事が続いて、早十数分。

静かになつた部屋の中で、男の声がした。

「やはり生娘の精氣は良い…………二十歳に見たぬ処女のそれは至高……」

しかし、「しかしだからと言つてもだ、幼すぎても良くなはない。十五に見たない稚児などは、味も悪いし見た目も悪い」

男の変態じみた独り言を遮るように補つたのは、これまた若いしかし今度は二十代程の女の声。

「おや、誰かと思えば小樽さんではありませんか。

「一体どうしたのです？」

「お楽しみ中の所失礼致します、Mr・クエイン」

「いえいえ、構いませんよ。丁度今終わつたところですから」

「有り難う御座います。

では、ご報告致します。今後の戯事についてですが……状況が変わりました

「状況が変わつた……とは？」

よもや、以前のように現地の空氣を感じながらの戯事が出来るようになつた、という事ですか？」「

「いえ、残念ながらそのような良い変化ではないのです」

「ふむ……そうでしたか。つまり『状況は悪化の一途を辿りつつある』と？」

「左様で御座います。

単刀直入に申し上げます。祭品ジブンの供給源を、断たれました

クエインが動搖する様は、暗闇の中でもハッキリと感じ取れた。

「何と……一ょつによつてもう少しあう補充せねばならぬとこつ時になつてですか？」

「我々の動向を覚つた職員共は、感染症の流行を理由に穢れ無き子らの登校を封じました。

申し訳御座いません、Mr……これも全て私の力不足が招いた事に御座います……」

暗闇の中、小樽はクエインに頭を下げる。

「頭をお上げなさい小樽さん。貴方が謝る理由などどこにもあります」

「しかし」のままでは……」

「心配」無用。また何か打開策を立てれば良いだけです。

我等クブス一派の栄光は、まだ十分取り戻せます」

高らかに宣言するクエインに、小樽は再び申し訳なさそうに話を切り出す。

「それとモ」「もう一つ申し上げねばならぬ事が御座います」「何でしよう?」

「度々不吉な事柄で申し訳ないのですが、職員共が我々を始末しようと刺客を送り込んでくる事が判明したのです」

「刺客ですか?」

「はい。それも音声データによりますと、何でも刺客といつのは……一週間前ノモシアで勃発したジユルノブル城襲撃事件の、その主犯であるツジラ・バグテイル一味であるとの事でして……」

「何と!あのツジラ一味が?確かにあのラジオ番組では身の回りに潜む謎や事件を募集していましたが……まさか我々がその手にかかるつとは……」

「まだ確定的ではありませんが、来るという覚悟だけはしておぐべきかと」

「そうでしじうね……(しかし何と云ひ)ことだ……まさかツジラ一味とは……」

クエインは頭を抱えた。

「(私はまだ良い……しかし、しかし問題は彼女だ……。

ラクラ……ラクラ・アスリン……彼女だけは絶対に守り抜かねば……)

決意を固めるクエイン。

そんな彼の決意も知らず、別の一室に備わったベッドで眠り続ける

のは、旧式体操着に紺色のブルマーといつ出で立ちの兎系禽獸種の少女、ラクラ・アスリン。

肉付きが良く豊満な体つきをしながら、まるで幼子のように無邪気に眠る彼女の部屋の床には、先日東ゾイロス高校で見付かったような、全裸に剥かれ干涸らびた男の死体が転がっていた。

第一二三話 Mr・ウェインのお気に入り（後書き）

次回、ツジラジスタッフが遂にラビーレマへー。

第一十四話 ネカフエから失礼致します（前書き）

かくしてラビーレマへ辿り着いた三人だつたが・・・

第一十四話 ネカフュから失礼致します

翌日・ラビーレマ首都圏

『さて、そういうわけでだ。俺らは今変装かましてラビーレマ首都圏某所 つーか東ゾイロス高校のすぐ近所にあるネカフュに居る説

だが

『うん』

『だねえ』

『そうね』

『冗談抜きでやばいね』

お互い離れ離れの個室を取り、魔術道具による簡単な念話によって会話する三人。

しかし現在三人は皆、総じてパソコンの前で頃垂れていた。
詳細な理由は不明なのであるが、三人とも移動途中から徐々に疲れが出来、ラビーレマ首都圏に着く頃には不老不死である筈の二口ラさえもかなり疲弊した状態になってしまっていた。

『何が原因なんだろ……』

『……二口ラ、お前何か知ってるんじゃないかな?』

ラビーレマ独自の感染症とか、疾患とか

『あるにはあるけどさ、どれもこんな症状じゃないわ……』

『じゃあ何が原因なんだ…? 税関回避ルートでの長距離移動に備えて事前に疲労止めの薬飲んでたよな?

確かに香織の師匠の……』

『トリロ婆様直伝のアレね。効き目は確かだよ?』

『そりゃそうよ。大昔の薬学の教科書にも大きく書いてあるもの。

「サキモリガの幼虫はタテムシと呼ばれ、その内蔵は疲労回復に効果観面である」つて。

薬学の先生、生徒思いでサービス問題とかけつこう出してくれてたんだけど、テストには毎回その問題が出ててね。嫌でも覚えたわ『『そうかよ……じゃあ香織、トリロ婆様はこの薬の副作用とか言及してたりしたか?』』

『いやそれが……何にも無し。ノモシア圏内で使う分にはほぼ万能って言つてたけど……ちょい待ち、ノモシア圏内?』

香織は思い立つたように重い身体を持ち上げ、スリープモードにあつたパソコンを叩き起こす。

SFめいた大陸だというのにこいついた細かい部分は現代の地球そのままである事に安堵しつつ、検索エンジンを立ち上げキーワードを入力。

検索結果で出てきたページを幾つか見て回った後、香織は机へ盛大に倒れ込み、その後か細い声で言つた。

『ごめん。薬なんだけどさ……あつたわ、副作用』

『……マジで?』

『……どんな副作用だ?』

『これや……ノモシア区域以外の水・植物と併せて摂取すると真逆に作用するらしいの……』

一向はこの薬を服用するに当たりその辺の量販店で、アクサノを原産地とする果実『キツルギ(学名・ムサ・マコシエンシス。地球のバナナに相当)』を原料とする乳酸飲料を購入。それを水代わりに薬を服用していた。

『つまり俺らは、疲労防止のつもりで疲労を増幅させる薬を飲んでたと……』

『大学の教科書には載つてなかつたんだけどねえ……』

『論文として公的に発表されて学会で認可されたのが実に20年前の事だから、この話』

『ああ……それじゃ知らないわ。

それで、対処法は？』

『ビタミンC入りの炭酸飲料……その辺の自販機にある奴で事足りるみたい』

『マジでか……ちょい買つて来るわ』

繁の買つてきた炭酸飲料の効果は凄まじく、疲労感はすぐさま回復した。

それこそ、吹き飛ぶという表現が適切なほどに。

街中

「効いたな、炭酸飲料」

「まさかあそこまでの即効性とは思わなかつたよ」

「凄い。流石ビタミンC凄い」

「ていうか炭酸が地味に効いた。あとビタミンC以外に入つてた諸々の栄養素も。

副作用を打ち消したのか、薬の効能自体が無かつたことになつたのか、どちらでもいいやつてぐらうに」

「全くだな。さて、早速スタジオと情報の確保を　　ツドオオオオオン！　ぬお！？な、何事だ！？」

突然の地鳴りと逃げ惑う人々の悲鳴。その源に居たのは外皮が黄土色のワイヤーーンであった。

ワイヤーーン。分類学上二足飛行竜といふカテゴリに属する動物類であり、前脚が現実世界に於ける翼竜類（プレラノドン等）や翼手目^{「コウモリ」}のように発達した大型爬虫類である。

全長はしめて6m。中型肉食恐竜ほどの大きさだが、それでも町中に出れば十分脅威と呼べる存在であろう。

「ワイバーン類……頭骨と鱗からしてシックタシアス科、角から考えると性別は雌だな……」

「時期と動きを見ると、繁殖期なのにプロポーズしてくれる雄が居なくて気が立つてたみたいだね」

「いや何で冷静に解説してるの！？イトコ同士語らつてる所悪いけど、流石に不老不死の私でもこれは逃げるよー？」

「いやいや、そこは逃げるなよ。ワイバーンなんて元々寿命長い癖に繁殖頻度低くて個体数少ないのに増えすぎて困るつてぐらいの戦闘能力がある動物だ。

写真や文献での資料は腐るほど在るが、その反面映像資料は極端に少ない。

飼育してる施設もカタル・ティゾルでも片手で數えられるぐらいしかない、そんな何か微妙な奴らなんだ。

ヴァーミンの有資格者を代表して触れ合つたつて罰は当たらんだろう」「どういう理屈！？」

「私はヴァーミンの有資格者の身内兼相方を代表して触れ合つことにするよ」

「いやだからどういう理屈！？」

等という二コラの突つ込みも意に介さず、二人はワイバーンに向かつていく。

繁は正面からトリックキーな動きでワイバーンを挑発するように走り寄り、それに続く形で香織はその背中に飛び乗る。

かくして人々の逃げ惑う中、香織と繁のコンビによる奇策と魔術を駆使したワイバーン狩りが始まるかと思われた。

しかしその予想は、大きく外れることとなる。

荒ぶるワイバーンの足下から、突如緑色をした炎が上がったのである。

第一十四話 ネカフェから失礼致します（後書き）

突如上がった炎の正体とは！？

第一十五話 マチでヒコウが燃え尽きる頃（前書き）

雄運無^{おとない}さ故に繁殖^{けつしん}出来ないワイバーンの足下^{あしあ}が、大炎上！

第一十五話 マチでヒリュウが燃え尽きる頃

前回より

雄運無さ故の苛立ちが原因で街を襲つてしまつたワイバーンの足下で上がつた炎は、瞬く間に彼女を取り囲んだ。

『ヴァオオオオオオン！ゴアオオオオオン！』

緑色の炎に脚を焼かれ、腹を炙られたワイバーンは飛び立とうと躍起になるが、一度着地の為地面に下ろした両足と両翼は接着剤のようなもので地面に固定され、動かすことが出来ない。

シックキタシアス科のワイバーンは更に体温・水分をなるべく逃がさないよう強固な鱗を持つている。

しかし今回はその『熱を溜め込みやすい』といつ鱗の性質が災いしその巨体は極端に熱せられていく。

香織は隙を見て背中から逃れ、繁と共に傍観へ徹する事とした。最早これは自分達が手出しすべきではないと判断したのである。

『グアオアアアアアツ！』

ワイバーンは尚も、地面に貼り付いて動けないまま炙られていく。そしてその熱は脳を余裕で煮えたぎらせ、熱中症に近い症状に陥つたワイバーンはうめき声も上げずに絶命した。

逃げ惑つていた人々は最初、自分達の眼前で何が起こつたのか理解できず戸惑つっていたものの、次第に状況を理解。訳も判らず盛大に歓喜した。

緑色をした炎は自然に消え去り、石畳の幅広い道に残されたのは、無傷なまま熱を持つて死に絶えたワイバーンの亡骸のみ。

そんな状況下で、繁達は。

「凄いね、まさか古式特級魔術?」

「いや……それというか、科学的な手法によるもんだろうな。只でさえ少ない古式特級魔術の使い手が、よりもよってラビーレマなんぞに居る訳もあるめえ。恐らくは遠隔から弾頭やら小型ロボやらを使って炎や接着剤を仕込んでだんだらうよ」

「あの緑色の炎は?」

「炎色反応だ」

「炎色反応? 結晶乗つけた針金の先端をバーナーで焼いたらそこだけ色が変わるもの?」

「花火の色づけとかにも使うよね」

「そう。基本原理はそれだが、燃料に色々な化学物質を混ぜて焼く方法だと炎全体に色が付く。極一部でも色々な色があつてな……」

以下に、主要な炎色反応の組み合せを記す。

リチウム	：深紅
ナトリウム	：黄
カリウム	：淡紫
ルビジウム	：暗赤
セシウム	：青紫
カルシウム	：青紫
ストロンチウム	：橙赤

バリウム・黄緑

ラジウム・洋紅

銅：青緑色（燃焼エネルギーを奪い温度を下げる）
色の振り幅を変更すれば青も可能

ホウ素：黄緑

ガリウム：青

インジウム：藍色

タリウム：淡緑

リン：淡青

ヒ素：淡青

アンチモン：淡青

「炎の色が緑だった所を見ると、燃料に混ざつてたのはバリウムかホウ素、それが銅だらうな」

「断定出来るものなの？」

「そりやお前、色彩パターンなんぞ成分構成や温度の違いで千差万別だ。

これならこの色、なんて断定出来る物質なんぞありやしねえ。

あとよ、二口づけ

「何？」

「お前言つてたよな？『ヴァーミンの有資格者同士は互いを認知し
あい、偶発的に出会いもある』ってよ」

「言つたねえ

「何かよ、今になつてそれが初めて判つた気がしたぜ。

実は今朝紋章が右肩の方に現れてたんだが……今その右肩、無茶苦茶脈打つてんだよ

「つて事は……つまり……あれをやつたのは、ヴァーミンの有資格者かも知れないつて事……？」

「そういう仮説も、強ち間違いじゃねえかもな。

番号は判らんが、十中八九向こうもこっちを認識していると考えて間違はあるめえ」

「となると、今回の案件にも絡んでるのかな?」

「それは些か飛躍した推測だが、頭に入れておいて損は無えだろつよ」

等と語らいながら、繁達は東ゾイロス高等学校で起こる謎の事件について何かラジオに使えそうな情報を探すため、その場から立ち去った。

ワイバーン死亡に沸き立っていた群衆達も次第に死体の周囲から離れ始め、各自の目的地へ向かいだす。

何処からともなく現れた、地を這う無数の赤い粒子がワイバーンの死骸へ一斉に集まる。

そして粒子が動く度、ワイバーンの死肉が驚くべき速度で消えていく。

この粒子こそはラビーレマ全土に備わった有機ゴミ処理システム『トラッシュバイター』である。

この胡麻粒ほどの小さな飛べない甲虫達は極小の電子機器によりその行動を制御されており、命令されるが依に動き、貪り、増え、そして死んでいく。

他の大陸政府からは未だに暴走の危険性を示唆され続けているこのシステムだが、不思議なことに今の今まで災害を引き起したことは一度もない。

死骸を食い尽くしたトラッシュバイターが立ち去ると、今度は何処から都もなく、ゴミ収集用のキャタピラ車が現れてワイバーンの白骨を回収していった。

全てが丸く収まつたのを見計らつたかのよつて、建物の影から素早く女が現れた。

アジア的な顔つきに緑色のポーテールを棚引かせたその女の年齢は、見たところ二十代ほどであろうか。

ほつそりした肢体が爽やかな外観の黒いスーツを着こなす様は、彼女があらゆる能力に秀でた秀才である事を彷彿とさせる。

女は「ミニ収集車が取りこぼした骨片」に歩み寄り、それを拾い上げて呟く。

「馬鹿ですねえ、貴女も。幾ら結婚できないからって、幾ら雄運が無いからって、街に攻め入るなんて……本当に、救いようのない馬鹿ですよねえ」

骨片を近くの「ミニ箱に投げ捨てた女は、そのままビーレーハマの町並を歩き出す。

「まあ、そんな馬鹿の事なんて氣にしてたらキリがありませんよね。馬鹿ほどの世界に腐るほど居るようなものなんて、そつありませんから。

それより今注目すべきは、あの三人組ですよ。

彼ら……特にあの昆虫のようなマスクを被つた男性は、実に興味深い。

あのマスクの形状からするとモチーフは蟻でしょうか？
しかしながら見たことの無い姿……もしや、アクサノ学会も認知していない新種……？

何やら面白そうな雰囲気ですねえ……彼らの後、付けてみても良いかも知れません。

つと、それより前に……何か食べまじょ。流石にお腹が空きまし
た」

女は「よく普通に、飲食店のある方角へと歩み出した。
しかし彼女が三歩進んだ直後、その姿は一瞬にして消え失せてしま
つた。

第一十五話 マチでヒロユウが燃え尽きる頃（後書き）

突如現れた謎の女、その脚力の秘密とは！？

第一十六話 謙虚理事長と隕の葉虫（記書セ）

理事長・緒方ニシツ葉の独白。

第一十六話 謙虚理事長と蝶の葉虫

読者の皆さん、初めまして。東ゾイロス高等学校理事長で多眼系靈長種の緒方三ツ葉です。

さて、学校を閉鎖してもう一週間近く経ちました。ラジオローのツジラちゃんからのお返事によると、第一回田の舞台は是非とも我が校にしたいという事でした。

また私は、協力者への敬意を示すためツジラさん達に多額の報酬をご用意し、事件解決に失敗したとしても保険として多額のお金差し上げようと考えていました。

バグテイルさんからのお返事にはその件についても触れられました。しかし、何と彼は「事件失敗に際してお金はお受け取りできません」と言つてきました。

私は驚くと共に、この人は何と人格の優れた人なのかなと思つてしましました。

サービス業に於いて重要な事の一つには、業者と顧客との信頼関係が含まれます。

業者は顧客からの報酬を代価に、報酬に見合つ、若しくは報酬以上のサービスを全力で提供する。

それが普通である事は、読者の皆様もよぐり存じの所だと思います。

しかし世界に絶対的な法則など存在し得ず、あらゆる存在・原理・現象には何らかの形で例外が存在します。

例えばヤムタの慣用句には、『打ち水、杓に戻りす』といつものがあります。

打ち水とはヤムタに古くから伝わる風習で、敷地や路面に水を撒き路面の塵が舞い上がるのを防いだり、気温の高い季節は気化熱を利

用して涼氣を取る目的でも行われます。

またこの時に撒かれる水の事も指し示しており、この慣用句の場合
は此方の意味合いでしそう。

杓とは液体を掬う道具の事で、こちらも古来ヤムタに伝わる伝統的な工芸品の一つです。打ち水に用いられることもあったでしそう。

この慣用句を私なりに解釈すると、「打ち水の為、杓で撒かれた水を再び掬い取つて杓に戻すことは出来ない」という意味であり、即ち「一度起きてしまった物事は元に戻せない」という事柄を意味しているのです。

この慣用句、確かに意味そのものは的確でしそう。先人の残したものは、何者にも代え難い価値を持つのが世の常です。

しかしながら私は一年前、我が校を卒業後列甲へ進んだとある男子学生の書いた本にあつた一説を見て、驚き呆れると共に感心してしまったのです。

彼は本にこう書いていました。

『極端な思考に押し負けて諦めるな。

打ち水が杓に帰らないと割り切るな。打ち水だつて無重力空間でなら杓に戻るし、そんな事をしなくても撒いた部分から上がる水蒸気を集めれば理論上は杓に戻せる。

鳥からは鳥しか生まれないと割り切るな。遺伝子操作の技術を駆使すれば、鳥に鼠や蛇を産ませることだって出来る。

無い刃は届かないと割り切るな。無い刃は量子力学の分野で見れば「届かない」という確率が高いだけだ。

諦めようとすると、慣用句に対してもそこまで捻くれたものの見方をして、揚げ足を取るのが科学という学問なんだ』

本分は長いので要約しましたが、大体こんな事を書いていたように思います。

中々凄いことを書くでしょう？でも確かに、彼の書いたことも間違いないではないんです。

つまり世の中には必ず、何らかの形での例外が存在する。

でも世の中に存在する例外は、必ずしも良いものばかりだとも限らないんです。

サービス業者の中には、言葉巧みに顧客から多額の報酬を持ち逃げるような、道を踏み外した者も存在します。

私は最初、心の何処かで、ツジラさんもそんな「道を踏み外した者」だと思つてしまっていました。

だから、彼に強力を仰ぐ事に反対した中には「騙されるかもしれない」と主張した方も居ました。

でも実際の所、彼からの返事を見た私は、彼がそれほど卑劣な人物ではないと、そんな風に思つたのでした。

前回より

そして私は今日、彼 ツジラさんに呼び出され、東ゾイロスが誇る人気ファミリーレストラン『NYAN BEY』で待ち合わせ中なのです。

注文は今のところドリンクバーのみ。長い人生で久々にコーラの味を再認識しましたが、まさかこれほどに美味しいものとは……。

そろそろ何か食べる物を頼もうかと思っていた時、ふと私の目の前に大きな赤い虫が現れました。

外殻種（禽獸種や羽毛種、有鱗種の節足動物版と思つて下さい）の方でしょうか？

禽獸種等の方々と違い、外殻種の中にはヒューマノイド型を乖離し

た形態の方が居られます。面白いですよね。

外殻種の方（と、思つておきます）は私の向かい側の椅子に降り立つと、私に向き直つて言いました。

「失礼、私立東ゾイロス高等学校理事長の……」

「緒方三ツ葉ですが」

「良かつた……。お初にお目に掛かります。私、かの方からの使いとして参りました。

三型茂虫系外殻種のクリムゾンと申します」

「かの方……？」

「貴女がお便りを出した、あの方で御座います。一応、我等の会話は部外者に対しても普通の世間話となるよう魔術を施しましたが、それでも用心に超したことは無いでしょ」

「確かにそうですね。それで、彼は何故私を呼び出したのです？」

「はい。実はですね、かの方は生放送のため、現場に収録スタジオを設けなければならないのですが……」

「それは承知ですが、何か問題でも？」

「ええ。前回は事前に現場の建造物に関する情報を得ることが出来たのですが、それは相手が王家の侍従であつたからこそです。ジユルノブル城は半ば観光地であり、ノモシアの庶民は元々表裏が無く寛容でありますからな……しかしながら、ラビーレマともなればそもそも行きますまい？」

失礼ながら『追い詰められたラビーレマの民は己の為ならば権利も誇りもあつたりとかなぐり捨てる』と聞いております」

クリムゾン氏の言及したラビーレマの民族性は的確の一言でした。

「いえいえ、全く持つてその通りですか？」「心配なさうす」

「左様で……そして更にまたこうも聞きました。

『ラビーレマの民は趣味趣向に於いて共通する者や、自らに友好的

である者は決して裏切らず生涯全力を以て愛し続ける。

その反面、自らを阻害する者や、敵対的であつたり、悪意を以て接しようとする者は徹底的に忌み嫌う。

しかし原則として無用な争いを望まず、それ故に進んで争いを仕掛けたり、破滅させようとする事は極力しない』と

「確かにその通りですね。現にラビーレマで起こったたいじめ行為の加害者は総じて、性格面に於いては他大陸出身者に近いことが明らかにされていますし」

「そうでしょう？ ですからして、かの方は収録場所の下見に自ら現地に赴くことを躊躇つておられます。

お便りによれば、かの方への協力要請を出すという案が出た時、贊成派と反対派による対立が起こつたというではありませんか

「全く持つて仰有るとおりです」

「『ともなれば、現地へ赴いての情報収集や下見は徒労』

かの方の出した結論に御座います。

何より今回の敵は校内に潜伏している。つまりあなた方を監視しているとも、考えられるわけです

「……！」

思わず言葉を失いましたが、気を取り直して精一杯言葉を紡ぎます。

「お恥ずかしながら、盲点でした」

「いえいえ、恥すべき事ではありません」

「それで、私に何をせよと？」

「单刀直入に言いますと、今からお渡しするデータに従い、我々に校内の見取り図と各所の特徴に関するデータを提供して頂きたいのです。

無論、提供して頂いたデータは公表せず、回収次第此方で破棄します」

「こうなつたら決意を固めるしか在りません。

私は彼の言葉に従い、ツジラさんにデータを提供する事を決意しました。

第一十六話 謙虚理事長と隠る葉虫（後書き）

繁の部下であるといつ外殻種・クリムゾン。
次回、彼の驚くべき（？）正体が明らかに！

第一十七話 虫も魔術も使ひよつ（前書き）

前回、繁からの使者として緒方理事長との交渉を行つた口達者な外殻種・クリムゾン。
しかし、その正体は・・・?

第一一十七話 虫も魔術も使ひよつ

前回より

「よくやったぞクリムゾン……お前は優秀だ」

ラビーレマ近所にあるビジネスホテルの一室にて、繁は一抱えほどもある巨大な赤い甲虫 クリムゾンと名付けた雄にそう語りかける。机の上には香織の私物である小型ノートパソコンが展開されており、画面には東ゾイロス高等学校の詳細な見取り図が映し出されている。ちなみにこのクリムゾンと名付けられた何とも巨大な甲虫は正式名称を「チイロハムシ」とい、体内に脊椎を発達させるという独自の進化によって昆虫種の域を超えた巨大化を実現させた「脊椎節足動物亜門」に属する生物の一つである。

「しかしクリムゾン以上に優秀なのは、やっぱりお前だよなあ……香織」

「そりか？ 繁が捕まえてきたその虫居でこそだと思うんだけど」「謙遜するな。お前の覚えた古式特級魔術二つ……動物を操る『ジユルネ・バルバトス』と生物の記憶を複製・榨取して記録する『ソワール・シャックス』が無ければ、今回の作戦は成り立たなかつた。あと一般系の会話偽装魔術もな」

「確かにそうだけどさ、クリムゾンの操作は繁がやつたんでしょう？」「まーな。だが今になつて考へるとアレも中々グダグダだったよつな気がしてきた……」

「何にせよ、これで動き方には困らないね。タセックモスの刻印は弾頭の出入り口としても使えるし、この分だと一階の廊下とか良いかも」

「うし、んじや早速台本を作るぞ。リクエスト以外にも色々な投稿

が寄せられてるからな。

音楽のリクエストも来てるから音源を確保せにゃならご

いつしてツジラジ第一回に向けた会議が開始された。

同時刻・外部

「予想的中……ツジラ一味が我々を狩りに来る事は確定的だつたようですね……」

ホテルの屋根の上から特殊な器具を突き立て、内部の音声を聞き取つていたのは、あの黒スーツの女であった。

「しかしノイズが酷い……やはりあの青色薬剤師、低級でこそありますが盗聴防止用魔術を施していますね……」

ホームセンターで買つてきた材料で作つた総額一千円の盗聴器ではやはり限界がありましたか……」

ともあれ、彼らが校舎内にスタジオを設置する事は判りました。これでMr.クエイン、Ms.アスリンを守る手立てはある程度確保出来るでしょう……。

これでこの小樽兄妹を臣下と認めてくれた彼らに、漸く本格的な恩返しが出来るところのようです……。

ねえ、兄様。そうでしょう?」

等と女 小樽が左肩へ語りかけると、スーツの布地をすり抜けるようにして若い男の頭が現れた。

顔つきや瞳の色は小樽と似ており、頭髪も小樽と同じ緑色をしていた。

「ええ、そうですよ桃李……我々は遂に、本当の意味で恩を返すこ

とが出来るのです……」

男の頭はそう言い残すと、ゆうくくりと小樽の体内へ引っ込んだ。

その日の晩・ある一室

「即ち……遅くとも本日より一週間以内に、我々の元ヘッジラ一味が攻めてくるでしょう」

外部で捕獲してきた祭品 クエインやアスリンが『戯事』と呼ぶ一方的な性行為に際しこの相手となる15歳以上の男女 の辺の傍らに跪いた小樽桃李は、主であるクエインに事を報告した。

「そうですか……聞けばツジラ一味の一人・青色薬剤師は古式特級魔術を用いる手練れと聞きます。

並大抵の者は許可しない限り発見すら不可能なこの空間魔術……しかし古式特級魔術の使い手ともなれば容易に破るでしょう。

そうなれば戯事や祭品についての情報は漏洩し、我々は公に知られ、クブス派の栄光どころか存在そのものが危うくなりかねない……」

「無論、そんな事はさせません。Mr・クエインやMs・アスリンは私共が御守り致します」

「何を言うのです、小樽さん。貴女一人だけを戦わせるなんて出来ませんよ。

この戦い、私には参加する義務がある。何か異論はありますか?」

「いえ、全くありません。Mrのご協力あらば、ツジラ一味相手撃退程度どつという事は無いでしょう」

「そうです。我々が力を合わせれば、幾らツジラ一味とて一溜まりもありません。

さて、それでどのように 「待つて、クエイン」

クエインの言葉は唐突に、背後へ現れた禽獣種の女によつて遮られ

た。

「おや、ラクラ？…どうしたのです？」

今日はやけに起きるのが早いですねえ」

「変な気がしたから、早く起きたの」

「そうですか…変な気が…」。

（流石はラクラ。禽獣種の勘は侮れませんねエ。）

しかし、大丈夫ですよ。心配なんて無用です。

今小樽さんと話していた案件なんて、大したことでは無いのですか

「う

こいつして適当にまぐらかしておけば、何時も通りなら彼女は折れて
くれる。

そう考えていたクエインだったが、

「嘘

「はつ？」

現実はそう都合良く進まなかつた。

「大したこと無いなんて、嘘。ラクラ判る。

クエインもトーリも、もしかしたら死んじゃうかも知れない。そう
でしょ？」

「……まあ、そうですね。万に一つの確率で、我々は死ぬかも知れ
ません」

「ただ、確率は確率ですから、無論生き残る可能性だつてあります。
仮に私が死ぬことになつたとしても、貴女達は何が何でも守り抜き
ます」

「最悪の場合にはラクラ、貴女だけでも逃げ延びなさい。

貴女さえ生き残る事が出来たなら、クブス派にはまだ栄光を掴む権利が

「やだ」

クエインの言葉は、ラクラによつて悉く遮られる。

「な、何を言い出すのですかラクラ！」

クブス派の女性がどれだけ崇高な存在か、貴女にはその自覚がはつきりと在るはずですよ！？」

「それでもやだ。ラクラ、ひとりぼっちきらい。

クエインもトーリも居ないのに、クブスを取り戻したつて、なんにもたのしくなんかない」

「しかしですね…」

「おわりはみんないつしょ。みんななきや、だめだから。だから、ラクラも戦う。みんなでツジラ一味を倒して、クブスを取り戻したい」

「そうですか……Msがそう仰有るのでしたら私は別に構いませんが、Mはどう思われますか？」

話を振られたクエインは、少々考え込み答えを出す。

「……仕方ありませんね。こうなれば三人でツジラ一味を迎え撃つとしましょうか」

第一十七話 虫も魔術も使いよつ（後書き）

次回、本格的に戦闘開始か！？

第一一十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達（前書き）

戦闘開始の前にちょっと一休み。小樽兄妹の過去話をどうぞ

第一十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達

今でこそ六大陸で最も住み心地がよいとされるラビーレマですが、一昔前は他の大陸と相違ない程に荒れた大陸でもありました。

というのは、原初より学術が主流であるラビーレマも昔は権威主義の名の下に、多数派や親の代から力を持った人々が優遇される傾向にあつたからです。

その上今と違つて排他的な思想で唯我独尊を地で行くような政治体制だつたため他の大陸とも仲が悪く、特に魔術至上主義で代々指導者の気が荒い傾向にあつたノモシアとの関係は最悪の一言でした。

そしてそんな時代柄の中、その二人は生まれてしまったのです。

権威主義が主流であつた当時のラビーレマに住まう科学者にしては珍しく温厚な性格だつた小樽夫妻はある時、双子を身ごもりました。しかもその双子というのは珍しいことに、一卵性にして男女の兄弟だつたのです。

通常、何から今まで同じである一卵性双生児は同じ性別で産まれてくるのが常であり、理論上その性別が異なると言うことは有り得ない筈なのですが、希にある例外に引っかかつたようでした。

ただ、双子には少々問題がありました。

というのも、双子というのは母体内で背中合わせに育つており、二人の左腕と右脚とは歪に結合していたのです。

これは現実に結合双生児とかシャム双生児とか呼ばれている双生児の事で、決してフィクションに限つた出来事などではなく、発生率は5万分の一から20万分の一程と言われます。

生後の生存率は低く日常生活も困難ですが、夫妻は男児に羽辰、女に桃李と名付け、出産を待ちました。

特に妻の決意は凄まじく、夫は病弱な妻を労り中絶も考えましたが、妻の覚悟を知つてからはそんな事など考えなくなっていました。

そして時は巡り、待ち望まれた出産の時。

帝王切開で産まれた双子の羽辰と桃李。駄目もとの上最悪死を覚悟した末の出産でしたが、子供は産まれ妻も無事生存。
誰もが喜びに沸き立ち、小樽家を祝福する 筈でした。

しかし現実とは、全く予期していないときに酷いことをしたりします。

そのまま元気に産声を上げるかと思われた桃李と羽辰でしたが、桃李が産声を上げた途端、突然羽辰の身体が灰になり、桃李の左腕と右脚は最初から存在しなかつたが如くに消滅してしまいました。その場の誰もが悲鳴を上げ取り乱す中、立て続けに一人を産んだ妻までもが徐々に弱り始め、入院中に息を引き取つてしましました。この件については今も学会で論争が続いているようですが、誰もが納得できる説は未だ出ていません。

生き残った夫は妻と息子の死を乗り越え、一人になつたとしても必ず娘を育ててみせると決意しました。

しかしそんな夫もまた、不慮の交通事故により死んでしまいました。独りぼっちになった桃李は父親の姉である富豪の末亡人に引き取られました。

桃李には最新鋭の義手と義足、そして出身地でも選りすぐりの教育機関でトップクラスの教育を受けられる権利が与えられました。

桃李はそこで多くのことを学ぶ内、科学へ興味を持つようになつていました。

桃李が特に生物学や化学に興味を持つている事をしつた周囲の人々は、彼女をその当時ラビーレマで最も研究が盛んだった遺伝学や薬学の道へ進む事に期待していました。

しかしその頃の桃李は既に、遺伝学や薬学などよりもっと好きな分野を定めていました。

それは「毒」の研究でした。

特に生き物が持つ毒に興味を持った桃李は、色々な動物や植物、更には細菌の持つ毒など、色々な毒の研究に興味を持ちました。

勿論桃李は生き物に由来しない毒にも興味を示し、色々な毒の研究についての学術書や論文を読んだりしました。

家族同然の伯母や従兄弟達、親しくしていた学校の先生はこれを評価してくれましたが、身の回りの人すべてがそうとは限りません。現に同級生の殆どは、桃李を嫌っていました。

何故なら、血統書つきのトイ・プードルよりヤドクガエルを可愛いと言つからです。

何故なら、大陸を超えた人気のアイドルグループよりクサリヘビを美しいと言うからです。

何故なら、人気の男優よりも大きなサソリの方が格好いいと言つからです。

そして桃李を嫌う同級生達は、同時に彼女を恐れても居ました。

その理由は主に彼女の左腕と右脚にありました。

合金と樹脂で作られた最新鋭の義肢である彼女のそれは、謎めいた技術により桃李の成長に伴つてサイズを変え、先端に鉤や吸盤のつ

いたワイヤーを射出したり、一瞬で文房具や調理器具に姿を変えたりするからです。

またそういう同級生の実家は、遺伝学や医学などその頃のラビーレマで普通とされていた分野を専攻する人ばかりでした。

産まれながらにエリートとして育てられていた同級生達は、自分よりも優れた才能を持つ桃李に嫉妬し、同時に自分達と相容れない存在である桃李を忌み嫌つてもいたのです。

しかしそういった同級生達は、年月を経る毎に様々な理由で桃李の周囲から消えていきました。

そして大学生になつた桃李は、差別を受けるでもなく平和な日々を送っていました。

優しかつた伯母は「くなり、従姉妹達とも音信不通でしたが、桃李は平穀な日常に満足していました。

しかし桃李は大学生活を送る中で、再び知つてしまします。

世の中といつのは、『普通』が正義であり『異質』は悪なのだ と。

毒について研究したいと思う自分の考えは、所詮差別され爪弾きにされてしまうようなものなのだと、覚つてしまつたのです。そしてまた桃李には、別の危機も迫つていました。

亡くなつた伯母の遺産を狙う親戚から、相次いで執拗な攻撃を受けるようになつていたのです。

連日自宅の郵便受けには剃刀の刃を入れた封筒が届き、町中で在らぬ言い掛けりで大勢から追い回され、時には実験中に燃え盛る油が迫つてきたり、フィールドワークの最中野生の四足竜が襲い掛かつ

てきました。

そして親戚からの攻撃が過激になつた頃、桃李の夢に奇妙な男が現されました。

その人は細くて背が高く、瞳や髪の色は桃李そっくりでした。

男は言いました。

「やつと会えましたね、桃李」

しかし桃李は男の事なんて一切知らなかつたので、一体何者か聞きました。

すると男は驚くべき事に、桃李が産まれた時に死んでしまつた兄羽辰を名乗つたのです。

何でも羽辰が死んだのは、肉体を消滅させて幽靈のような存在として桃李の体内に潜み、内側から彼女を支え続ける為だつたというのです。

最初は混乱していた桃李も、考えの末に兄を受け入れる覚悟を決めました。

それからというもの、羽辰は妹の危機に乗じて体内から部分的に姿を現し、靈体と生命の中間的存在として桃李を助け続けました。そして三年生になった今年の春 ツジラジ第一回より少し前、権威主義に嫌気の差した桃李は死を装つて大学から姿を消し、偶然出会つたホリエサ・クエインに見初められ、彼の臣下として東ゾイロス高等学校での活動を開始します。

人から精氣を吸つてその力を高める力を代々受け継ぐ他種族派閥・クブス派最後の生き残りである一人に桃李が協力する理由は不明です。

しかしながら彼女の動向の根底には、政権交代によつて成し得た民

主主義的自由社会の中には、まだ一部で猛威を振るう権威主義に対する敵愾心があることだけは、確かなのです。

第一十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達（後書き）

ハづらはるつて辛いけど、でもアイデンティティを捨てるのはもつと辛いよね。

第一十九話 私立校列王記 - A b e r r a t i o n I n T h e S c h o

ツジラジ、放送開始！

第一十九話 私立校列王記 -A b e r r a t i o n In The School-

前々回より・午前10時程

『セエーのツツ』

『『ツジラジツ!』』

繁と香織の元気な声が、六大陸の主要な国家全域に流れ込む。

それと同時に、第一回とは違つた音楽が流れ出す。

鋸色の空 苦境に悶え
やがて人は 欲に目覚め
私利私欲 夢 快楽の為
満足だけ目指し 動き出す

『はい、そんなこんなで始まつてしまいましたツジラジ第一回つ!
相変わらずの電波ジャックですが張り切つていきましょう。司会の
青色薬剤師です』

『予想外のお便りの数に圧倒されつつピザースト片手に徹夜で作
業してたら口内炎になりました。

司会のツジラ・バグティールです。

ん……で、この番組の概要は……もう説明しなくても良いか。

企画が生中継になつたくらいだし』

『いや説明しようよ。パーソナリティだよ?』

『つうかそもそもこの番組、明確な概要なんてモンがそもそも無い
じゃん』

『それはそうだけど……そういうえば今流れてるこの曲は何?』

『よくぞ聞いてくれた。コイツは現在全大陸でTVアニメ版が好評

放送中の「増殖探偵丸斗恵」のOVA版最新作「悪鬼編」オープニング主題歌「Arrival To Ruin」だ

『「悪鬼編」と言えば、原作の中でも五本の指に入るくらいの人気ストーリーだよね？』

「中世編」に隠された謎が次々と明らかになつたり、「戦国編」の人気キャラクターが再登場したり……』

『そうだ。続く「混沌編」への伏線も多く、アニメ未登場の人気キャラクター・ダイノヒウスも登場する。原作・アニメファン共々注目しておいて損はないぞ！』

ちなみに原作小説は全40巻で一冊510円、アニメ版DVDも続々リリース中。

DVD最新七巻の予約限定版には原作者と制作スタッフ・キャスト達との対談を収録したブックレットが付属するぜ！』

『凄く豪華！』

『だろ？まさしく全ての増殖探偵ファンに贈る仕様と言つて差し支えねえぜ！』

さて、フリートークも程々に続いて番組に届いたお便りの方、紹介していくたいと思います！』

『はい、どんどん参りましょう』

等と楽しげに進んでいくラジオだったが、一方各大陸では別方向での騒ぎが巻き起こっていた。

というのも、「指名手配犯なんだから今更どうと言つことはない」という無茶苦茶な理由の為に、繁はアニメの歌や情報を当然無許可で流していた。

この事が災いし、出版社やアニメ制作会社、音楽会社など「増殖探偵」に関する各企業は総じてマスクゴミ共からツジラ・バグティルとの関係に関して暴動同然の質問攻めに逢っていた。

作者であるアクサノ出身の地竜種（禽獣種・羽毛種・有鱗種等の恐

竜版と言える種族）・NISECO氏も同じような状況であり、自宅に押しかけてきた近隣住民を家族ぐるみで巻いた上で、続いてネット上での騒動鎮圧に向かっていた。

しかし一方で、ツジラジで名が知れた事もあって、各通販サイトでは主題歌CDや映像作品のソフト、原作本を中心に『増殖探偵』の関連商品が急に売れ出した。

社会現象と呼ぶほどでは無かつたにせよ、翌日から六大陸各地の書店では『増殖探偵』を初めとするNISECO作品の特設コーナーが作られるに至った。

『では先ず最初に、ラビーレマにお住まいのラジオネーム・兎田ピョンさん。11歳の方から』

『11歳？若いねえ！』

『広い年齢層に受け入れられる番組という事だらうよ。さて、「ツジラさん、青色薬剤師さん初めまして。』』

『『はい、初めまして』』

『「先日献立表に『発作』と書いてあつたので一体何事かと思つていたら、ヤムタ産の果物・ハツサクでした。こういつ場合、どう突つ込めば良いでしょうか?」という事なんですが』

『それはアレだね。あの人だよホラ、声優の近野香奈恵さん。あの人ラジオ番組で「猛る者」と書いて「モサ」って読むのを「モウジヤ」って読んだりするような、アレに近いよね』

『何か近しいものを感じるな。』

と言つて兎田ピョンさん、そついつた場合には無理に突つ込まず、運命に身を任せると良いと思います。

さてさて、続いてのお便り

番組はスラスラと進行していき、五通の頼りを詠み上げた所で、遂

に企画の「コーナー」に入る。

『ハイ！そういう訳で御座いまして。お便り紹介も程々に、遅ればせながら本日のゲストの方ご紹介して行きましょう…』

『第一回に続き、この方が来て下さいましたー元医学博士の二コラ・フォックスさんです！』

『はいどうも皆さん今日は。ぶっちゃけ無職の二コラ・フォックスです』

『いやあ、よく来てくれたな二コラよ』

『いやいや、呼んでくれて有り難うと言わせてよ。あと折角呼んでくれたのに遅れてご免』

『気にしないで。そりや昨日あんなに遅くまで騒いだんだもん。遅れたって仕方ないよ』

その後ツジラは、昨日青色薬剤師と一緒に二三人で集まり宴会を開いた事を明かした。

無論これは捏造であり、繁自身の無意味な遊び心によるものであった。

『さて、メンバーも揃つた所で今回のメイン企画行つてみましょ。青色、今回の収録場所を説明してくれるか？』

『はいはーい。今回の収録場所は、ラビーレマ首都圏東部にある、とある私立高等学校です。

今回私達は、ラジオネーム「生まれたての」さんからのお便り「校内に潜む謎の殺人犯を捕まえて欲しい」との依頼を受けました』
『被害者は主に生徒の皆さんで、総じて全裸に剥かれ干涸らびていたとの事。

この事から番組では犯人を靈長種・神性種以外として推定。対応する作戦の立案に努めました』

『無論、ゲストの二コラさん込みで』

『そして私達三人が考えた企画タイトルはーツ！』

ツバーン！

『『『「ラビーレマ死闘編」学校でラジオ番組と殺人鬼が死闘過ぎる～ツ！」』』

そのタイトルと共に動き始めた三人。

そしてそれと時を同じくして、学校に身を潜めていた三人も動き出す。

第一十九話 私立校列王記 - A b e r r a t i o n I n T h e S c h o

『増殖探偵』シリーズが気になる方は pixiv にて、我が親愛なる同志・腹筋崩壊参謀氏の名をユーザー検索にかけてみましょう。

第三十話 兄と私は共生中（前書き）

戦闘開始！繁VS桃李！

第三十話 兄と私は共生中

前々回より・校内

ふとした事から遭遇した繁と桃李の交戦は、お互い一步も譲らぬ併に長引いていた。

「熱流！」

桃李の手元から放たれる炎は流水のように床面を這い回り、繁を追尾する。

「へアツ！」

それを繁は奇怪なステップで回避し、そのまま飛び掛かつて鉤爪で斬り掛かる。

しかしその攻撃は桃李の右腕によつて防がれてしまった。

「ツー？」

まるで堅い口ウソクを斬つているような感覚に陥る繁。

まさかこいつの腕が口ウナ訳は無かるうと思ひながら鉤爪を引き抜こうとするが、中途半端に柔らかい為刃が食い込んでしまい、脱する事が出来ない。

繁が一瞬手間取つた隙を突き、桃李の腹から羽辰の左脚が飛び出して、繁の腹に突くような蹴りを入れる。

繁はどうにか桃李の右腕から刃を抜き取り、彼女の身体を踏み台にして後方へ跳ぶ事で衝撃を緩和しようとする。

しかしその作戦は思うように行かず、結果的に繁はかなり遠くへ吹き飛ばされてしまった。

「グガツ！？」

バトルものの漫画にあるような『壁に激突して亀裂が入る』程の威力では無かったにせよ、繁にとってはその蹴りは若干の深手となつた。

「（何だつたんだ昨期の蹴りは……？

あの位置から出るなんて有り得ねえし、かと言つて見間違いとも思えねえ……。

だがそうだとして、さつきのは何だ？物理法則を無視してた時点で学術ではねえだろうが……まさかESPの類じやねえだろうな？臭いから判る……『イツはジユルノブルのバカ共やあの軍人達とは桁違いだ。別格だ。

つか、どうにも気分が妙だな）ツ！』

ガギイン！

考え込む繁の正面へ、炎を纏つた桃李の拳が飛び込んできた。

「うおっ！？」

繁は咄嗟にそれを両の鉤爪でどうにか弾くが、火の粉に一瞬視界を奪われる。

その隙を突くように桃李の身体から再び羽辰の左脚が飛び出し、今度は繁へ踵落としを放つ。

しかし繁はその攻撃を直前で回避し、その勢いに任せて爪で羽辰の右脚を切り落とした。

「つっ！」

切り落とされた足首から先はゲーム画面に映った死骸のように消滅し、残りの部分も桃李の体内へ戻つていく。

桃李の左脚には鋭利な刃物で切断されたような激痛が走り、激痛の余りバランスを崩した彼女は着地に失敗。

対する繁は瞬時に体勢を立て直し、桃李の肩へ爪先を引っかけて掬い上げて宙へ浮かせ、そこへ両腕を上下から振りかぶつて叩き込むとする。

しかしその攻撃は、桃李の身体から飛び出た羽辰の両腕によつて止

められてしまつ。

それを好機と見た桃李は繁の股座を蹴り上げようとするが、咄嗟に繁が羽辰の両腕へ溶解液を放つた事で状況は一転。

羽辰は両腕を引っ込め、激痛に耐えかねた桃李は思わず絶叫し廊下を転げ回る。

暫く転げ回った後、落ち着きを取り戻した桃李は繁に向ひつ。

「貴方のその力……魔術や学術によるものではありませんね？」

「まあそうだな……だが、そりやこいつちの台詞だ。

アンタの身体からチヨイチヨイ生えるそのまま足、それこそ並のブツじゃねえんだろ？」

「ええ、その通りですよ。しかし素晴らしい。

貴方が初めてですよ。私と兄の連携に対してもこれまで対応してきたのは」

「……兄だと？」

「ええ……兄ですよ」

桃李の言葉と共に、桃李の背中から緑髪で長身瘦躯の男がぬつと現れた。

「初めまして、私小樽桃李の兄で羽辰と申します」

「驚いたねえ……妹の肉体に寄生とは、どんな兄貴だ？」

「産まれて間もなく死ぬ事を覚つた私は、自ら靈体と生物の中間的存在へと形を変え、妹を影から支えようと彼女の体内へと潜んだのです」

「それで定期的に姿を現しては妹を助けていると。確かに兄妹なら、感覚器官共有でも納得が行く。

ましてやその面構え、信じられねえがアンタ等……双子だろ？」

「その通りで御座います」

「性別の異なる双子か。架空の事象だと思つてたが、よもや拝見で

きる口が来ようとはな

「お褒めに預かり光栄です」

「さして褒めたつもりも無えがな……」

そう言つて繁は両腕の鉤爪を再度展開し、小樽兄妹へと突進しようとした。

しかし

「 ッ！？何だ！？脚が、上がらねえッ！」

見れば、繁の長靴は靴底の辺りから正体不明の白い個体で塗り固められていた。

しかも足裏が妙に冷えている。

「何だコレあ？接着剤の類じいや無せそつだが……」

「お手数ながら、暫くそこでじつとしていて下さいませんか。

他のお二人がどのような方が存じ上げませんが、貴方は余りにも厄介すぎやる。

やはり同胞ともなると、先天的な格の違いという奴を思い知らされますよ

「同胞……やつぱりアンタ、ヴァーミンの 」

繁が話し掛けようとした時、桃李は既に姿を消していた。

「なんちゅー逃げ足だ……ビツちが格上だ、ド畜生めが。

それにもしても……」の白い奴は口ウカ油だらつな。
それなら足裏が冷えんのも納得が行く……。

それに、確かにこの強度なら、口ウカが溶けきるまで並大抵の奴は動けんぢやつ。

だが

繁の手先から緑色の水滴が滴り落ちていく。
水滴は長靴の表面を伝つて下へ下へと流れていき、冷え固まつた口
ウ状の物体だけを的確に溶かしていく。

「小樽桃李はしぐじつ。何故なら奴は、俺を並大抵の奴だと思い
込んだからだ」

自身の能力により生成される溶解液を用いて白いロウ状の物体だけ
を溶かした繁は、桃李を追つて再び歩き出す。

「待つてろ主犯共。ヘッパリムシなりの戦い方つて奴を見せてやら
ア」

第三十話 兄と私は共生中（後書き）

桃李はヴァーミンの有資格者だった！果たして彼女のヴァーミンとは！？

第三十一話 爆乳白兎娘（前書き）

お気に入り登録数30件突破を祝つて（？）景気付けに（？）二回
ラバクラクラ！

第三十一話 爆乳白兎娘

前回より・校内

桃李と繁が激戦を繰り広げる一方で、ニコラもまたクエインの部下である兎系禽獣種のラクラ・アスリンと戦闘を繰り広げて 居なかつた。

「待て！待て！待てえっ！きつね、逃げるなあっ！」

「今日田『待て逃げるな』は『逃げる待つな』のフリなんだよねえツ！」

そんな事も判らないとか、アンタ駄目ねえウサギちゃん！

巨乳・体操着・ブルマの三拍子揃つてまあ、口でさえ薄い本向けのナリだつてのに、教養も無いと来ちゃあ取るに足らないキモオタに掘られんのが関の山よ？」

長い廊下を逃げる^{ニコラ}狐とそれを追う^{ラクラ}兎。

動物種だけ見れば異様な光景であろうそれも、この一人ならばその違和感も消え失せる。

本来形態からも動物寄りのラクラは持久力・脚力共にニコラより優れている筈だったが、そんなラクラからニコラは華麗に逃げ続ける。

「うるさい！黙れ！黙れ黙れ黙れ！工口は正義！工口には何も敵わない！工口は絶対！」

「だああからさあ、それが駄目だつてのよ。何で判らないかなあ？工口はあくまで調味料。主軸になる食材じゃないんだつて……いや、主軸になるところだつてあるにはあるけどさあ」

ニコラは立ち止まり、言つ。

「アンタが今居る世界は、只のH口軸如きじや廻らないんだよねえ」

その言葉に腹を立てたラクラが一步前に踏み出した瞬間。彼女の足下に、奇妙な紋章が浮かび上がった。

「…？」

それは山吹色に光り輝く円陣で、中には毛羽立つた書体で何やら不可解な記号が書かれていた。

そして次の瞬間、それと同様の紋章が廊下の壁面中に浮かび上がる。ラクラは目映い山吹の光に包まれ思わず目を覆つた。

その三秒後、全ての紋章からラクラに向かって、件の蛾型弾幕が悉く降り注いだ。

「つがああああああああああああああ！」

有り余る激痛に絶叫するラクラに、二コラは軽々しく言い放つ。

「安心して良いよ。それは痛覚神経だけを的確に刺激するものであつて、何発当たつても死にはしないから」

二コラは苦痛の余り地面に倒れ伏すラクラの頭を、嘲るとうに軽く踏み付ける。

「いやあ、我ながら凄いわ。身体にや傷一つついてない……これもヴァーミンの有資格者の成せる技」「ふ、ざ、け、る、なあつ！」

「ぶべつ！」

ラクラは頭上に乗った二コラの足に掴みかかり、痛みに耐えながら身体を捻つて彼女を転倒させた。

続けざまに立ち上がったラクラは、二コラの腰へ跨るとその後頭部を掴んで持ち上げ、凄まじい勢いで床面へ叩き付けた。

「ゴッ！」

しかもその回数は一回や二回などというものではなく、何十回にも渡つた。

仮に二コラが並の禽獸種であつたならば、素早さとパワーを兼ね備えたラクラの打撃技を一発でも受けていれば既に死んでいても可笑しくはない。

しかし彼女は呪詛により不死の肉体を得たが故に、自らを何度も殺すという人体実験を繰り返した事で知られる元開業医の二コラ・フォックス。

この程度の攻撃で倒れる事など、有り得る筈が無いのだ。

しかしそんな事など知る由もないラクラは、床打撃に飽きたのか再生中の二コラを無理矢理立たせ、その顔面へ兎の脚力を生かした回転蹴りを叩き込む。

叩き飛ばされた二コラは木工教室の扉を突き破り、作業台に腹を叩き付けられる。

これを好機と見たラクラは更に執拗な攻撃を続行。

手始めに転がっていた角材を拾い上げると、それが折れるような勢いで背中を殴りつけ、更に長さ1mはあるうかという工業用大型ハンマーで作業台ごと二コラを叩き飛ばす。

更に落ちてきた二コラの右脚を掴み、教室中央の柱へ叩き付けた挙げ句、その腹を大型のドライバーで刺し貫いて壁に打ち付ける。

そしてとどめとばかりに作業台に固定されていた大型の万力を次々に引きちぎり、それを柱へ打ち付けられた二コラへと乱雑に投げつける。

「…………これで……終わつ……た

憎き相手を闇に葬り去つた（と思い込んだ）ラクラは、思わず安堵し壁にもたれ掛かつて座り込む。激しい動きで疲弊しきつていたラクラの身体と意志とは、迷わず睡眠を選び取つた。

しかし当然、彼女がこのままで済まされる筈はないのである。

頭蓋骨を潰され、背骨を叩き折られ、挙げ句ドライバーで串刺しにされて万力を投げつけられた二コラ。

その身体は既に原型を留めぬ程ボロボロであったが、全身の傷は時が経つにつれて徐々に塞がり、碎かれた骨や臓器は再構築され、更に呪詛の弊害によつて衣類や所持品までもが修復されていく。

そして最後に腹からドライバーを排出し、四つ足で床面に降り立つた所で二コラの再生は完了した。

「嘗て今まで、私が出会つて來た中で」

木工室の壁にもたれ掛かつて眠るラクラの前に歩み出た二コラは、言ひづ。

「二コラまで方向性でソリの合わない奴が居ただろうかと、つづく思つわ。

何をじうすればこうポンポンとまあ、淫乱になれるのかねえ。

常に男とやる事念頭に置いて、その為にエネルギーの殆どを注いで……いやあ、わけがわからんわ。

そもそも戦闘中に男子逆レイプとかその時点で意味不明だし、初対面の相手への第一声が『〇〇ハク?』だもんと瞬状況判断すつ飛

ばして飛び蹴りかましかつになつたよ。

「ひしてるとやつぱり思つのがねえ、金とセックスはある意味似てるんだつて。

確かにどつちも必要だけど、最終目的に設定して良いほど大層なもんじやないし、そもそも本質はどつちもあくまで手段だし。あと、知的生物が金とかセックスに溺れちやうにけないよねえやつぱり。

若い内からそんなもんに溺れちゃつたらもつ、ほほアワトの一歩手前だよ」

そう言つて二コハは、並大抵の事では全く起きる氣配のないラクラを殺すでもなく、縄と木材とその他諸々の道具を用いて作り上げた無駄に巧妙な仕掛けに組み込んで、そそくせとその場から立ち去つた。

それから訳四分後、開脚状態で宙吊りにされたラクラの肛門へ角の削られた角材が突き挿さり、濁音の混ざつた彼女の絶叫が校内に響き渡つたのは言つまでもない。

第三十一話 爆乳白兎娘（後書き）

みんな読んでくれて有り難う！

次回は香織とクエインのバトルだよ！ついでにクエインの正体も明らかになるよ！

第二十一話 Sime&Pharmacist (前書き)

更新復帰！（でも以前のように毎日は無理かと思われ）

ひとまず香織VSクエインの魔術対決！

前回より

「いやあ……お強いですね、清水さんは……」

「いえいえ……クエインさん程じやありませんよ……」

講堂で妙に穏やかな雰囲気のまま語らい合う、二人の影。一方は、深紅の長髪を棚引かせる靈長種の女・清水香織。方やもう一方は、本件の首謀者であるホリエサ・クエイン。

「しかし驚きましたよ。まさか事件を引き起こしていたのが、クブス一派出身の流体種の方だったなんて。失礼でしそうけど、流体種はともかくとして、クブス派なんてとうくに滅んでいたかと思つていましたから」

ホリエサ・クエインは、カタル・ティゾルに存在する知的生物の中でも特に風変わりな種族に属している。

流体種と呼ばれるそれは、その名の通り半個体状の肉体を持つ種族であり、一説には刺胞動物に近いとされる体組織の九割は水分で構築されている。

生活形態も多種多様であり、生涯水中で生活を続ける者も居れば、クエインのように陸上で難なく活動できる者や、中には極地や乾燥帯に住まう変わり種も居るというのだから驚きである。

ただ全てに共通しているのは、身体が非常に柔軟であったり、身体の至る所からエネルギーを攝取できるという事。

そして柔軟である反面、一部水棲種を除いては水分蒸発を防止するために薄くもそれなりに強革な外皮が全身を覆い、体内には肉眼での目視が不可能な程に細密な神経系と軟骨の絡まり合った纖維が通

つてゐるため、大がかりな変形は不可能であると言つことだらう。更に外皮・神経系・軟骨等は柔軟に伸び縮みし、損傷しても即座に再構築される。

この為、流体種を物理的な攻撃で殺害する事は殆ど不可能であるとされる。

そんな流体種の本質を担つのは脳を内包する小さな球状の頭蓋骨であり、各種神経と軟骨の行き着く場所である。

普段、感覚器官や发声器官が体外に露出している流体種であるが、有事ともなれば頭蓋骨に備わった臨時の感覚器官や发声器官を用いることもある。

その上時には肉体を捨て、頭蓋骨のみで活動する事もあるところ（但し死の危険性が極めて高い）。

この為、理論上流体種を効率的に殺害するためには頭蓋骨を破壊してしまえばよい。

但しこの頭蓋骨といつのはかなり強固であり、刃物や銃弾、高温や高圧力にも耐え、一時的にだがあらゆる上級魔術の影響を受けないという記録も存在する。

その上頭蓋骨は柔軟に伸び縮みする纖維組織と流体状の体組織について体内を反射的に素早く動き回り、本人の意志とは無関係に危機を回避しようとする為、捕らえたり射抜く事さえも難しい。

現に香織も、先程からクヨインを一撃で仕留めようと機会を伺つてこそ居たわけではあるが、狙いが全く定まらないといつのが現状であつた。

「世間には必ず例外といつものがついて回るものです。

そして例外は時に万人の思惑から外れ、あらゆる常識を破壊する。

例外ありきの世の中だからこそ、私達は生き残ることが出来たのです

「そうです、か。

確かに私も、自分自身はそういった例外の一人であろうと自覚していますから、貴方の言葉には納得せざるを得ないようになります。

それで、事件についてですが……やはり祭品確保が目的ですか？」「ええまあ、そんな所ですがしかし、それなりに惜しいですね」

「と、申されますと？」

「私達の最終目的は、祭品の確保ではない……という事です」

その言葉を耳にした香織は、一瞬身構える。

「まさか……」

「やう、恐らくはそのまさかです。

私達の目的は、クブス一派の再興。

その為には上質な少年の精子と精氣とを、母としての高い資質を持つたクブスの淑女に蓄えなければならないのです」「やはり……という事は、居るのですね。貴方以外の、クブスが

「」名答。精子と精氣の貯蓄量は既に満たされようとしています。故に、ここであなた方三人を始末した上で更なる回収作戦を続ければ、必ずと準備は整う筈だ。

あとは彼女が新たなる眷属を産み出し、あらゆる生物をクブスのもたらす甘美な快楽によつて隸属し続ければ、一年足らずでカタル・ティゾルは我等クブス一派のものになるでしょう……。

そうなれば、あの忌々しい軟体動物の手に掛かり散つていった我等が同士達にも顔向けてできるといつもので

ズドバーン！

クエインの言葉を遮るようにして、講堂の天井が一部巨大な四角錐に変形して彼の居た場所を指し貫いた。

「大した自信ですね、クエインさん……否『腐臭の肉塔王』ホリエサ・クエイン…」

「その名で呼ばないで頂けますか？私としましてはその異名……些か不愉快でしてね」

四角錐から退避していたクエインが、何処からともなく這い出つた。

「最初からそう呼ばばず、あくまで初対面の他人として敬語で接して差し上げただけでも有り難いと思つて頂かなければ此方としても何とも言えませんねえ」

「まあ、割り切るしか無いのでしょうか？」

清水香織とホリエサ・クエイン。

共に高い魔術的才能を持つて産まれ、あらゆる高等魔術を操るに至つた二人の戦いが、再び始まろうとしていた。

とは言つてもこの二人の戦いは、繁と桃季のような「特殊技能に武装や奇策を織り交ぜフル活用する接近戦」ではないし、ニコラとクラのような「ルール無用のぶつかり合い」でもない。

お互い魔術師である二人は己の知恵と術に全てを託し、可能な限り手早く相手を倒そうとする。

即ちそれはある種の「勝負」でもあつたがしかし、彼らは騎士道や武士道のような気高き精神を持ち合わせているわけではない。

よつてこの壮絶な勝負は、一方が投了を宣言したとしても終わる事は無いのである。

終了の基準は原則としてただ一つ、一方或いは両者の死亡のみである。

第二十一話 Slime&Pharmacist (後書き)

次回、クブス一派の実態が明らかに。

第三十二話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします（前書き）

待たせたか！？一週間ぶりの更新！

予告どおり、クブス一派の過去話だぜ！

第三十三話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします

嘗てケーニギ・スプリングフィールドが現代魔術の基礎を築くより遙か昔、カタル・ティゾルに一人の魔女が居た。

小夜子というその靈長種は実に美しい才女であり、あらゆる分野に通じていた。

しかし彼女は、その性分が災いして周囲からは快く思われていなかつた。

というのも、小夜子は産まれながらにして酷く淫乱であつたのだ。

温帯域の海にぽつりと突き出た岩の小島に建つ、古びた館に従者と二人で住まつ彼女は、しばしば島に流れ着く漂流者を助けていた。しかし助けられた者は皆彼女の魔術に心身を侵され、性による快楽に執着する哀れで不毛な存在へと成り下がつてしまつのが常であつた。

はつきりした自我が保たれ正常なように見える者であつても、その内面は必ず性欲で染まつてしまつたし、異常な性癖を植え付けられ人格を歪められてしまつた者も居た。

このような哀れな者の末路といつもの火を見るよりも明らかで、抑止の利かない欲故に見境無き強姦魔に成り下がる者など、総じて悲惨な末路を迎るばかりであつた。

「快樂の権化」を自称する小夜子の魔手は人伝に大陸を超えて伝染し、それは同時に各大陸へ凶悪な感染症を媒介する事にも繋がつた。

この事が災いし、報道機関や政府に該当するものが明確に備わつていなかつた時代にありながら彼女の名は広く知れ渡る事となる。そして感染症による怒りや憎悪に駆られた一握りの者は度々小夜子

の暗殺を試みたが、謎めいた尖耳種の従者・太刀川の持つ凄まじい力はそれを良しとしなかつた。

しかしながらある時、この太刀川を巧みに打ち倒す強者が現れた。男の名は黒沢健一。ノモシア辺境地の地方自治体に所属する中堅管理職である。

管理職とは言えどその戦闘能力は凄まじく、翼を持たない瘦躯の嘴^{ツワモノ}太鴉系羽毛種としての身体能力を生かした槍術と宫廷魔術師に匹敵する強力な魔術を織り交ぜた連携は、民間人らしからぬものであった。

学生時代は頭脳明晰な秀才として名を馳せた黒沢であつたが、太刀川との戦いでは策も何も無い単純明快な戦術で勝利を勝ち取つた。というのも彼は、総重量約1kgにも及ぶ諸装備を身に付けたまま沿岸部から島までの約3kmをクロールで泳いで渡つたのである。更に島へ上陸するや否や、館の周囲で無数の爆竹を鳴らし、様子を伺いに外へ飛び出てきた太刀川に恋文らしきもの（とは言つても内容は『五年前に貸した花澤 奈の写真集さつさと売つてこい。今プロミアがついて大変な事になつてるから』という支離滅裂かつ意味不明なもの）を渡した上で決闘を申し込んだのであつた。

結果として勝利を収めた黒沢の武勇伝はこの後、彼の部下であり格闘術の達人でもある手長猿系禽獸種・大喜多大志によつて仲間内に広められ、以降一部で伝説として語り継がれたといふ。

（彼の仲間達はこの話を聞いて、最初大喜多の法螺とも思つたらしい。しかしながら同時に仲間達は、黒沢の臣下を自称し、彼の為ならば死も辞さない性格の大喜多に限つてそんな事を言うはずも無いと考え、話を信じることにした模様）

（また、大喜多の話を聞いた仲間達は、黒沢の彼らしからぬ戦いぶりを知つて、仲間内のリーダー格である自称・禽獸種の男を思い浮かべたといふ）

(ちなみにその男、恋人らしい立場の蜘蛛系外殻種共々今も尚好評
行方不明中である)

一方、臣下太刀川を殺された小夜子はと、タッチの差で転移術を用いて黒沢の攻撃を館」と回避

し、予め予定していた通り亜寒帯の辺境地に逃げ延びていた。

逃げ延びた先で小夜子は、魔術によつて彼女の下僕となつた者達に新たな術を施した。

下僕達は術の効果により、高い身体能力と魔術的才能、そして快樂を捨てなければ決して老いることのない肉体を得るに至つた。また彼らは欲を相手に気取られぬよう覆い隠す術を学び、鍛錬の末性行為によつて相手の精氣を吸い取り自らの魔力に変換する『夢魔式四十八手』という魔術と体術を併合した技法を習得した。

更に下僕達は同類と愛し合い繁殖を繰り返すようになつていった。

下僕達の能力は世代交代の度に高まつていき、その類い希なる力を見た小夜子はこれを『クブス一派』と命名し、活動を開始する。

世界を犯し、自らの『血』を繋ぐ『種』を地に満ち溢れさせるという目的のために。

更に、クブス一派の力を以て『耐える事なき快楽に包まれた世界の中枢に立つ事』を夢見た小夜子は、呪術により自らの子宮を捨て不老不死の肉体を手に入れる。

その後、クブス一派は各大陸で影ながらに猛威を振るい続け、力を増す毎にその名もまた広まつていつた。

そんなクブス一派の前にある時、総勢18名の風変わりな集団が現れた。

その集団というのは禽獸種や羽毛種等複数の種族によつて構成され

る集団であり、『ラビーレマの飯屋』がきっかけで集つた鳥合の衆と名乗つた。

最初小夜子はこの『鳥合の衆』を、さして気にも留めていなかつた。自ら鳥合の衆と名乗る程卑屈なのだから、きっと己に自身のない弱者なのだらうと高を括つていたのである。

しかし、小夜子はその翌日『鳥合の衆』の信じがたい力を目の当たりにする。

ノモシア東部に潜伏中だつたクブス一派の者が皆、僅か半日の間に全滅したのである。

更に混乱する間もなく、小夜子の元へ次なる報せが舞い込んできた。その知らせによれば、ノモシア西部と北部に潜伏中だつたクブス一派の一部が突如謎の光線によって変死したかと思うと、突如ゾンビのような姿となつて残りの者を襲い始め、現地の部隊は瞬く間に全滅してしまつたといふ。

この他、「突然壁に引きずり込まれた」「突如何かに怯えだし、わけもわからぬままに死んでしまつた」「転がる度に肥大化する球体に押し潰されてしまつた」等の報告が相次ぎ、六大陸に潜伏中だつたクブス一派の関係者は悉く殺されていった。

小夜子は高を括つた己自身を悔いたが、既に手遅れであつた。

鳥合の衆を名乗る集団の筆頭である鳥賊軟体種の男はいつの間にか小夜子の私室に現れ、恐れおののく彼女の頭蓋骨を細い触手で叩き割つて殺した。

因みに軟体種とは、禽獸種の水棲無脊椎動物版とでも言つべき種族である。但し形質の中に節足動物は含まれていない。

始祖である小夜子が殺害され、構成員もほぼ絶滅した事で、クブス一派は実質的に壊滅。

こうして人々の暮らしがまた、平和に戻つていった。因みにこの『クブス一派壊滅』が起こったのは、繁がカタル・ティゾルにやつて来るより30年ほど前の事。

薬師の老婆トリロは最初の恋人であつた漁師の青年を小夜子によって奪われ、更に姉もまたクブス一派によつて殺された為、クブス一派に対し激しい怨みを抱いていた。

そしてその怨恨は師から弟子へと受け継がれ、香織もまたクブス一派を凄まじく嫌つていた。

第三十三話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします（後書き）

次回以降、戦闘激化！

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ（前書き）

但し何をするのかは不明！

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそりですよ

前々回より

壮絶な魔術合戦は尚も続いていた。

香織とクエイン、赤と青とで対を成す二人はどちらも古式特級魔術を習得する程の達人でこそあつたものの、この手の戦闘に用いられるような『攻撃魔術』についてはからつきしだった。

しかしだからといって相手に攻撃を行えないという訳ではなく、方や常軌を逸した変形を続ける建物で、方や宙に浮かぶ雑貨や瓦礫で、相手に執拗な攻撃を続けていく。

「封獄式、六角触腕柱！」

香織の放つ魔術により変形した床材と天井から細い六角形の棒が無数に伸び、クエインの中軸を貫かんとする。

「効かぬわ！ チョーク・バレットオ！」

それを巧みに避けたクエインは、箱入りチョークを空中で砕いて再結合させ、それを散弾のようにして放つ。

散弾として放たれたチョークもまた香織操る不定型なテーブルによつて防がれ、その脚が無数の鋭い針となつてクエインに襲い掛かる。しかしその針もクエインは巧みに避け続け、体内に残つた針は吐き出す序でに香織に放つ。

とまあ、ざつとこんな流れがもつかれこれ出会つて以降一時間半以上も続いていた。

途中、多少ばかり長めの会話休憩（三十一話参照）を入れてこそ居

たものの、それでも戦闘時間が長い事に変わりは無かつた。

そしてこんなに長い時間をかけていながら、未だに両者一步も譲らぬ拙戦が続いていた。

故に『どちらが有利か』と問われたと仮定しても、『一概に断定的な回答は出せそうに無い』という回答が精一杯とでも言えれば良いか。兎も角二人の戦いには、よくある魔術師の持つ魔術そのものの『美しさ』だとか『健全な迫力』等というものはない。

よくある変身や召喚を行うにしても『幻想的』である以前に『暴力的』であり、また『ゴーモラス』である以前に『ショッキング』である為、児童向けアニメや少年誌にはまず向かないような戦いが繰り広げられていた。

一方その頃

遙か上の階で戦っていたのは、繁と桃李であった。

「アンタの、ヴァーミンの正体はともかくとしてその姿は何だあ！？」突如姿が大幅に変貌 といふより、全く別物とでも言つべき姿になつた桃李に、繁は問う。

しかし、それに対する桃李の答えは實に暢気なもので

「ああ、これですか？まあ何といふか、有資格者が『』のアイデンティティを自覚し始めた際の姿とでも言つておきましょうか」

「アイデンティティの自覚！？曖昧過ぎんだろ！」

つうかお前、靈長種と見せかけて実は擬態してた外殻種でしたってオチか！？ああ！？」

珍しく取り乱す繁だが、彼が取り乱すのには当然、明確な理由があつた。

ところのも、現時点での桃李は『エメラルドグリーンの『キブリ型ヒューマノイド』とでも言つべき姿を取つており、以前の面影が殆ど無いに等しかつたからである（あつて精々声と頭部の体毛程度）。

「まあ良い、アンタのヴァーミンの正体についての回答はついてんだ」

「ほお……では貴方は、私のヴァーミンの象徴と能力詳細についてどのようにお考えで？」

「その姿から見るに、象徴は『キブリ』で間違いあるめえ。で、肝心の能力詳細だが……『温度』だろ？」

際限なく油っぽいのをどつからか出すつてのも確かに能力だらうが、あくまでオマケ程度のモノでしかねえ。

その本質は物体の温度を自在に操作して、燃焼や凍結を引き起こすことにある。違うか？」

「…流石ですねえ、象徴は兎も角そこまで見抜くだなんて、やはり貴方は別格ですよ。

私の『ヴァーミンズ・ショースチ ロックローチ』は、『キブリの象徴を持つ第六のヴァーミン』。

厳密に言えばこの『ローチスリック』の量にはそれなりの制限がありますし、分泌も身体の一部に存在する油膜腺からしか生成出来ませんが、ほぼ正解と言つて過言ではありません

「ワイヤーんや俺の足を止めたのも、その油か？」

「ええ。ローチスリックは高い可燃性を持つ一方、冷却して凝固させるとポリエチレンテレフタラートにも匹敵する強度を得るという、奇妙な性質を持つています」「P.E.Tか、どうりで硬いわけだ。ワイヤーんが抜け出せないのも頷ける

「それを抜け出す貴方はどうなんでしょうねえ」「気にしちゃ負けだ」

そう呟いた繁は、両腕を斜め下30度程に伸ばし、掌を背面に向か、

右膝を僅かに曲げた。

「……一体何を始めるんです？」

そんな桃李の間に、繁は軽々しく答える。

「さアて、何かねエ。ただ一つ判る事があるとすりやあ、この構えはさつきアンタが取つた奴を、俺流にアレンジした奴だつて事だ」

その時繁は、全身の血管が脈打つような感覚に襲われていた。

一方その頃

「ぎこやつはああああああ！何でこんな事になつてんのおおお！？」

学校などでしばしば見かける『廊下走るな』の掲示も無視して廊下を全力疾走する二コラ。

そんな彼女の後を追い回すのは、極太の木材で尻の穴を掘られ怒り狂うラクラ ではなく、二コラの身長の倍以上程もある直径の、岩石球であった。

「一体何なのよこれはつ！？」

何！？古典的な防犯装置！？古典的過ぎるわあつ！

一体何処の古代遺跡よ！？

如何なる原因によつても死ぬ事の無い不老不死である二コラであつたが、彼女の神経細胞はいつ何時とて正常に作用していた。つまり彼女の体質は「死にさえしないが、痛みはしつかり感じる」という厄介なものである。

とは言え、『嘗て自身の身体で人体実験を行つた二コラが何故死を恐れるのか』等と疑問に思う方も居る事だろつ。

確かに二コラは嘗て自身を用いた人体実験を、苦痛も含み存分に楽

しんでいた。

しかしながら彼女は、どういったわけか実験によるものでない苦痛を楽しめないのである。

これは彼女自身にとつても不明瞭な事柄であり、明確な答えは出せない。

しかし弁解の術は考えてあり、熟考しても答えが出ない場合『乙女心』という奴だ』と答える事にしている。

『乙女心』とは、『女子力』『小悪魔系』等と並んで『コラ』にとって好ましくない単語である。

しかしながら、安易で軽々しい言葉なので弁解に使おうとも罪悪感などあつて無いが如しといふものである。

かくして『コラ』は時折『乙女心』『女子力』『小悪魔系』等の単語を使うのである。

さて、そういうじている間にも『コラ』と岩石球との不毛な追走劇は続いていた。

「しかし本気で何なのよ」の岩つ！？

曲がり角減速無しに余裕で曲がるわ、上り坂だらうと平然と猛スピードで転がるわ、廊下に面した部屋に隠れても追つて来るわ、突っ込んでも突っ込み切れないのよ…」

等と叫びながらもどうにか逃げ続けていた『コラ』であったが、ふと何かを踏ん付けて足が滑る。

「あつ」

『コラ』がそれに気付くつとも、最早状況は手遅れであった。

廊下に落ちていたパンの袋で大きく滑った彼女の身体は、忽ち砕石球によつて潰され、そのまま張り付いてしまう。

結果として一回りは、砕石球に張り付いた状態で再生しては潰され、また再生しては潰され、といつ悪夢の如し無限ループに陥つてしまつた。

そしてそのまま、砕石球は転がり続ける。

行く先に何があらうと、決して止まりはしない。

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ（後書き）

次回、繁に新たなる力が！

第二十五話 女神様の言ひかたつゝー(前書き)

一方そのうえ、二つの非道な罠にかかった二ノ瀬は…

第三十五話 女神様の声ついおじつ！

前回より

今の今まで自慰と騎乗位性交を主軸に、満たされたることなき性的欲求の処理を行つてきたラクラには、肛門性交の経験などと言つものが一切無かつた。

この事はクブス一派の教義に反するものでなく、感染症のリスク等もある程度軽減できる為、彼女にとつては都合がよかつた。

しかし今回ばかりは、それが裏目に出てしまつたようである。

自分の大便より太いものを通した事の無かつた彼女の肛門にとつて、角を削つた角材はあまりにも太すぎた。故に女性器では余裕に快楽と感じる刺激も肛門では激痛へと成り代わり、その痛みは彼女を氣絶にまで追い込んでいたのである。

意識の飛ぶ中、彼女は謎の声により起つられる。

ラクラ、ラクラ。起きなさい。

「（ん……こ……一体？）」

目覚めたラクラは、光り輝く幻想的な花畠に居た。

「こ……まさか、天国？
もしかしてラクラ、死んじゃつた？」

立ち尽くすばかりのラクラ。

しかしそこへ、穏やかな女の声がラクラに優しく語りかける。

『ラクラ、ラクラ、漸く起きたのですね。辛かつたでしょう?でももう大丈夫です』

「誰!?」

ラクラが振り向いた先に居たのは、肌の白い全裸の女だった。女は見たところ20~30代程。

膝の間接まで伸びたピンク色のロングヘアはウェーブが掛かっており、その体つきは諸々に於いてラクラ以上に肉付きが良かつた。というか、乳房が異様に肥大化している。

『私は性愛と快樂の女神パイオ・マンマン。クブス一派が開祖・小夜子の甘美で氣高き意思の象徴』

「女神……さま……?」

『ラクラ・アスリン、我が愛娘よ。

貴女はこの世にある他の何より尊く崇高なクブス一派の栄光が為に戦わねばなりません。

その戦いは辛く厳しいものとなるでしょう。

ですから私は、貴女に至高の力を授けます』

女神の言葉を受けたラクラが静かに頷く一方、他の面々は未だ戦場にあつた。

蟲と虫

スバーン!

唐突に繁の全身から解き放たれた衝撃波は、元々軽い小樽兄妹を軽々と吹き飛ばした。

「す……凄まじい力……無自覚初級者かつ見よう見まねとはい、これだけの威力とは……」

地面に倒れ付す桃李は、ふと衝撃波の根源に目をやる。

塵と土煙の舞う中にたたずむのは、当然我等が主人公・辻原繁…である筈なのだが、土煙が晴れるに従つて現れたシリエットは、人を乖離した異様なものであるようだつた。

完全に土煙が晴れ、露になつたその姿を見て桃李は絶句する。しかし誰より驚いていたのは、他でもない繁自身であつた。

「（何だこいつは…？

これが俺の、パワーアップつて奴なのか？）」

見様見真似の上、何が起ころるかも全く解らない状態で全身に力を入れてしまつた繁は、桃李以上に人を離れた姿になつていた。

全体的なフォルムこそ長身瘦躯な人間のそれであつたものの、全身黒い外骨格に覆われ、手足も節足の様な形状であつた。

頭は滴型とも多角錐とも言える形状で、首と呼べるものはない。

背には折り畳まれた翅が備わり、腹部側面からは細い節足が生えている。

そんな姿になつた繁が驚きとある種の感動により立ち戻くしている

と、桃李が言った。

「破殻化成功おめでとうございます。

これで貴方も晴れて並の有資格者の仲間入りです」

「破殻化？この変身の事か？」

「はい。能力への順応が進行したヴァーミンの有資格者には、象徴

である生物種の力を最大限に活用する変身能力の使用が許可されるのです」

「それが、破殻化か」

「はい。『外殻を突破し新たな己へと変化する』といつ意味合いで
しょうね」

「どうか」

「しかし驚きましたよ。

まさかこれ程早期に破殻化を達成する有資格者が居るとは

「……何故俺の破殻化が早いと判った？」

「それは判りますよ。

先程の貴方の動向や、私の破殻化を見た時の反応がまず素の驚愕で
したし、外皮の質感も違いましたし」

「質感まで見通すか。

流石だ。兄妹揃って敵なのが惜しまれる。

お前が居れば良いラジオ番組が作れるだろ?」

「私達もそう思います。

貴方と一緒に、きっともっと大きくて面白い事が出来たでしょう
に」

「まあ、出来ない事をあれこれと言つても空しいだけだ。

敵対しちまった事を悔いつつ、最後くらい派手に行こうじゃねえか

「そうですね。今は出て来れませんが、兄もそう言つてます

「んじゃ一丁、やつちまつかア」

桃李は背の翅で空へ舞い上がり、追う繁田掛けて炎の塊を放つ。

中枢に油を仕組んだメラミンスポンジの球体を据えたそれは、突風

はおろか流水でも簡単には消せない火力を誇る。

しかし、それらが飛来するべき時、繁は既に姿を消していた。

「（何処へ消えた……？

まさか、光学迷彩ツ！？それともまさか……）」

考えを巡らせる桃李に、内部から語りかける者が居た。

兄・羽辰である。

『（桃李、彼は上です！

天井にしがみついて、今にも飛び掛からんとしています！）』

「（上…？

……）」

桃李が気付いた時、彼女の首は繁の腕四本に捕まっていた。

繁は空中で身体を巧みに高速回転させ、桃李を床に投げつける。投げつけられた桃李は、立て続けに降り注ぐ溶解液を、凝固させた油の盾で受け流す。

当然盾は溶解液の前に成す術も無いが、桃李はそれを、流体力学の知識を生かした造形と裏側からの素早い補強で補い繁に対抗せんとする。

お互に譲つて精々数歩という戦いが続くも、その終わりは当人達の意思とは無関係に訪れた。

桃李の身体を支えていた床が、盾を縁取るようにして丸くとくべぐられてしまつたのである。

「！？

（しまつた！まさかこんな事になるなんて…）」

桃李はまたも出遅れた。

落ち行く床の上で天井を見上げれば、既に繁がドロップキックを放つて居る。

軽く硬い外骨格同士がぶつかり合い、桃李の下腹部に衝撃が走る。

そのまま一人は下の階まで落^ハしてい^クが、事態は「」で思わぬ方
向へ進んで行く。

下の階の床に差し掛かる直前、突如横から凄まじい運動エネルギー
を内包した物体が現れたかと思つと、一人を勢い良く跳ね飛ばした
のである。

二人を跳ね飛ばし、上の階の床材兼下の階の天井であつた建材の塊
を打ち砕いた末に黒板へ激突し動きを止めた。

「いつてエ… 一体何が起こつたってんだ……？」

繁が辺りを見渡すと、そこは散々に散らかつた大教室であつた。
しかもどういう訳か 否、訳そのものは分かつてゐるのだ。兎に角
魔術に伴つて発生する残り香がそこらじゅうから漂つてくる。

「いや冗談抜きで、何が何だつてんだ？」

繁はひとまず、隠れて様子を見ることにした。

第三十五話 女神様の言つとおりっ！（後書き）

遂に目覚めた繁の新たなる力！

次回、戦いは思わぬ方向へこじれ始める！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8961v/>

ヴァーミンズ・クロニクル

2011年10月10日14時09分発行